

Complete Second Season



THE Peke-Files

**Little Mustapha**

"the Peke Files "

the Complete 2nd Season

Book #3

Little Mustapha

## 主な登場人物

これはシーズン2全体の登場人物紹介なので、全ての話にここに出てくる人物が登場するとは限りません。

### オックス・モオルダア・ムスタファ

FBI（エフビーエル）特別捜査官。天才的推理と「少女的第六感」で数々の難事件を解決：…するのか？  
ふとしたことから自分が正規の捜査官ではなくてバイトであると知りショックを受ける。特別捜査官の「特別」とはそういう意味だったのか？ そういうこともありシーズン2のモオルダアは自信喪失気味な感じもある。

### ダナア・スケアリー・ザ・プリンセス

モルダアのパートナー。死体を切り刻むのが大好きな検死官。（無免許）  
常に冷静であり完璧でエレガントであると思っている。たまにはそのとおりになることもあるが、それが高じてうぬぼれにつながることも。またいろいろなことにコンプレックスを抱いているような一面を見せることもある。

### アンタモ・スキヤナー

FBI副長官。モルダアたちに上から指示を出す人。シーズン1では一番偉い人だったが、シーズン2になるとエフ・ビー・エルにはその他の偉い人が出てくるようになり、彼は板挟みの中間管理職みたいな立場になってしまう。一応、モオルダアとスケアリーのことを第一に考えようという気はあるらしい。一応、直属の上司だから。一毛が薄いので髪は短くしている。ハゲを隠さないといういさぎよい一面もあるということ、なの？

## ミスター・ペケ

隠居した怒<sup>ドドメキ</sup>百目鬼<sup>ツママル</sup>鐵円に変わってモオルダアやスケアリーにいろいろ裏情報を教えてくれる謎の人物。ドドメキとは違い常に威圧的な態度でモオルダア達に接する。

## ウイスキー・ドリinkingマン

常にウイスキーをラップ飲み。闇の組織の一員。裏で糸を引く男。色々たくらむ男。(酒がなくなると急に弱くなる?)

## 蔵衣地・A・ロドリゲス

ハーフのような名前だが、純粋な日本人。便宜上たいていの場合「クライチ君」と呼ばれるので、下の名前はどうでもいいのである。

ペケファイルの二人の足を引っぱるだけでなく、闇の組織の手先でもある。ただし常に自分の都合を優先させる性格なので、どこの「闇の組織」の手先になるかは展開次第。

## ローン・ガマン

政府や社会の裏に渦巻く陰謀を暴こうとしている秘密組織。作者の都合で新しく誰かを登場させるのではなく、これまでに登場した人物を起用することにした。

## ヌリカベ君

化学やハイテクに関することに詳しい。無口すぎて必要なことすらなかなか話さない。彼が唯一の「ローンガマン」の正式メンバーである。ヌリカベ君はメンバーが二人以上になると「ローン・ガメン (manの複数形でmen)」に名前を変えなくてはいけないのではないかと考えていて、そうすると名前の由来である「ローンを我慢する」という意

味がなくなってしまおうので、彼以外がメンバーにはいることは認めていない。

大学時代は演劇部で死体役や壁の役を専門としていた。常にダークなオーラで人々をゾッとさせる。

#### 元部長

ヌリカベ君のいた大学の演劇部で部長をしていたが、演劇とギャンブルに没頭していたため学業がおろそかになり大  
学を中退する。ちょうど同じ頃大学院を辞めた先輩のヌリカベ君が始めた「ローンガメン」のアジトに居候している。  
得に特殊技能があるわけではないが「演劇じみた演技」は得意である。

#### フロシキ君

詳細は未設定。本家「エックスファイアイル」に合わせるなら「ローンガマン」は三人いないといけないので、そのうち  
三人で登場するかも知れないし、しないかも知れない。

#### エフ・ビー・エルの職員たち

物語の進行上に得に意味がない限り、彼らはエキストラである。エフ・ビー・エルのビルディングで忙しそうに動き  
回っているが、実はそれはただビルの中を歩き回っているだけで、その行動に目的があるわけではない。

#### その他

エピソード毎に紹介。



## #017 「KIMOE」

### 1 夜のお屋敷

大きな屋敷というのは誰でも一度は住みたいものではあるが、そこに一人で住むということはあまりしたくないだろう。それが古い屋敷ならなおさらである。静まりかえった屋敷の中にとくとく居たいはずの部屋から物音が聞こえてくるような、そんな不気味な雰囲気がある。事件はそんなお屋敷で起きる。果たして事件として良いものかは知らないがこれから何かが起きるような、薄気味の悪い夜である。

この古くからある高級住宅街には大きな家が沢山あるのだが、その中でも特に大きな家を囲む柵の外で先程から一人の男が家の中の様子をうかがっている。古い家が多く、またそれらの家には庭があつて沢山の庭木が植えられていたりするので、この辺りは夜になると他の住宅街と比べると暗い。街灯は普通に灯っているのだが、家々の塀から張り出した木の枝がその明かりを遮っている。

男が居るのは道路から少し奥に入ったところである。そこは男が様子をうかがっている屋敷のとなりの家の敷地なのだが、その場所に特に塀などは設けられておらず、誰でも容易に入り込めるようになっていて。それに、その家の明かりは全て消えていて、誰も敷地内にこの男が潜んでいるということには気付かないだろう。時刻はもうすでに零時をすぎている。この家の住人は昔ながらのゆるいセキュリティを信じて眠りについていてに違いない。

男が様子をうかがっている大きな屋敷は、柵の向こうの裏庭を挟んだむこうにそびえている。戦前に建てられたと思われるこの洋館はその古さのために幽霊屋敷と呼ばれてもおかしくないようなたたずまいである。街灯の明かりもほとんど届かないこの不気味な洋館を前にして男は何をしているのか解らないが、この場所に潜んでいるのにはそれなりの理由があるに違いない。

全ての明かりが消えた隣の家とは違い、洋館の二階の一室だけに明かりが点いている。男は先程からずっとその明かりの点いた部屋を見つめていた。始めはほとんど身動きせずに二階の部屋を見ていた男だったが、次第に手で握った小さなものを潰すような仕草で両手を動かしてみたり、貧乏揺すりを始めたり、落ち着かない様子になってきた。そして、おもむろに携帯電話を取り出すと、どこかへ電話をかけた。

男が通話ボタンを押してしばらくすると、洋館の中から電話の呼び出し音が幽かに聞こえてきた。男が電話をかけた

先はこの洋館だったようだ。呼び出し音が鳴り始めてもなかなか電話に出るものはなかったが、その間に男の息づかいは荒くなり少し興奮してきているようだった。すると男の居る場所から一番近い部屋の明かりが点いた。

明かりが点くと、外からは中の様子がよく見えるようになった。そこにはこの洋館にふさわしい西洋風の家具が置かれ、壁には大きな絵が飾られているのがわかる。するとそこに若い女性の姿が現れてその部屋に置かれていた電話の受話器をとった。この時この女性の姿を見ていた男の興奮は最高潮に達したようで、思わず震える鼻息を自分の携帯電話に吹きかけた。受話器から女性の耳に気味の悪い鼻息の音が吹きかけられた。窓のむこうの女性は慌てて受話器を置くと、これ以上ない不安の表情で部屋の中を見回した。見回して何かが見えるわけではなかったが、この電話が彼女の身に危険が迫っていることの証拠だということは感じていたようだ。

窓のむこうに女性の姿が見えなくなると、部屋の明かりが消えた。それからしばらくすると、先程まで点いていた二階の明かりも消えた。

男は洋館の明かりが全て消えた後もそわそわと落ち着かない感じだったが、彼の中に沸き上がる感情を抑えきれなくなったのか、男は柵を乗り越えて洋館の裏庭に侵入した。

彼は今自分が何をしようとしているのかは解っていない。とにかく先程窓の向こうに現れた女性に近づきたかったのだ。家の中に入って女性を見つけただして、それから何をするかは彼の「沸き上がる感情」が決めることなのだ。男がふと我に返った時に目にするのは血だらけの女の死体なのか、それとも後ろ手に縛られて猿ぐつわをされた女性の姿なのか「沸き上がる感情」に支配されている男には考えることも出来なかった。しかし、その結末は彼にも「沸き上がる感情」にも予想できないものだった。

男は先程、自分が洋館の様子をうかがっていた時から何かに監視されていたことに気付いていなかったのだ。洋館の一階と二階の間にあるひさしの上から虚ろに輝く二つの目のようなものがずっと男の姿を捕らえていたのだ。そして男が柵を越えてこの中庭に入ってくると、それはひさしから飛び降りて男の前に立ちはだかった。

目の前に現れた何かの姿を見て立ちすくんだ男ではあったが「沸き上がる感情」に支配されている男は常人のような反応はしない。悲鳴をあげたり腰を抜かしたりするわけでもなくただ目の前に現れた何かを見つめていた。

男の目の前に現れた何かは突然鋭い爪のある手で男の顔を両側からつかんだ。男はその時幽かに常識的な感覚を取り戻したのか、その手がヌルヌルしていると心の中で思った。きっとそれが男が最後に思い浮かべた言葉になるのだろ



う。男の顔をしっかりとつかんだ何かはそのまま男を引きずって庭の奥の暗がりへと消えていった。その数分後には、男の姿も何かの姿も裏庭から消えていた。洋館の中にいた女性の通報により駆けつけた警官が庭で見つけたのは血の海だった。

## 2 早朝のお屋敷

連絡を受けたモオルダアはスケアリーよりも一足早くこの怪しい事件の起きた現場へ到着していた。移動手段が公共交通機関であるモオルダアは迅速に事件現場へ駆けつけることは困難なのだが、モオルダアの住んでいるボロアパートはこの洋館へ無理をすれば歩いてこられる範囲内にあるのだ。古くからある高級住宅街と、モオルダアのボロアパートのある古くからある普通住宅街が一つの街にあってもおかしくはないだろう。

しばらくこの手の事件から遠ざかっていた上に、私の都合で事件らしい事件はほとんど起きなかったので、すっかり勘の鈍ってしまったモオルダアは眠そうな目をこすりながら洋館の中に入って行き、裏庭に広がる血の海を見ていつものように短く情けない悲鳴をあげていた。

「これは一体どういうことですか？」

モオルダアは近くにいた刑事に聞いた。刑事はモオルダアが小さく悲鳴をあげたことにちよつと驚いていたが、質問をしてきたモオルダアが必要以上にさつきより冷静になっているのも気になった。モオルダアは自分の悲鳴をごまかすに必死だっただけであるのだが。

「詳しいことはまだ解らないのですが、何かの血液である可能性は高いです。この臭いといい」

臭いと聞いてからモオルダアは初めて辺りに立ちこめる生臭い血の臭いに気がついた。なにしろ寝ぼけ眼でやって来たのだから、そんなことにも気付かなかったようだ。そこでモオルダアはもう一度悲鳴をあげそうになったのだが今回は何とかこらえることが出来た。

「血液って言っても、これは一人の人間の体内にある血液よりもそうとう多いと思うけどねえ？」

「詳しいことは調べないと解りませんよ」

当たり前のことを聞いたモオルダアに当たり前の答えを刑事が返した。「それもそうだ」と思いながらモオルダアは誰かに呼ばれて立ち去る刑事を眺めていた。それからふと思ひ出したように自分の持っていたカバンを開けると中からデ

デジタルカメラを取り出した。

それはエフ・ビー・エルから持ちだしてきた物ではなく、彼の物のようだ。いつの間そんな物を手に入れたのか知らないが、私が the Peke-Files をサボっている間に手に入れたに違いない。型落ちではあるが新品の一眼レフデジカメである。

モオルダアはそのデジカメでいろんな角度から裏庭に出来た血溜まりの写真を撮っていった。こういうことに夢中になると恐いとか気持ち悪いとかそういうことは関係なくなるようで、壁に飛び散っている血痕などいろいろな物を写真に収めていく。

ちよんどそこへスケアリーがやって来た。

「ちよいと、モオルダア！ 何をやっているの？」

「証拠はデジタルで鮮明に保存しておかないとねえ。後で重要な手掛かりになるんだから」  
スケアリーの方はほとんど見ないでモオルダアが答えた。彼はまだ写真を撮るのに大忙しな感じである。

「そういうことはあたくし達じゃなくて警察の方がやるんじゃないかって？」

確かにそうである。しかも警察はモオルダアが到着する前に現場の写真は撮り終えてあるのだ。それでもモオルダアはせっかく買ったデジタルカメラが使用したいので、そこに気付いても写真を撮り続けている。

「ボクらが呼ばれるような異常な事件ではねえ、警察はだいたい何かを見落としているんだよ」

そう言ってモオルダアは今日初めてスケアリーの方を見た。そして思わず悲鳴をあげた。いきなり悲鳴をあげるモオルダアにスケアリーも驚いたが、それはすぐに怒りに変わる。

「ちよいと、どういうことですか？ 人の顔を見て悲鳴をあげるなんて！」

スケアリーに睨まれたモオルダアは我に返ったがスケアリーの顔は思わず悲鳴をあげてしまうような顔のままだった。彼女の唇に塗られた口紅が右側だけ唇から大きくはみ出して耳の近くまで赤い線を描いている。半分だけ「口裂け女」になっているのだ。

「ねえ、それって今流行ってるの？」

流行っているわけはないが、とりあえずモオルダアはスケアリーの頬の辺りを指さして聞いてみた。

「何を言っているのか解りませんがあたくしは常に最先端の…」

と言いつつも、スケアリーは自分の顔におかしなところがあるのではないかと思い、横目で洋館のガラス窓に映る自分

を見てみた。朝日を浴びて眩しいこの庭と裏腹に薄暗い部屋との間にあるガラスは鏡のように彼女の顔を映している。それを見てスケアリーは自分の右頬にあり得ない線が引かれていることに気付いた。

「あらいやだ！ あたくしタクシーの中でお化粧をしていたものですから……。オホホホ！」

スケアリーは笑いながら口を押さえたが、それは笑いを隠すためではなくて思いつきりはみ出した口紅を隠すために違いなかった。スケアリーはそのまま、彼女の顔を修正できる場所を探してどこかへ行ってしまった。

おそらくタクシーの中で口紅を塗っている時にタクシーが揺れて口紅が大きくはみ出したに違いない。しかし、事件現場にやって来るのにメイクの必要があるのか？ とモオルダアは首をかしげていた。

### 3 お屋敷の中

洗面所で口紅を落として普通の顔に戻ろうと洋館の中に入ってきたスケアリーは一瞬言葉を失って洋館の中の光景を見回していた。

「ステキ！」

と手で隠している口の中でつぶやいた。この洋館はスケアリーが子供の頃「こんなお屋敷で優雅な暮らしをしたい」と思っていたお屋敷の見本のようなのだ。吹き抜けの天井から吊られているシャンデリアや二階まで弧を描いて伸びている階段。無駄に広いこのエントランスの先には両開きの扉がある。その扉の向こうにはまたステキな大広間があるに違いない。

しばらくの間、このステキなお屋敷での優雅な生活を夢想してしまったスケアリーだったが、自分がここへ来た理由を思い出した。

「ちよいと。だれかいらっしゃいませんか？ 洗面所をお借りしたいのですけれども」

スケアリーの言葉は広い室内に虚しく響いただけであった。この広いお屋敷に誰もいないのは少しおかしいとスケアリーは思った。こんな家には、あるじとその家族以外にも使用人などがいて、家に誰もいなくなるなんてことは無いと思うのは誰でも一緒なのであろう。しかし、この家のたった一人の住人は外にいる刑事と話をしているため、この家は誰もいないのだ。

「あの、聞こえているかどうか解りませんが、あたくしエフ・ビー・エルの権限で洗面所をお借りしますわよー」

そんな権限はないのだが、スケアリーは早く自分の顔を何とかしたいので中へと進んでいった。静まりかえっているお屋敷が少し不気味だったためスケアリーは早くここを出たくなったのかも知れない。よく見ると正面の扉の他にこのエントランスから左右に延びる廊下があることに気付いた。洗面所があるとしたらこのどちらかですわね、と勝手に推測してスケアリーは右側の廊下を進んでいった。

この家のたった一人の住人は出増田<sup>デマシタ</sup>希茂恵<sup>キモエ</sup>という若い女性である。昨晚、となりの家の敷地に潜んでいた怪しい男からの怪しい電話を受けて、彼女が警察に通報したのだが、それから警察が駆けつけてくるまでに庭で何かが起きて例の血溜まりが出来たというわけだ。

キモエが警察に話したところによると、昨晚電話をかけてきたのは真佐下<sup>マサシタ</sup>史郎<sup>シロウ</sup>という男に違いない、ということだ。マサシタは以前にもキモエへのストーカー行為で逮捕されていて、この付近に近づくことさえ禁止されていたのだが、そんな男が禁止されたからといってストーカー行為をやめるとは限らない。昨晚の電話でマサシタが近くに来ていていると思いきモエは迷わず警察に通報したのだ。

そこまでは良いのだが、警察が庭にある血溜まりのことを聞くとキモエは何も知らないと言いつ張るのだ。あれだけの血溜まりが出来た騒動が起きたのなら家の中にも何かの物音は聞こえるはずだ。お屋敷といっても古い建物なので遮音性はそれほど良いわけではない。しかし、それだけでキモエを疑うわけにもいかず、困り果てた警察はエフ・ビー・エルのペケファイル課に協力を要請したのである。

廊下を進むスケアリーの目には壁にかけられた何枚もの絵が入り込んできた。誰かの肖像画や風景画であったが、この廊下の薄暗さのためかどれも気味の悪い印象をスケアリーに与えていた。廊下にある縦長の窓からは外で検分が続いている警官達の姿が見え隠れしている。この陰鬱な印象の絵画の並んでいる薄暗い廊下から見ると早朝の庭はまるで別の世界のように感じられた。

スケアリーは壁にかけられた絵をなるべく見ないようにしながら廊下を進んで洗面所を探したのだが、一度左に折れて進むと廊下は終わり突き当たりのドアのあるところまで来てしまった。スケアリーは戻ってもう一方の廊下を探して見ようかとも思ったのだが、誰かの姿を見るまでは外の世界から切り離されたように異様な雰囲気の中を廊下を戻る気がしなかった。

「あたくしエフ・ビー・エルですけれど、入りますわよ」

スケアリーはいつもとは違ったハリのない声で言うのと突き当たりの扉を開けた。

そこはあまり大きくない部屋だったが、大きな窓があり廊下よりは明るかった。窓の外にはデジカメで写真を撮っているモオルダアの姿があった。この部屋に入って少しホツとしたスケアリーであったが、それもつかの間であった。部屋を見回したスケアリーは窓と反対側の壁に大きな絵が飾ってあるのを見つけたのである。モオルダアならその絵を見て小さく悲鳴をあげていたところだが、スケアリーは何とか息を詰まらせるだけでこらえることができた。

「何なんですの、この絵は？」

スケアリーは多少震える声でつぶやいてから、絵の前へと進んでいった。廊下にあった絵はどれも不気味な感じはしたが、どれも現実世界にあるものを写したものであった。それに不気味さは廊下の薄暗さのためだったかも知れない。しかし、この絵は明らかに見るものに不快な印象を与えることを目的に描かれたとしか思えなかった。

離れたところから見たその絵は、燃えるような赤い皮膚をもった悪魔の姿に見えた。痩せぎすの体に衣服はつけておらず、微笑むかのように開かれた口には鋭い牙があった。そして虚ろではあるが、その目はしっかりと絵を見る者を睨みつけている。暗い背景にそのような姿が浮かび上がっているのがあった。

背筋にヘンな寒さを感じながらゆっくり絵の前まで来たスケアリーはまた違うことを発見した。この悪魔のような何かが赤い皮膚をしていると思っていたのだが、それは皮膚ではなかったのだ。これは皮を剥がれた人間のようにも見えたのだ。近くで見ると皮の下にあるドロドロした感じの肉や血管などが鮮明に描かれているのが良く解った。

しかし、どうしてこんな絵を描くのだろうか？ 無免許だが遺体の解剖もするスケアリーではあったが、この絵は実際の遺体よりも恐ろしい感じがする。実際の遺体ならこんな恐ろしい目で睨みつけたりはしないし、鋭く伸びたかぎ爪で襲いかかってくるような仕草はしないはずである。スケアリーは寒気を感じて身震いすると全身に鳥肌を立てながらその絵を見つめていた。

その時、スケアリーの背後にある扉がガタリと開いた。スケアリー自身は認めたくなかったが彼女はこの時、驚きのあまり少しだけ悲鳴のような声を漏らしていた。

ドアのところ立っていたのはキモエであった。ここにスケアリーがいるとは知らなかったキモエもスケアリー同様に驚いていたようだった。しかも、半分口裂け女のスケアリーだったので。一方、スケアリーは自分の顔のことなどすっかり忘れていた。

「あの、失礼しました。警察の方ですか？」

驚きで言葉の出でこないスケアリーよりも先にキモエが聞いた。スケアリーは呼吸を整えるまでに少し時間がかかったが、ようやくいつもの冷静さを取り戻したようだ。(自分の顔のことは忘れているが。)

「あたくしは警察ではなくてエフ・ビー・エルの特捜捜査官のスケアリーですよ」

そう言っただけでスケアリーはエフ・ビー・エルの身分証をキモエに見せた。キモエはエフ・ビー・エルが何のことだか良く解らなかつたが、警察のようなものだろう、と思い納得した。

「あなたはこの家の方かしら？ なんだかこのお屋敷は人がいなくておかしい感じがすわね」

「ええ、私一人しか住んでませんから」

スケアリーは自分の想像していた優雅な生活、つまり使用人が食事の用意や身の回りの世話などをしてくれる生活とまったく違う生活をキモエがここで送っていると解り、目を丸くしていた。

#### 4 キモイ絵の部屋

スケアリーが想像していたお屋敷での生活はキモエが一人でここに住むようになる前からなかつたようだ。キモエの話すところによると、使用人などがこの屋敷にいたのはキモエの祖父の代までで、それ以降は使用人を雇えるほどの経済的余裕はなくなり、キモエと両親の三人だけで暮らしていたそうだ。画家としてそれなりに成功していたキモエの父だったが、それだけで豪華な暮らしが出来るとは思わなかった。もちろんこれだけの広さの家と庭の管理をするには、年に何度か業者を呼んで庭の手入れや敷地内の清掃などをしなければいけないのだが。

三人でも寂しい豪邸での生活だったが、二年前に起きた悲劇によりキモエはこのお屋敷に一人残されることになった。キモエの両親を乗せた乗用車が交通事故に巻き込まれ、二人とも帰らぬ人となったのだ。親類からはこの屋敷を手放して別のところに住むようにと言われたのだが、キモエは愛着のあるこの屋敷を離れるつもりはなかつた。

スケアリーは自分の顔が半分口裂け女になっていることなどすっかり忘れて、神妙な面もちでキモエの話を聞いていた。

「でも、こんな広いお屋敷に一人だけじゃ寂しくありませんこと？」

スケアリーが聞くと、キモエはにやつくような表情になって答えた。

「あなたも芸術的な感覚をお持ちのようですから、解ってくれると思いますが、こういうちょっと特異な環境って芸術家に良いインスピレーションを与えてくれるんですよ」

芸術的な感覚とはスケアリーの片方だけ耳の近くまでのびている唇のことを言っているのだろう。それに気付いていないスケアリーはちよつと得意げになっていた。

「それじゃあ、あなたもお父様と同じ画家ということですか?」

「表向きにはそういうことになっています。でも私にはまだ父のような絵は描けません。実際に売れるような絵は一枚も描けていないのですから。父の残してくれた財産で生活しているのですから、画家というよりは女ニートです」

「あの、ニートは女も男もニートですよ」

スケアリーは自分の言っていることが間違いではないと解っていたが、こんなことを説明してみると、なんだかヘンなことを言っているような気分になる。

「それは違います!」

キモエは少しムキになって言い返した。

「男のニートと女のニートは区別しなきゃいけないんです。今では何でも平等って言ってますけど、それは全然平等じゃないんです。男と女を区別することは差別ではありません。女は女で特別なんですから。そんなことも解らないで男と女を同じにしてしまつては女性の価値がなくなつてしまいます。看護師ではなくて看護婦。フライトアテンダントではなくてスチュワーデスでいいんです。女がニートなら女ニートなんです」

熱く語るキモエにスケアリーは何も返す言葉が浮かんでこなかった。もしかするとこれが芸術的な感覚なのだろうか? ただしそんなことを気にしていても意味はない。次第に冷静になつていくスケアリーは、先程キモエが「女画家」と言わなかったのはなぜかしら? と思つたのだが、そこは気にしないことにした。

「ええ、あなたの言うことも、もつともですわね。それよりも、あたくしが受けた連絡によると、通報したのはあなただそうですわね。あなたにストーカー行為をして捕まったマサシタという男が近くに来たということ」

「そうです。あれはまさしくマサシタです。やり方が前と一緒に解ります。この家の電話のある部屋はちょうど隣の家から見える場所にあるんです。だからマサシタはこの家に電話をかけてきて私が電話に出るのをとなりの家の敷地から見えていたんです。そしてある時マサシタがこの家に侵入してきたのですが、その時は父がいてマサシタを捕ま

えてくれたので、そのまま警察に連れて行って逮捕ということになったのです。でも今回は私一人ですから私は急いで自分の部屋に戻って携帯電話で警察に通報すると、そのまま目立たない物置部屋に隠れていました」

「それじゃあ、外で何が起きていたのかは解りませんか？」

ここでスケアリーはキモエを疑うことも出来たのだが、それはあり得ないような気がしていた。本来ならキモエが家に侵入してきたマサシタを殺害して、この広い敷地のどこかに遺体を隠したりした後に警察に通報したと考えることも出来る。しかしスケアリーにはキモエがそのようなことをする人間とは思えなかった。

スケアリーの質問に黙って頷いたキモエにスケアリーも黙って頷いて返事をした。

「警察の方は私のことも疑っているみたいなんですよ」

キモエはスケアリーが警察と同じように彼女を疑っているような質問をするのだろうと恐れていたのだが、それがないので少し安心していた。そして警察には話さなかった事もスケアリーに話しても大丈夫だと思いはじめた。

少しの間うつむいて黙っていたが、キモエは言いにくそうな感じでスケアリーに話し始めた。

「これは私の考えなんですけど、もしかするとその絵が私を救ってくれたんじゃないかって、思ってるんです」

キモエが指さした先には先程の気持ち悪い悪魔のような何かの絵があった。今は絵から離れたところで話をしていたスケアリーであったが、この絵に描かれた「何か」はどの角度から見ても見る者の方を睨んでいるような描き方で描かれているようだ。キモエの指さす方を見て、悪魔のような何かに再び睨まれてしまったスケアリーは、またしても言い知れぬ恐怖を感じて鳥肌を立てた。

「この絵は父の遺作なんですけど」

キモエが先を続けた。

「この絵を描いている時に父は、これはこの家の守り神だ、なんて言うてました。少しグロテスクですけど、私はガーゴイルとかそういう物として描いているんだと思っていました」

少しどころではありませんわ！ とスケアリーは思っていた。キモエはまだ先を続ける。

「でも、最近私はこの絵がこの家のために描かれたのではなくて、私のために描かれたのではないかと思っていました。父は昔から私のことを可愛がってくれましたし、マサシタの事件があつてからすごく心配しているようでした。それに、他の絵とまったく違う作風のその絵には父の感情の全てがこめられているような気がするんです。だから、以前に父がマサシタを捕まえたように、昨日もそこに描かれたものがその絵を飛び出して私を助けてくれたんじゃないかっ



て…」

芸術的な感覚のある人は時々こんなことを本気で話したりしてしまうのだろうか。この絵がどうしても苦手なスケアリーはそんな話は聞きたくなかった。この絵に描かれたドロドロした悪魔のような何かが現実世界に現れるなんて想像もしたくない。それに、こんな話を聞く役割はエフ・ビー・エルの男捜査官がやるべきなのだ。

スケアリーが窓の外に目を向けるとそこにはまだモオルダアがいて、意味があるか解らない現場写真を撮っている。明るい庭からはこの部屋の中はよく見えないよう、二人がこの部屋に居ることをモオルダアはまったく気付いていないようだ。

スケアリーはキモエの言うことに反論するよりも、無言で窓に近づいてい行くと窓を開けてモオルダアを呼んだ。

「ちよいとモオルダア！ 女ニートさんがあなた好みの話をしてくれそうですわよ！」

いきなり呼ばれて少しビビっていたモオルダアだったが、女ニートと聞くとへんな顔をしながら振り返った。

「女ニート!？」

男捜査官のモオルダアがへんな顔のまま聞いたが、スケアリーにはどうでもよかった。

「どうでも良いですから、そんな写真撮影はやめて早くこの部屋にいらしたらどうなんですか？」

モオルダアはスケアリーがまだに半分口裂け女のままだということに疑問を抱いたが、他にもいろいろへんなことだらけな感じなので、そこを気にしている暇はなかった。とにかく急いで屋敷の中に入ってスケアリーのいる部屋に行かないと、スケアリーが怒り出しそうなテンションなので、モオルダアは言われるままにお屋敷の玄関へと向かっていった。

## 5 (まだ) キモイ絵の部屋

スケアリーと呼ばれてこの部屋に入ってきたモオルダアは先程のスケアリーのようこの家の薄暗い不気味さを怖がっている様子はなかった。スケアリーよりも早く到着したモオルダアは周囲の警官達の会話からこの家に住人が一人しかいないことは知っていたし、何よりも「女ニートってなんだ？」という事で頭がいっぱいだったので、この部屋にやって来るまでの幽霊屋敷的な廊下を通る時にも何も感じていなかったのだ。

それでも、この部屋に入ってきたモオルダアが最初に目にした赤い悪魔のような何かの絵には、ちよっとギョツとし

てしまった。スケアリーの他にキモエという若い女性がいるので、そんなところは見られたくはなかったのだが、ギョツとしてしまったものは仕方がない。そういう時に、モオルダアはそんなことを「なかったこと」にしてしまうので余計に気取った感じになる。

「キモエさん。こちらはエフ・ビー・エルの男捜査官のモオルダアですわ。モオルダア。こちらは女キモエさんですよ」

女キモエさん、というのは間違っているがスケアリーがヘンに気を使って紹介した。モオルダアは奥にある例の絵が気になってチラチラそちらを見ていたので、ヘンな紹介をされてもあまり気にしてない。どうやらこの部屋にやって来て初めてこの絵を見るものは、それまで考えていたことも忘れてこの絵に圧倒されるのかも知れない。

「これはスゴイ絵だなあ」

モオルダアの分かり易い感想である。

「キモエさんはその絵がマサシタからキモエさんを守ったと言っていますわよ」

「というと？」

モオルダアの疑問にキモエが答えた。

「昨日、マサシタがこの家の敷地に侵入してきたのですが、その絵に描かれた守り神が絵から飛び出して私を助けくれたんです」

スケアリーはモオルダアがどんな反応をするのか興味津々であった。

「キモエさんは、その現場を見たの？」

モオルダアの反応はスケアリーの期待どおりでもなく、それを裏切るものでもないビミョーなものだった。

「いいえ、私は物置に隠れていましたから。でも確信はしています。父があれだけ気持ちよこめて描いた絵ですから、私の身に何かが起きるといふ時にはそういうことが起こって当然です」

「それじゃあ、外の血溜まりはマサシタの流した血だということになるねえ。ただし、問題はあれが本当に人間の血液か？ ということだけ。それに、あの量は一人の人間の体内にある血液の量を超えているよねえ。マサシタという男がどんなに大きくてもあれだけの血液はあり得ないよ」

さすがのモオルダアも絵から飛び出した怪物がマサシタを襲ったとは思っていないようだ。或いは朝早くから呼び出されて眠いので、そこまで想像力が働かないのかも知れない。しかしモオルダアの「少女的第六感」はこの事件にマサシ

タとキモエの他にもう一人、或いは数人の人物が関わっていると彼に伝えていた。それからついでにモオルダアは恐ろしいことを思いついてしまった。

「もしも、庭の血液がマサシタの流したものでなかったら、マサシタはどこにいるんだろう？　もしかして、警察が来る前にこの家に侵入するのに成功して、このいくつもある部屋はどこかに隠れているとか…」

それは、それで恐ろしい話であるし、あり得ないこともない。キモエは急に怯えて顔を青くしている。庭に出来た血溜まりのせいで、警察も屋敷の中までは調べていない。スケアリーもその可能性は否定できませんわね、と半分口裂け女のまま深刻な表情をしていた。

「これは、この家の搜索と警備を警察にお願いするべきですわ！」  
そう言うって、スケアリーは慌てて部屋を出ていった。これから警官達は半分口裂け女の彼女を見てギョツとするのだから。

キモエはまだ青白い顔をして怯えていたが、それを見てモオルダアは「大丈夫ですよ」とも言えず、どうしていいのか困っていた。予定になく怯えている女性にかけるセリフは用意してないようだ。気まずい感じでそわそわしていたモオルダアは何となく壁の絵の方へと近づいていった。

近く来ると、この怪物の表面を覆っている血のような脂肪のようなものの質感が、まるで実際にそこに存在しているもののように現実的なのでモオルダアは思わずそれに触ってみたくなくなって手をのばした。

「触らないでください！」

モオルダアがもう少しで絵に触れるというところで、キモエが慌てて制止した。モオルダアは驚いて手を引っ込めると、すまなそうにキモエの方を見た。キモエがそれに気付いていたのか解らなかったが、黙って絵の前までやって来た。

「この絵は私を守ってくれてるんです」

涙ぐんだ目で絵を見ながら、ほとんど泣きそうな声でキモエが言った。こんな様子を見てさらにかける言葉を失ってしまったモオルダアは仕方なくキモエのしている絵の方へ視線を移した。そこで、絵に描かれた怪物と目が合うとモオルダアはまたギョツとしてしまった。そして、そこへ部屋の窓を叩く音がしてモオルダアはさらに驚いて小さな悲鳴をあげながら振り返った。

窓の外にいたのはスケアリーだった。モオルダアが窓を開けると半分口裂け女のスケアリーは少し納得できない感じでモオルダアに伝えた。

「どうやら、家の搜索はしなくて良さそうですわよ。警察がマサシタを捕まえたんですって」  
奥の絵の前でそれを聞いたキモエはホッとした表情で二人の方を見ていた。モオルダアの思いつきの推理ははずれたのだが、彼はこの屋敷の中でどこから飛び出してくるかわからないマサシタを搜索するのは恐かったので、キモエと同様にホッとしていた。

「ところでキミ。そのメイクはやっぱり最新の…」

ホッとしたモオルダアが、ホッとしたついでにスケアリーのメイクのことを聞こうとしたが、最後まで言う前にスケアリーは慌てて口元を隠して再び屋敷の入り口へと向かった。去り際にモオルダアを睨みつけることだけは忘れなかった。

## 6 FBI・ペケファイルの部屋

モオルダアは回転椅子の上で足を前に投げ出した恰好で椅子を左右にユラユラさせながらダラダラしていた。彼の前の机の上には先程の事件現場で彼が使っていたデジタルカメラとその説明書が投げ出されていた。

撮影したデジタルカメラの写真をパソコンで表示しようとしたモオルダアだったが、やり方が良く解らない。先程までしばらく説明書をペラペラめくっていたのだが、朝早くに起こされたため眠気でまったく集中できなかった。今はデジタルカメラは諦めてダラダラすることにしたのだ。

ダラダラしながらモオルダアはキモエの屋敷にあったキモイ絵を思い出してみた。「そういえば、達人の描いた絵の中の動物が絵から抜け出すという昔話があったっけ？」と考えてみたが、そんな昔話を調べたところで意味があるとは思えない。

しかし、あの絵はまさしく達人の絵だ。地獄からこの世へやって来た魔物のような、言い知れぬ恐ろしさと、今にも動き出しそうな迫力がある。あの絵から怪物が抜け出して人を襲ったと言ったら、きつと何人かは信じるかも知れない。

そんなことを考えているうちにモオルダアの座っている回転椅子のユラユラがおさまってきた。どうやらモオルダアは眠気に耐えきれずにウトウトし始めたようだ。椅子の動きが止まってモオルダアは浅い眠りに入ろうとしていた。現実と夢の境目にいたモオルダアの目の前にあの怪物が突然姿を現した。モオルダアがその存在に気付くよりも前にそれは牙を剥きだしてモオルダアに襲いかかってきた。

モオルダアが悲鳴をあげながらビクツとして目を覚ましたので、その勢いで彼の座っていた椅子がひっくり返った。

何とか後頭部を強打せずに済んだのだが、椅子が倒れる途中にモオルダアのヒジが前の机にぶつかったようで、ヒジから先がビリビリしている。

ヒジをさすりながら起きあがったモオルダアは辺りを見回して誰もいないことを確かめた。夢に驚いて椅子ごと倒れたところを誰にも見られていないと確認して少し安心している。

とにかく、これで目が覚めたので何かを始めることにした。モオルダアは一度机の上の説明書に目をやったが、その説明書を読めばまた眠くなりそうな気がしていた。しばらく考えた後、彼はペケファイルの部屋から出ていった。

## 7 FBI研究室

何に使うのか良く解らない機械が並んでいるこの研究室には、やっと普通の顔に戻ったスケアリーが、キモエの屋敷で採取した血液のような液体を分析していた。分析結果を書き出した紙を見ながらスケアリーは不思議そうにしている。あの庭にあったものは血液のようではあった。しかし、その量が多すぎるために血液以外のものである可能性も大いにあったのだが、スケアリーの予想よりもそれは不可解なものだったようだ。

ちようどそこへモオルダアがやって来た。デジカメの写真を解析するのをあきらめたモオルダアは何となくここへやって来たのだ。

「何か解った？」

モオルダア同様に寝不足のスケアリーは機嫌があまり良くない。モオルダアの声を聞くと恐ろしい目をして彼の方に振り返った。一瞬たじろいだモオルダアだったが、睨まれるようなことはまだ何もしていないので、そのままスケアリーの返事をまった。

「こんなものは見たことはありませんわ」

そういつてスケアリーはモオルダアに分析結果の印刷された紙を渡した。そこには棒グラフのようなものと折れ線グラフのようなものが描かれていたが、モオルダアには何のことだか解らない。でもスケアリーはなんだか機嫌が悪いようなのでモオルダアは理解したような感じでそれを眺めていた。そんなモオルダアの姿を見てスケアリーはあきれて説明をはじめた。

「人間を液体にしたらきつとそんな感じになるはずですわ」

モオルダアにはスケアリーが何を言っているのかまだ理解できなかったが、興味はわいてくる。

「ということは、あの場所で誰かが液体人間になってしまったということだね？」

「なんですの、液体人間って？ そんなんじやなくて、あれは強力な酸とか酵素とかで体のあらゆる組織が溶解されて出来た液体である可能性がある、ということですよ」

二人とも言っていることはだいたい同じなのだが、スケアリーの言い方のほうが説得力があるのが不思議である。

「とにかくあの場所で誰かがドロドロに解かされたかも知れない、ということだね。その液体人間の身元は解らないのかなあ？」

「そんなことはもっと詳しく分析しないと解りませんわ。それよりも、あなたはここへ何しに来たんのですの？ ちゃんとした分析が終わったらあなたにもお知らせいたしますから、あなたは自分の仕事をしていてくださらないですかしら？」

モオルダアに水を差された感じのスケアリーはまた機嫌が悪くなってきた。「自分の仕事」と言われてもやることがないからここへ来ただけなのだが、モオルダアはスケアリーが怒り出す前に研究室を出ていくことにした。

## 8 警察署

取調室に漂う悪臭は次第にその勢力を拡大して外の廊下にまで達していた。ここには遺体の放つ腐敗臭などには慣れてしまっているベテランの警官も大勢いるのだが、辺りに充満している臭いは悪臭という言葉では表現しきれない強烈なものだった。吸い込んだだけで肺や気管支が腐って溶けていくような、そんな感じさえた。

警察署内はこの悪臭のために騒然となっていたため、マサシタの取り調べはなかなか始まらなかった。なにしろこの悪臭はマサシタのいる取調室からしているのだから。いったい誰が臭い取調室に入ってマサシタに話を聞くのかでもめているようだ。

取り調べは始まっていなくても、マサシタを一人にするわけにはいかず、取調室には新米の警官が一人でマサシタの見張りをしていた。その警官は鼻の穴に詰め物をして、その上にさらにマスクもしていたのだが、悪臭の源であるこの部屋ではそんなものは無意味である。今すぐにでもこの部屋を出ていかなければ彼の胃の中にあるものが吹き出して来

そんな気がしていたが、新米の警官としては何とか与えられた仕事をこなそうと頑張っていた。

新米の警官は脂汗を流しながらじっと正面のマサシタのほうを睨んでいる。マサシタのほうも警官のほうを見ているように見えるが、その瞳に警官の姿が映っているのか良く解らないぐらい虚ろな目をしている。ただ目を開けているだけで、その正面に警官がいるから彼のほうを見ているように見えるだけなのかも知れない。

マサシタの顔には太い針金で引っかいたような傷がいくつもある。時々小刻みに体を動かすとその傷の下に見える肉が不自然な感じで移動しているようだった。肉が見えるほどの傷なのだが不思議と出血はしていない。

そんなマサシタの様子を見ていた警官は気味が悪くて仕方がなかったが、ここは警察署である。何かが起きた時には大声で助けを呼べば周りはほとんど彼の味方である。臭いのさえ我慢すれば、新米警官として立派に勤めを果たすことが出来るのである。そう思って生真面目な新米警官はさらに力を入れてマサシタを睨みつけていた。

マサシタはユラユラ動いたり、時に震えるように小刻みに動いていたが、そういうことを続けているうちに次第に顔に出来た傷が広がりだした。すでにある傷口から新しい傷が亀裂のように伸びていく。元々あった傷口から何本もの亀裂が伸びそれは互いの傷口をつないでいった。それぞれの亀裂が一本の線でいびつな四角形でつながると、その切り取られた四角形の部分の皮がべろりと剥がれて床に落ちた。その下には体の動きにあわせて伸縮する筋肉が見えていた。目の前で見ていた警官はこの予想もなかった光景に声もあげられず、マサシタを凝視したまま固まっていた。そうしている間にも彼の目の前ではマサシタの顔に出来た亀裂は広がっていき、何枚もの細切れになった皮を床に落としていった。

次第に皮がなくなって皮膚の下の脂肪や筋肉があらわになっていくマサシタを見ながら新米の警官は恐怖と悪臭のためにととうとう気絶した。

## 9 FBI・ペケファイルの部屋

スケアリーに研究室から追い出されたモオルダアは仕方なくペケファイルの部屋に戻ってきて、先程あきらめたデジカメの画像をパソコンで表示させることに挑戦してみた。説明書を読むのがもう面倒になっていたので、勘だけを頼りにやってみると意外とあっさり成功して「ボクって天才かも」といった感じのモオルダアだったが、今ではまたパソコンのモニタを見ながら困っていた。

するとそこへスケアリーが勢いよく扉を開けて入ってきたのでモオルダアは驚いて顔を上げた。スケアリーの様子からすると特に怒っている感じはなかったので安心した。きっと例の液体を分析した結果、不可解な事実が明らかになったに違いない。

「ちよいとモオルダア。あたくしには良く理解できませんわ！」

いきなり言われてモオルダアにも理解できない。

「何が？」

「あの液体の中に人間の皮膚のようなものが見つかったんです。それでそれをDNA鑑定してもらったら、なんとマサシタのDNAと一致したんですよ」

「ということは、昨日の夜にマサシタがああ場所に行ったということは証明できるかも知れないねえ」

「そうなんですけれど、問題は どうして皮膚だけが溶けずに残っていたのか、ということですよ」

「まあ、そうだねえ。でもマサシタは警察署にいらんだからあの液体に解かされた人間は別の人間だよ。後から来たマサシタがああ場所で皮を落としていったのかも知れないし」

皮を落とすなんてことは普通の人間の動作ではないが、マサシタは普通ではないし、警察署ではボロボロと皮を落としていた。しかし、モオルダアにはそれはどうでもよかったのかも知れない。彼は別のことを考えていたようだった。

「もしかしてマサシタはずっと前に死んでいるという可能性はないかな？」

「あなた、何を言っているんですの？ マサシタは今、警察に捕まっているんですよ！」

「でもねえ、ボクが撮った写真によると何か霊的な力がああ場所で働いていた可能性があるんだよ」

そういつてモオルダアは目の前のパソコン画面を指さした。スケアリーがモニターを覗き込むとモオルダアは屋敷で撮影した写真を一枚ずつ表示させていった。それらの写真は全てノイズがひどかったり、ピントが合っていないような状態だったりして、何を撮影したのか解らない状態だった。ああ現場で気付いていけば、原因が解ったのかも知れないが、現場の異様さとデジカメを使えるという喜びで撮影した写真の確認などはしていなかったのだ。

「何なんですか、これ？ こんなひどい写真は見たことがありませんわ！もしかしたらカメラが壊れているんじゃないんですか？」

「そんなことはないよ。それにこのカメラを買ってから何度か練習で撮影してるから操作を間違えることもないし」



そう言いながらモオルダアはおもむろにカメラをスケアリーに向けてシャッターを切った。突然カメラを向けられたにもかかわらずスケアリーは写真用の顔を作って写真に収まった。デジカメの液晶画面に表示されたスケアリーの「美人に写る顔」にモオルダアは一瞬息を飲んだが、そんなところに感心している場合ではない。

「ほら、ここではちゃんと写るんだよ」

スケアリーはデジカメの液晶画面を覗き込むと理想的な顔に写っていることを確認して満足していた。

「本当ですわね。でもそれだから何だというの？」

「自縛霊がいるといわれる場所とか、そういう心霊スポットでは写真のシャッターが降りないとか、上手く撮影できないとか、あるでしょ？」

「確かにあのお屋敷は幽霊屋敷みたいでしたけど」

スケアリーは今朝のあの屋敷の不気味さを思い出してまた鳥肌を立てていた。

「だからといって、どうしてマサシタがすでに死んでいることになるんですの？」

「さあ、それは何となくね。あの液体が酸に溶かされた人間の体ではなくて、エクトプラズムのようなものだとしたら、と思ってるね。その中にマサシタの皮が見つかったのだからそれはマサシタの霊が残っていたエクトプラズムというところも考えられるしね。今、警察にいるのはマサシタの幽霊かも知れないよ」

「何を言っているのか解りませんわ！」

私にもモオルダアが何を言っているのか解りません。

「とにかく、写真が上手く撮れないということとは、なにか霊的な力が働いていることがあるんだよ。ウワサによるとこのエフ・ビー・エルの地下にもそういう場所があるらしいよ。このビルの敷地の一部が昔、墓地のあったところで、ここでは時々へんな物音がしたりするんだとか。それで、怪しいと思ったエフ・ビー・エルの職員が監視カメラを設置したところ、そのカメラは時々ノイズだらけになって写らなくなってしまいうらしいんだ」

「ちよいと、やめてくださるかしら！ あたくし今日はそんな話は聞きたくないんですのよ」

スケアリーはまたさらに鳥肌を立てていた。そして、しばらく考えたあとモオルダアに聞いた。

「それって、まさかこの部屋じゃないでしょうね？」

スケアリーが柄にもなく怖がっている様子なのでモオルダアは嬉しくなってなかなか答ええない。ニヤニヤしないように気を付けながらモオルダアは真剣な表情でスケアリーを見たままだった。

すると突然部屋の扉が音を立てて勢いよく開いた。

「おい！ モオルダア！ 何をやっているんだ！」

この突然の出来事にモオルダアだけでなく、スケアリーも驚いて飛び上がりそうになっていた。振り返るとそこにはスキヤナー副長官がいた。

「ちよいと！ 部屋に入る時にはノックぐらいしたらどうなんですの！」

スケアリーが猛烈に怒っている。

「いや、モオルダアを驚かそうと思って……」

一応モオルダアを驚かすのには成功したが、スケアリーがいるとは思わなかった。スキヤナー副長官はだんだん小さくなっていきそうな雰囲気だったが、それよりもペケファイルの二人に伝えることを思いだした。

「そうだ！ キミ達。大変な事になったぞ。警察署からマサシタが消えたんだ。それから警官も一人行方不明だということだ！」

スキヤナー副長官が「消えた」と表現したために二人ともマサシタ幽霊説を信じてしまいそうな勢いである。

「消えたって、どういうことですか？」

スケアリーが確かめる。

「消えたっていうのは、つまりいなくなっただけのことだな」

スキヤナー副長官の答えは当たり前のことを言っているだけだが、モオルダアはあまり納得していない。

「そうじゃなくて、煙のように消えたってことでしょ？ というよりも幽霊のように、と言う方がいいのかな？」

スキヤナー副長官は二人が何でこんなことを言うのか、良く解らなかったが、警察署からマサシタと警官が一人いなくなったということだけは確かである。それを伝え終わるとスキヤナー副長官は首をひねりながらペケファイルの部屋を出ていった。

それよりも、どうしてスキヤナー副長官経由でこういう知らせがあるのか不思議だが、最近あまり登場していないスキヤナー副長官の出番を作っただけだ。

それはそうと、モオルダアとスケアリーはこのままブーツとしているワケにはいかない。それが生きている人間であろうと、幽霊であろうと、怪しいマサシタは行方不明なのだ。

先程までマサシタと新米の警官がいた取調室には、キモエの屋敷にあったような血溜まりが出来ていた。今では、それは人間が溶けて出来た液体ということは解っているのだが、見た感じはどうしても血溜まりという感じがするのだ。モオルダアとスケアリーは先程キモエの屋敷でも見かけた刑事から話を聞いている。

「すると、この警察署のどの出口の監視カメラにもマサシタは写っていないということですね」

スケアリーが念を押して聞いている。刑事の話によると、マサシタをここにつれて来た時から消えるまでの監視カメラの映像は全て調べたが警察署から出ていくマサシタの姿は写っていないかったということだ。

「でも裏口に設置してあるカメラの映像は三秒ほどノイズがひどくて確認できないんですが…」

刑事が言うと、モオルダアが興味を示した。

「三秒あればカメラの前を横切れることは可能だよな？」

「まあ、そうですね…」

「ボクにその映像を見せてくれないかな？」

刑事は頷いてモオルダアを監視カメラのモニタがある部屋へ連れて行った。

スケアリーはモオルダアがそんな映像を見ても何も解るはずはないと思っていたが、他にやることもないのでついていった。

問題の映像はすぐに再生できた。警察も録画した中でこの箇所以外に怪しいところはないと思っていたようで、その部分は何度も再生されていたようだ。

「40分30秒ぐらいからおかしくなりますよ」

刑事が言うのを聞いてモオルダアは画面に映る時刻を確認した。画面の中の時計は2時40分20秒を過ぎたところだった。裏口とそこへ続く廊下を映している映像だったが、裏口とあってほとんど人が通らない。

映像は30秒手前辺りから徐々に乱れ始めた。映像全体が引かれた弓のように湾曲していき、ほとんど映像の内容が確認できないような状況になった時にそれは砂嵐のような映像に変わった。そして刑事が言ったとおり三秒ほどでまた元に戻った。

「なんだか、あなたの撮った写真と似ていますわね」

スケアリーの言葉にモオルダアはただ頷いただけだった。それからモオルダアはもう一度再生するように頼んだ。再生

が始まって、再び映像が確認できないところまで画面が歪んだところでモオルダアは映像を止めるように言った。

「これは人の影に見えない？」

モオルダアが一時停止している映像の画面の一部を指さした。刑事は少し驚いてその映像を見ていた。映像が歪んでいるためにほとんど線にしか見えないのだが、そこには黒っぽい陰が見えている。

薄汚れて灰色がかってはいるが、その廊下の床も壁も白く、正常な映像の時に黒く写る場所は全くなかった。モオルダアの指摘した黒い影はそこに何者かがやって来たことを示しているのかも知れない。

「エフ・ビー・エルの設備を使えばこの映像は復元できるかも知れませんか」

スケアリーが言うともオルダアと刑事は「信じられない」という感じでスケアリーを見ていたが、言ってみただけスケアリーも出来るかどうかは知らなかった。ただ、デジタルのビデオカメラの映像なら何とかなるんじゃないか、とは思っていたようだ。

少し間をあけてモオルダアが気になっていたもう一人のことを刑事に聞いてみた。

「ところで、マサシタと一緒にいなかった警官ってのは？」

聞かれた刑事は少し弱った感じで顔をしかめてから答えた。

「それが、あの新米の警官は正義感だけは人一倍だったんですけど、その何倍も気が小さくて……。我々があんなのにマサシタの見張りをさせたのがいけなかったのかも知れませんが、もしかするとマサシタと一緒に取調室に居るのが恐くなって逃げ出したんじゃないかと思ってるんですよ。彼の自宅や行きそうな場所はいろいろ調べているんで、すぐに見つかるとは思いますがどねえ」

「それはひどいですわ！」

スケアリーの言葉には怒りも感じられた。

「そんな新米の警官に警備をまかせて、あなた達は一体何をしていたと言うんですの？」

「いや、それが……。あまりにも臭かったもので……」

「臭かった!？」

モオルダアとスケアリーが同じような感じで聞き返した。マサシタがいた時には地獄のような悪臭が漂っていた警察署だが、今ではそんなことは少しもわからない。取調室の周辺だけはあの液体の臭いがしていたのだが、それまでの署員が全員パニックになりそうなあの悪臭はもうどこかへ消えてしまったのである。

「つまりマサシタが凄く臭かったということですかね？」

「ええ、言葉で言い表せないぐらいに」

「それじゃあ、昨日の夜もあのお屋敷の辺りは臭かったのかしら？」

「付近の住民に聞いてみたところ、そんな話は少しもありませんでしたよ。それに、あの臭いだったら、どこでだって大騒ぎになりますよ」

刑事の答えからその二オイの規模はだいたい解ったが、それが解っても特に意味はなかった。

「二オイが原因でビデオカメラの映像が乱れるのかしら？」

「さあ…？」

スケアリーのヘンな推測には「さあ…？」と答えるしかない。

「もしかすると、霊体というのは凄く臭いのかも知れないよ」

「ああ…」

モオルダアのさらにヘンな推測には「ああ…」としか答えられない。

とにかく三人ともこれ以上ここで話しても意味がないと気付いたようで、それぞれ次の行動に移ることにした。刑事はマサシタと新米警官の行方の搜索を。スケアリーはエフ・ビー・エルの研究所でビデオの解析。モオルダアは、何をしようか考えていた。

## 11 FBI 研究室

ここは先程スケアリーが液体の分析をしていた研究室とは違う研究室である。映像や音声の分析などを主におこなうこの研究所は先程の研究室よりもスッキリとした感じだが、そこにある機械がどんなものなのか良く解らないのは先程と同じである。

スケアリーはそこにいた技術者に監視カメラの映像が記録されたディスクを渡すと技術者は怪しい微笑みを浮かべながら受け取った。その様子からすると、この技術者は以前のエピソードで登場して密かにスケアリーに思いを寄せているあの技術者に違いない。しかし、スケアリーはそんなことをまったく覚えていないようだった。

「この部分なんですけれど。何とか普通に映るように出来ないかしら？」

スケアリーがいびつに歪んだ映像を見ながら技術者に聞いた。技術者はしばらく黙って画面を見ていたが、スケアリーのほうに向き直ってまた怪しい微笑みを浮かべた。

「何とかしてみますよ。スケアリーさん」

そう言って、怪しい微笑みをまたさらに怪しく引きつらせた。スケアリーは少し気味が悪いと思ったが、そんなところを気にしていても仕方がない。スケアリーは作業を始めた技術者のやることを黙って眺めていた。

技術者は映像を再生している機械の出力をいくつかの機械に数珠繋ぎにしていた。それらの良く解らない機械の先には別の画面がある。始めそこには元の乱れた映像が映っていたが、技術者が間にはさまれた機械をいじっていくと画面の映像は少しずつ変化していくようになった。しかし、それは複雑な作業のようですぐにはまともな映像にはならない。

しばらくするとスケアリーは研究室を出て、自動販売機で紅茶を買って戻ってきた。紅茶を飲みながら作業を眺めていたが、まだまだ終わりそうにない。するとスケアリーはまた外に出て、今度はブルボンの「シルベーヌ」を持って戻ってきた。「シルベーヌ」を食べながら技術者の作業を眺めていてもまだ終わらない。スケアリーはそのまま居眠りを始めてしまった。

## 12 キモエのお屋敷

モオルダアはキモエの屋敷へと通じる道を歩いていた。ここで彼は何をしているのだろうか？ キモエは若くてそこそこ美人なのだがモオルダア好みの美女ではないので、彼の目的はキモエに会うことではなさそうだ。彼の手に使い捨てカメラが握られていることからすると、きっと「デジタルではないカメラ」ではどんな写真が撮れるのかを確かめたいのだろう。

それを確かめたところで特に意味はなさそうだが、モオルダアの予期せぬ行動はたまに予期せぬ結果を導いてしまう。モオルダアが屋敷の門のすぐ近くまで来た時に、門から一人の男が出てきた。モオルダアにはそれは自分が良く知っている人間だとすぐにわかった。

「あれ？ クライチ君」

モオルダアは意外な場所でのクライチ君との再会に少し驚いていた感じだったが、一方のクライチ君はかなり焦っているようだ。モオルダアはほとんど気付いていないのだが、クライチ君は闇の組織の一員である。そしてクライチ君はモ

オルダアがそのことに気付いていると思っっているのだ。

「やべっ！」

そう言っつてクライチ君は振り返ると門の中へと走り去っていった。モオルダアは意味が解らず少し考えてしまったが、人の顔を見て「やべっ！」と言っつて逃げていくのは悪いことをしている人間に違いないのである。

「おい、待て！ クライチ！」

モオルダアがクライチ君の後を追っつて門の中へ入ると、屋敷の脇から裏庭のほうへと走っつていくクライチ君の姿が見えた。さらに追いかけるモオルダアであったが、裏庭に來るとそこにはクライチ君の姿はなかつた。

「おい！ クライチ君！ どこにいるんだ？ おとなしく出でこないと発砲するぞ！」

モオルダアは脇のホルスターから例のモデルガンを取りだして構えている。どこにいるか解らない相手に対して「発砲するぞ！」はおかしな話だが、全力で走っつた上に優秀な捜査官らしい緊迫した場面なのでモオルダアは舞い上がっつてしまっているようだ。

モオルダアはモデルガンを振り回しながら、植木の間を掻き分けてみたり大きな木の裏を覗いて見たりした。そんなことをずつと続けていたモオルダアだったが、いつの間にか二人の警官に押さえつけられていた。

「おい、おまえ！ ここで何をやっている！」

一人の警官が、腕をひねりあげられてヒヤッとヘンな悲鳴をあげているモオルダアに聞いた。

「ボクはエフ・ビー・エルの優秀な捜査官だ！ こんなことをしてただでは済まないぞ」

言っつていることは威勢がいいが、声は情けなく弱々しいかつた。もう一人の警官に後ろで手をひねりあげられているので仕方がない。取り押さえられたモオルダアの耳にすぐ近くで車を急発進させる音が聞こえてきた。それはきつとクライチ君に違いない。

この二人の警官は、今朝の捜索にモオルダアが來ていたことを知らないらしい。彼らは「庭に怪しい人がいる」というキモエの通報で駆けつつけた警官のようだ。モオルダアが何と言おうとこの二人の警官にとつてモオルダアは「怪しい人」なのだ。

もう少しで深い眠りに落ちようかというところでスケアリーは技術者に起こされた。誰でもそんな状況で起こされるのは気分が良くないものである。スケアリーも同様で、まだ完全に開ききっていない目で技術者を睨んだ。睨まれた技術者はその恐ろしい形相に驚いていたが、それを見たスケアリーも慌てて我に返った。

「あらいやだ。あたくしったら居眠りしてしまったようすわね。オホホホッ！」  
技術者はスケアリーに睨まれて百年の恋も冷める思いだったのだが、必死に取り繕うスケアリーにさらに魅力を感じてしまっている。スケアリーのほうでは技術者がそんな風に思っているなんて少しも気付いていないのだが。

スケアリーと技術者はともに再生できるようになった監視カメラの映像を見た。

「私には特にこの映像に問題があるとは思えませんけど」

再生を始めると同時に技術者が言った。映像は多少のノイズがまじってはいたが、そこに何が映っているのかは確認できた。それは一人の警官が裏口から出ていく映像だった。

「そんなことはありませんわ。これは問題ですよ」

スケアリーにはこの警官が行方の解らない新米の警官であることが推測できた。ただ不可解なのは、そこに映っている警官は恐ろしさに耐えかねて逃げ出す人間とはとても思えない、冷酷な表情をしていたことだ。自身の正義感が気の弱さとの葛藤に負けて逃げ出すことを選んだ人間の表情とは思えなかった。

「これはおかしな事になってきましたわ！」

てつきり、監視カメラに映っているのがマサシタだと思いこんでいたスケアリーはすぐに警察に連絡しようと携帯電話を取り出した。マサシタは一体どこへ消えてしまったのか？ もしも誰にも気付かれずに警察署を抜け出したとして、マサシタはどこへ向かうのか？ それはキモエの屋敷に違いない。電話が警察につながる前にそのことに気付いたスケアリーは、キモエのことが心配になって技術者に礼も言わずに研究室から出ていき、キモエの屋敷に向かうことにした。

スケアリーが無言で出ていってしまった扉のほうを見ながら技術者はため息をもらしていた。しかし、捜査に夢中になるその姿もイイ！ と思って、また怪しい微笑みをドアのほうに向けていた。



## 14 再びキモエのお屋敷

「だから、怪しい人というのはボクじゃなくてクライチ君なんですよ」

「何だ？ そのクライチ君というのは？ 我々は怪しい人が庭にいるとの通報を受けてやって来たら、庭に怪しい人がいたんだ。それがおまえだったんだから怪しい人はおまえなんだ！」

モオルダアと二人の警官は屋敷の門のところでも良く解らない言い合いをしていた。モオルダアがすぐに連行されないのは、この二人が自転車でここへやって来たためだ。パトカーが到着するまで警官とモオルダアのへんなやりとりが続けられるにちがいない。

彼らの言い合う声に気づき、屋敷の窓から外を覗いたキモエは慌てて玄関を飛び出して来た。

「この人は違います。この人はエフ・ビー・エルなんですから」

キモエが警官達に言うと、二人は少しガツカリしたような顔をした。庭に侵入した変質者をみごと捕まえるなんて、この二人にとっては初めてのお手柄だったのだから。

「だから言ったじゃないか。エフ・ビー・エルって」

モオルダアは得意げに二人の警官に向かって言ったが、警官達はエフ・ビー・エルって何だろう？ と思っていたので、どう返して良いか解らなかった。とにかくキモエが気付いてくれたおかげでモオルダアは警察署に連行されずにすんだようだ。

「助かりましたよ、キモエさん。ところで、あなたが見た庭にいる怪しい人っていうのはどんな人でしたか？」

モオルダアが優秀な捜査官の声でキモエに聞いた。

「恰好はあなたと同じ感じでしたが、あなたよりも若い感じで、あなたよりも美男子で、あなたよりも…」

「もういいですよ」

モオルダアは傷ついたが、それがクライチ君のことだということはいはだいたい解った。

「ボクは今回の事件には複雑な事情がからんでいるような、嫌な予感がするんだよねえ…」

少女的第六感がモオルダアに何かを告げようとしているのを感じながら、モオルダアは名探偵風につぶやいた。

するとその時、モオルダアの携帯電話が鳴り出した。モオルダアはまだ手錠をはめられたままだったが、後ろ手にはめられているのではなくて手は体の前にあっただけで電話をポケットから取り出すことは出来た。片方の手で電話を耳に当て、もう片方の手はアゴの辺りに不自然にぶら下がっていた。電話はスクエアリーからだった。

「ちよいと、モオルダア！ あなたは一体何をしているというんですの？」

「何をといわれてもねえ。ちよつとしたトラブルがあつて、まだ何にもしてないんだけど。でも凄い発見はしたんだけどね。今回の事件には何か大きな組織が関係してるんじゃないかと思うんだよ。キミはクライチ君が怪しい人間だって知ってた？」

「クライチ君？ あたくしあの人のことは良く知りませんし、どうでもいいと思つていましたから、解りませんわ」

「クライチ君がボくらに内緒でキモエさんの屋敷で何かをしていたんだよ。もしかすると、クライチ君は裏組織の人間かも知れないよ」

「あらそうですの。そんなことより、あなたはキモエさんのお屋敷にいますということですか？ それならあたくしがそこに行くまで待つていてくださるかしら？ あたくしもいろいろあなたに報告することがありますし」

ここで、手錠をかけられたまま電話をしているモオルダアを見ていた警官が手錠をはずそうと手をのばしてきた。一度モオルダアが電話を耳から離せば楽に手錠が外せたのだが、モオルダアがそうしないのでなかなか鍵が手錠の鍵穴に入らない。モオルダアも一応は電話を持っていない方の手の位置を変えてみたり、顔を斜めにしてみたりしたが、それだけではどうも上手くいかないようだ。次第に電話の内容よりも手錠のほうに気がいつてしまったモオルダアは電話を耳に当ててはいたが、話の内容はほとんど理解できなくなっていた。

「…ですのよ！ 解りました？」

「ん！？ まあ、そうだね」

「ホントに解っているんですの？ なんだかガチャガチャいってますが、何なんですのこの音は？ とにかく…あの映像は…マサシタがまだ見つからなければ…。ちよいと！ 聞いてるんですの？」

「うん、聞いているよ」

とは言ったものの、モオルダアの神経は手錠のほうに集中してしまっている。警官が鍵を差し込もうとする向きに合わせて手の角度を微妙に変える。するとあと少しのところの手首のところで止まっていた手錠が滑って動いてしまい、鍵は鍵穴に入らなかつた。

「おしい！」

「ちよいと！ おしい、つてどういふことですか？」

「うん。大丈夫だよ。ちゃんと聞いているから」

どう考えてもちゃんと聞いているとは思えない返事であるが、スケアリーがイライラしているようなのでここでいったん電話に集中することにした。

「とにかく、キモエさんの警備はあなたがするんですのよ！」

「なんで!？」

モオルダアが聞いた時にはスケアリーはすでに電話を切っていた。モオルダアが電話を耳から離して手を警官の前にもっていくと手錠は簡単にはずれた。モオルダアと手錠をはずした警官は納得のいかない達成感を感じながらお互いのほうを見て頷いていた。

不思議そうにモオルダアの様子を見ていたキモエであったが、それよりもこの屋敷や自分に何が起きているのかのほうに気になる。

「それで、いったいここで何が起きているんですか？」

「ああ、そうだったね。今のところ良く解らないんだけど、今日はボクがキミの警護をすることになるみたいだ」それを聞いたとたん、キモエは不安に表情を曇らせていった。モオルダアが彼女の警護をするのでは頼りないということではない。以前のマサシタの事件以来、キモエはどんな男性も信用できなくなっているのだ。いや、父親を除くどんな男性でもとらえなければならない。昨日までは、お屋敷に寂しく一人住まいでも何とかさういう不安を乗り越えて頑張っていたのだが、マサシタが再び彼女の近くに現れたことを知ってから彼女の男性に対する不信任はさらに深まっていたのである。

「あの、出来れば今朝ここへ来ていた女性の方に警護をお願いしたいんですけど」

モオルダアは自分がそれほど信頼されていないのか、と自信をなくすところだったが、キモエの様子からすると理由は他にありそうだと気付いたので落ち込まずにすんだ。

「まあ、それもそうだね。でも彼女が来るまではボクがここに居るけど、それはかまわないでしょう。」キモエは少し安心したようだ。

モオルダアはキモエに案内されて屋敷の各部屋を見て回った。そして人が入ってこられそうな窓の鍵がちゃんと閉まっているかも確認していた。中には鉄格子のついている窓もあったのだが、ここを建てた人間はそういう物が建物の美観を損ねると思っていたようで、ほとんどの窓は無防備な状態だった。

夕暮れ時で屋敷の中は朝よりもさらに暗かった。いくつあるか数え切れないほどの部屋を見て回る途中に、何年も使われていないカビ臭い部屋もいくつかあった。そういう部屋はまさに幽霊屋敷というかんじで、モオルダアも少し嫌な気分がしていた。

屋敷の中のどこをどんなふうに戻ってきたのか広すぎて解らなくなっていたが、モオルダアは最後にあの気持ち悪い絵のある部屋に案内された。この部屋には扉が二つあって、朝来た時とは別のほうから入って来たようだ。部屋に入った瞬間にモオルダアの脳裏にはあの絵が甦ってきた。あの絵は恐ろしいからなるべく見たくなかったのだが、そういうものに限ってどうしても目がそちらのほうにいってしまう。モオルダアがチラッと絵を見るとそこにはやはりあの恐ろしい怪物がいてモオルダアを睨んでいた。朝よりも暗くなっているこの部屋で、そこに描かれた怪物はさらに恐ろしく見える。躍動感というのか、生命力とでもいうのか。地獄の怪物みたいな物に生命力というのは変だが、暗い中では今にも飛び出してくるような感じがいつそう強まって見えるのだ。

朝と同様にモオルダアはまたしてもこの絵に魅入ってしまったが、その時突然、背後の窓をたたく音がして、また朝と同様にモオルダアは小さな悲鳴をあげて振り返った。薄暗い庭にいたのはスケアリーだった。

「何度もノックしたんですけれども、返事がないので心配してしまいましたわ。それに、警備がモオルダアですから」スケアリーはお屋敷に入ってくると辺りを見回しながら言っていた。誰かと一緒にいる限り、このお屋敷の不気味さはそれほどでもないかと確認しているかのようにだった。

「でも、外には警官も手配しましたし、モオルダアだけでも何とかかなりますわね」

「そのことなんだけどねえ。キモエさんはキミに警護を頼みたいって言ってるんだよね。キミがボクに警護をまかせるのも意外だと思ってたんだけど、でもやっぱり若い女性の警護は男捜査官よりも女捜査官だしね」

「それもそうですわね」

そう言うスケアリーの声は少し小さかった。確かにモオルダアの言うとおりだ。それにモオルダアを変態だと思ってい

るスケアリーなら若い女性の警護などさせるわけではないのだ。ただ、スケアリーはこの寂しく不気味なお屋敷にキモエと二人だけになるのは嫌だった。しかし、そんなことが理由でモオルダアに代わりを頼むのは彼女のプライドが許さない。

「もちろん、あなたよりもあたくしのほうが頼りになりますから、そうするべきですわね。キモエさんの警護はあたくしがいたしますわよ」

そう言ってスケアリーは出来る限り毅然とした感じが出るような目つきでキモエのほうを見た。それを見てキモエも安心したようだった。

「ところで、あのビデオはどうなった？」

スケアリーの心の葛藤などまったく気付いていないモオルダアが聞いた。

「ああ、そうでしたわね。あたくしはそれを伝えに来たんですから。あのビデオですけど、凄いですのよ！」

「やっぱりなあ。ちゃんと全部見えるようになれば凄いいことになるとは思っていたけどねえ」

キモエは二人の話聞きながら「あのビデオ」って何だろう？ と思っていたが、もしかすると自分が聞くべきではない変なビデオの話かも知れないと思って席を外した。

「確かにあそこには人がいたんですのよ」

「それが、マサシタだったんでしょ？」

「そうではなくて、あそこにいたのは新米の警官のほうだったんですのよ。あたくし、ここに来る前に警察署に寄って確かめてきましたから、間違いないですわ」

「ということはずまり…」

モオルダアもスケアリーも「つまり」の後に続く言葉は見つからなかった。沈黙の中、二人の頭上にはハテナマークが一つ、また一つと増えていった。

## 16 ローン・ガマンのアジト

とりあえずキモエの警護はスケアリーにまかせて、事件の謎を究明することになったモオルダアだが、何をしていたのか解らなかった。マサシタも新米の警官も依然として行方が解らないままだし、例の液体からは何かの手掛かりにな

るような物は見つかっていないということだ。

そんな風に困ってしまった時にモオルダアはここへ遊びにくる。ローン・ガマンのメンバーはモオルダアが撮影したデジカメの画像を見ながらあれこれ意見を言い合っている。とはいっても無口なヌリカベ君はあまり意見を言わないのだが。

「霊エネルギーで写真の写りがおかしくなるとしたらもっと違う写り方をすると思うけどね」  
正式メンバーでない元部長が適当なことを言っている。

「でも、そこにあつた液体がエクトプラズムだとしたら、この写真の異常さの原因は霊エネルギーということだといえるところと思うけどね」

モオルダアはどうやらエクトプラズムという言葉が気に入っているらしい。

「エクトプラズムが発生するということは、そこに霊媒や霊能力者がいないといけないぜ」  
モオルダアがまだ見たことない誰かが反論する。

「キミはだれだ？」

「これまでずっとここにいてやっと気になったのか？ 初登場のフロシキ君だ」

小太りで（良くいえば）かわいらしい外見のくせに、妙に偉そうな話し方をするのが気に入らなかったが、ここにいる人間はどこか他人の感情を逆撫でするようなどころがあるので、そこを気にしても仕方がない。とにかく登場するのかどうか未定だったフロシキ君がとうとう登場してしまったのである。

元部長がそうであるように、フロシキ君もローン・ガマンの正式メンバーではない。駅前で自分か書いた本やマンガを無許可で売っているのだが、警官がくるとそれらの売り物を素早くフロシキにくるんでその場から立ち去るためフロシキ君と呼ばれている。元部長とはパチンコ仲間ということだが、このアジトに頻繁に遊びにくるうちに怪しい話にも詳しくなったようだ。

「エクトプラズムなんて鼻水と一緒にですよ。なにしろ科学的根拠がどこにもない」

こここの人間には心霊現象の話は通じないようで元部長も否定的だ。

「キミに科学的に説明したって理解できないだろ」

フロシキ君が元部長をからかうが誰も特に反応は示さなかった。

「それじゃあ、絵から飛び出す怪物というのはどうだ？」

「それはないなー…」

モオルダアの予想どおり誰もこの話は信じていないようだ。ここでやっとヌリカベ君が閉ざしていた口を開いた。

「溶解人間ですね」

他の三人はその続きを期待したが、いつものようにヌリカベ君が言ったのはそれだけだった。モオルダアは人間になりたがっている三人の妖怪家族の話を思い出してしまったが、それは関係ないはずである。元部長は「溶解人間」と聞いて何かを思い出したようだった。

「人間を解かす細菌兵器の研究をどこかの政府が極秘に行っているとか、いないとか、という話は聞いたことがありませんよ」

「それがあの庭で使われたってこと？ それはどうかなあ？ それと写真が上手く写らないことは関係してるのか？」

「それは知りませんけど…」

元部長は言葉を詰まらせた。するとヌリカベ君がまた口を開いた。

「その液体というのがあればもう少し詳しいことが解るはずですよ。殺人バクテリアが人体を分解する時に出す酵素にはある特徴があるとされています」

「ある特徴って？」

「それは見たことがないから解りません」

「それもそうだ」

それ以降、ここでの話が進展する様子はなかった。何も解らないままモオルダアはアジトを後にした。しかも「殺人バクテリア」などという新しい謎のキーワードまで出てきてしまったので、もうなんだかワケが解らない状態である。

それでも、帰る途中に「フロシキ君というのが初登場したけど、話の内容にはほとんど関係がないな」というところには気付いていた。私もそんな気がしている。

それから、モオルダアは気付かなかったが、ローン・ガマンのアジトを去る彼の姿を後ろから何者が監視していた。パーカーのフードを被ってその顔は良く見えなかったが、フードの影の奥から光る目がよく見えた。

## 17 キモエのお屋敷

スケアリーは一階の大広間でノートパソコンを使って庭で採取した液体の分析結果を調べ直していた。この大広間はこの屋敷の中でも一番照明が明るくスケアリーもここでなら幽霊屋敷的な恐ろしさを感じることはなかった。

キモエは二階の自室で絵を描いている。創作中はなるべく一人になりたいということで、スケアリーは別の部屋にしなければならなかったのだが、キモエの部屋以外の二階の部屋はほとんど使われていないため電灯がつかない。一階の部屋の中でも電灯のつく部屋は限られていた。節約のために電気は限られた場所にしか引かれていないのだ。

スケアリーの使っているノートパソコンの横には懐中電灯が置いてある。電灯のない部屋で何かが起こったらその懐中電灯を使うことになっていたのだが、スケアリーとしてはそんなことが起きないことを願っていた。

キモエの部屋からはほとんど音が聞こえてこないし、たまにスケアリーがパソコンのキーボードを叩く以外にほとんど音はしなかった。外の通りには時折自動車などが通っているはずだが、それらの音は広い庭と庭木に全て遮られてしまう。このあまりの静けさにスケアリーはワザと独り言を言ってみたりしていたが、静けさの中でその小さな独り言があまりにも大きな音に聞こえるとさらに静けさが強調されてスケアリーは次第に心細くなっていった。

「あたくしとしたことが、何を怖がっているのかしら?」  
今度は声に出さずに心の中でつぶやいてみた。

「幽霊なんているわけじゃないんですから。それに、気持ち悪い怪物が絵から飛び出して人を襲うなんてこともあり得ませんわ!」

そう思っても、やっぱり怖いものは怖い。無害だと解っていても、虫が腕をはい上がってきたら気持ち悪いと思ってしまうのと同様に、不気味なものはどうしても不気味なのだ。それでもスケアリーは何とか目の前のパソコンに集中しようとしていた。実をいうと、この分析結果には興味深いことがあるらしいのだ。

スケアリーが心の中での独り言もやめてパソコンに集中すると再び静寂が屋敷を支配した。するとその時、スケアリーの頭上でカタカタという物音がした。スケアリーはハツとして頭上を見上げてしばらく固まっていた。そのまま天井を見ていても何も起こらなかった。

「キモエさんですか?」

スケアリーは今にも震えて裏返りそうな声で聞いてみた。それがキモエの部屋まで届いていたかは解らないが、何の反応もなかった。「きつとネズミか何かですわ」と思ってスケアリーは再びパソコンに目を向けた。パソコンの文字を読



み始めたとき、今度は先ほどとは少し違う場所からカタカタという音が聞こえてきた。

驚きでそうなったのか、それとも異常事態だと感じたのか解らないが、スケアリーは反射的に立ち上がって懐中電灯に手をかけていた。しばらくは先ほどと同じように天井の音のしたところを見上げていたスケアリーだったが、今度は懐中電灯を手に取るとドアのところに向かわざるを得なかった。

## 18 F B Lビルディングの近所

モオルダアは「今回の事件はまったくもって難解だなあ」と呑気な感じで考えながらF B Lビルディングに向かって歩いていった。F B Lビルディングに続く大通りには脇へ入る路地がいくつもあるのだが、最後の路地を通り過ぎた時にその路地の暗がりから何者かがモオルダアを呼び止めた。

「おいモオルダア！ 何をやっているんだ？」

突然のことだったが、それが小声だったためにモオルダアはそれほど驚かなかった。見るとそこにはスキヤナー副長官がいた。

「あれ？ 副長官。今回は予想外に二度目の登場ですね。残念ながら今のはそれほど驚きませんでしたけどね」  
スキヤナーはモオルダアが何を言っているのか良く解らなかったが、それどころではないようだ。

「なんだか知らないが、あれは一体何なんだ？」

「あれ、つて何ですか？」

「キミらが事件現場から採取してきたものだよ。もの凄く臭くて私は外に避難してきたんだよ。それに化学兵器の処理班みたいなのが来てあの液体とかの証拠品を押し取ってしまっただぞ」

化学兵器と聞いてモオルダアは先ほどヌリカベ君から聞いた「殺人バクテリア」のことを思い出していた。しかし、あれがホントに殺人バクテリアだとしたら朝の現場にいた人間は全員ドロドロに溶けているはずである。

「あれは化学兵器なんかじゃないと思いますけどねえ」

「それはそうかも知れないが、でも彼らはキミ達のことでも隔離したがつているんだよ」

これは明らかに何者かがF B Lの捜査を妨害しているのだがモオルダアはあまり気付いていない。

「隔離するのはボくらだけでなくて、朝の現場にいた警官達とか警察署の全員とか、それからF B Lの研究室にいた

人とか全員を隔離しないと意味がないですよ」

「それだから私は怪しいと言っているんだ。それからスケアリーはどこにいるんだ？ 彼女にもこの事は伝えておかないと」

ここまでできてようやくモオルダアの少女的第六感が働きました。FBLビルディングにベケファイルの二人がいないとなれば、一番最初に調べられるのはキモエのお屋敷であることは確かである。彼らの捜査を妨害する目的が何なのかは解らない。しかし、キモエとスケアリーがあのお屋敷にいることはあまり好ましくない状況だということは何となく解ってきた。

## 19 キモエのお屋敷

スケアリーは懐中電灯を持って灯りの点かない廊下をゆっくりと進んでいった。自分の足音でさえも、何か異常な物音に聞こえてしまうほどに怯えていたスケアリーだったが、先ほどの物音の正体をつきとめなくてはいけない。その物音の原因が解りさえすればこんなふうに必要な以上に怖がることもなくなるのだし。何よりも幽霊が恐くてキモエさんを守れなかったなんてことになったら「一生の不覚」ということになりかねない。

二階のキモエの部屋へ行く階段は入り口にあった螺旋階段からではなくて主に家の者が使用する階段を使わなければいけなかった。広い屋敷であるため階段もいくつもある。スケアリーにとって幸いなことはその階段へ続く廊下には電気が来ていたということである。照明が点いていても決してスケアリーを安心させるほどの明るさではなかったのだが。

スケアリーは途中で何度も背後に気配を感じて慌てて振り返りながら、なんとか二階のキモエの部屋の前まで辿り着いた。中からは幽かに物音がしているが、それは多分キモエが絵を描いている音に違いない。スケアリーはキモエの邪魔をしたくはなかったが、キモエの安全が第一ということで、ドアをノックした。

「どうかしましたか？」

ドアを開けたキモエは心配そうにスケアリーに聞いた。

「いや、特に問題ということではございませんけど。下にいたら天井のほうから物音がしたものですから、少し気になって確認しに来たんですのよ」

スケアリーの表情はここまで来る間の恐怖のためにまだ少し引きつってはいたが、キモエの穏やかな顔を見て少し安心

したようだった。女ニートではあるが芸術家でもあるキモエであるから、創作の邪魔をされて気分を害していると思っていたのだ。しかしキモエはキモエでスケアリーが自分のことを守ってくれていることをありがたく思っているようだ。

「それなら、ネズミだと思います。これだけ古い家だとしても駆除しきれなくて…」

「あら、そうでしたの。確かにそうですね。忙しいところ失礼いたしましたわ。でもあたくしはあなたの警護が役目ですから、全てが解決するまでは安心できませんでしょ？ それじゃあ、あたくしは下に戻りますわね。絵のほう頑張ってくださいな」

スケアリーが部屋の扉を閉めようとドアに手をかけた時だった。彼女の背後からドンツと大きな音がした。

ほんのしばらくの間、驚きでキモエと見つめ合ってしまったスケアリーが聞いた。

「今のもネズミかしら？」

キモエは何も答えなかったが、その表情は「そんなはずはない」と答えていた。そしてまた二人は見つめ合った。何かがいるらしい。

スケアリーは腰のホルスターに手をやっていつでも銃を取り出せるように準備してから、もう片方の手の平をキモエに向かってつきだして「ここにいるように」と合図した。

スケアリーが振り返って歩き出そうとしたその瞬間だった。彼女の携帯電話が鳴り出した。スケアリーは思わず銃を取り出してそこら中に発砲してしまいそうになるほど驚いてしまったが、何とか冷静に電話に出ることができた。しかし、その電話がモオルダアからだとなると、今度は違う意味で発砲してしまいたくなかったが、それも何とかこらえることが出来た。

「スケアリー。どうやら今回の事件の裏にはいろいろ怪しいところがあるみたいなんだ。今は説明しているヒマはないけど、今すぐキモエさんと一緒にそこを離れるんだ。急がないと、キミ達が何かのウィルスとかに感染している、というのにされてどこかに隔離されてしまうから。とにかく化学兵器処理班みたいな人たちがそこに行く前にそこから逃げろんだ」

「ちよいと、それはどういうことですか？」

とは言ってみだが、スケアリーには遠くからサイレンの音が聞こえてくるのが解った。それがもし、モオルダアの言うような「化学兵器処理班みたいな人たち」だとしたら、それは大変な事になるような気がしていた。

「解りましたわ。それであなたはどうするんですか？」

「まだ解らない。ボクも化学兵器処理班みたいな人たちに追われている感じだからね。とにかくそこを離れないと。また後で連絡するよ」

モオルダアの言うことは最後まで聞かずにスケアリーはキモエの手を引いて一階へ降りる階段へと向かっていた。階段の手前にある窓から外を見ると、もうすでに門のところには「化学兵器処理班みたいな人たち」を乗せた救急車両が到着しているようだった。

「何なんですか？ あの人達は？」

これまでもワケが解らなかったキモエだったが、屋敷の前へやって来た見慣れない緊急車両にさらにワケが解らなくなっていた。

「今は詳しいことを説明していただませんかけど、とにかくあたくし達はここから逃げないといけませんのよ。どこかに裏口はありませんかしら？」

スケアリーの切迫した様子に、何となく事態が解ってきたキモエは逆にスケアリーの手を引いて廊下を反対方向に進んでいった。二人はこれまでのと違う、さらにもう一つの細い階段を使って一階に降りてきた。降りた先はまるでレストランの厨房のような台所だった。古い建物というのは大抵そうになっているのだが、このお屋敷でも台所には勝手口というのがある。長年使われていなかった勝手口の鍵は開けるのに苦労したが、スケアリーの持つ懐中電灯の明かりを頼りにキモエが何とかその鍵を開けて二人は外に出ることができた。

そこからは塀のところまで裏庭を走って行って、それを乗り越えるしか逃げ出す方法はなかった。それでも二人は塀に向かって走ろうとしたのだが、その時突然スケアリーの前に何か立ち止まらした。驚いて立ち止まろうとしたスケアリーは足を滑らせて尻餅をついた。彼女は持っていた懐中電灯でその何かを照らしたのだが、その瞬間彼女は言葉を失った。

懐中電灯の明かりに照らし出されたのは、あの絵に描かれているのとそっくりな地獄の怪物だったのである。あの絵と同じようにスケアリーの顔を睨みつけている。

「で、出ましたわ……」

息が出来ないほどに怯えているスケアリーが何とか絞り出した言葉にはあまり意味がなかった。それ以外に何も出来ず、ただ目の前の怪物を見つめるだけのスケアリーに向かってその怪物は鋭いかぎ爪のある両手をゆっくりと伸ばしてきた。スケアリーは銃に手をのばそうとしているのだが、体が言うことを聞かない。立ち上がるにも、かかどが地面

の上を滑っていくだけ。完全に腰が抜けた状態になっている。スケアリーはゆっくりと彼女の方へ向かってくるかぎ爪を見ているしか他に出来なかった。

「出ましたわ：モオルダア：」

スケアリーは震える声でもう一度言ってみたが、それにも意味はなかった。

to be continued...



## #018 「隠れ家」

0

これは前エピソード「KINMOE」の続きなので、いきなり読んでも意味が解りません。

### 1 裏庭

これで終わりなんですか？ とスケアリーは思った。それからこれで終わりなんですわ！ とも思った。そして、この絶体絶命の危機に銃も抜けない自分の気の弱さを恥じると同時に、だんだんモオルダアに腹が立ってきた。こんな役目はいつだって彼がすることなのだから。しかし、そんな事を考えても意味はないことは確かだ。終わりなんですわね。

スケアリーはいろいろな事を考えていたが、これは倒れた彼女の前に立ちはだかつたあの怪物が彼女に鋭いかぎ爪と開いた口の中に見える牙を彼女に近づけてくるほんの一瞬の事だった。そして、最後にスケアリーは考えた。「こんな事で終わりなんてあり得ませんわ！」そう心の中で叫んで彼女は拳銃に手を当てた。それと同時に怪物はスケアリーに飛びかかってきた。

このタイミングではスケアリーが拳銃を構える前にかぎ爪に捕らわれてしまう。スケアリーがありつただけの力を振り絞って地面を蹴ると少しだけ怪物から離れることが出来た。これで怪物の最初の攻撃はかわすことができたが、またすぐにかぎ爪がスケアリーに迫ってきた。するとその時、キモエの声が聞こえてきた。

「やめなさい！ その人は味方です」

その声を聞くとスケアリーの目の前にかぎ爪は静止した。怪物はキモエの声を聞いて動きを止めたのだ。そして怪物はキモエの方に向き直りしばらくキモエを見つめていた。スケアリーは一瞬あつげにとられてその様子を眺めてしまったが、すぐに我に返り拳銃を取り出して怪物の方に銃口を向けようとしたが、それよりも早く怪物は走りだし、軽々と塀を飛び越えて逃げてしまった。

震える手で銃を構えたままのスケアリーのところへキモエが近寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

スケアリーは「ええ」と答えたものの、少し大丈夫でないかも知れないと思っていた。すると、少し遠くから数人が物音をたてて近づいてくるのが解った。彼らはきつと「化学兵器処理班みたいな人たち」に違いない。

彼らはまだスケアリー達の見える場所までは来ていないが、ここから塀を乗り越えて逃げようとすれば、その間に見つかってしまうだろう。

「どういたしましょう？」

スケアリーは立ち上がって考えてみたがあまり良いアイデアは浮かばなかった。するとキモエが「こっちです」と言っけてスケアリーの手を引いて走り出した。

キモエは庭の隅にある茂みを掻き分けると、そこにあつたマンホールのようなハッチを開けて中に入ってしまった。スケアリーもそれに続く。この入り口が一体何なのか？ などと考えるヒマもなくスケアリーは中に入るとハッチを閉めた。

外では感染防止の防護服を着た数人が先程までスケアリーがいた辺りにやって来ていた。そこへ、また別のところから数人の「化学兵器処理班みたいな人たち」がやって来て、最初に来た中の一人に言った。

「どうやら庭にもいないようです」

「そんなはずはないよ。屋敷の中に灯りも点いているし外には車だつてあつたじゃないか。もっと良く探さないと！」  
そう言われると、そこにいた「化学兵器処理班みたいな人たち」は命令した一人を残してばらけていった。命令した男は頭全体を覆っていたヘルメットをはずして、その場にかがみ込んだ。そして地面に出来た足跡を眺めていた。

「やっばこれ、けっこうヤバいんじゃないか？」

そう独り言を言ったその男はクライチ君だった。



それからしばらく経った後、何者かが塀を乗り越えて裏庭に侵入してきた。塀から飛び降りる時にバランスを崩して、格好悪く地面に落ちたのだが、それでもそんなことはなかったかのよう木陰に隠れてモデルガンを構えるその男はモオルダアの他に考えられない。

どうしてモオルダアがわざわざここにやって来るのか知らないが、どうやらスケアリーとキモエの事が心配になったようだ。少女的第六感が彼に知らせたのかも知れないし、夕方に見たスケアリーがいつになく不安そうだったのが気になっていったのかも知れない。

先程までいた「化学兵器処理班みたいな人たち」の人数はかなり減っていた。この屋敷はあらかじめ調べたので今では他を探しているのだろう。残った数人がまだ屋敷の中を搜索していたり、機械を使って何かを調べていた。

モオルダアは辺りに誰もいないことを確認すると、身をかめながら屋敷の窓へと走っていった。窓の中は先ほどまでスケアリーがいた大広間だった。机の上にはスケアリーのノートパソコンがある。FBIビルディングにあった事件の証拠などは全て彼らを持ち去ってしまったことだったが、きっとあのパソコンもこのままでは押収されてしまうに違いない。それよりも早くモオルダアがパソコンを持ち去らないと、今回の事件の証拠は全てなくなってしまう。

モオルダアは中に入ろうとして、窓に手をかけて動かしてみたら鍵が掛かっている開かなかった。そして、夕方ここにいた時に自分がこの窓に鍵を掛けたということを思い出した。用心のためにしたことだったのに、こんな事になるとはなんとももどかしい気分だ。

モオルダアは偶然開いたりしないものか？　と調べてもう一度窓を動かしてみたが、そう上手くいくはずはない。すると大広間に「化学兵器処理班みたいな人たち」の一人が入ってきた。モオルダアは慌てて窓の下に隠れた。それからゆっくりと顔を上げて窓の中を覗き込むと、そこにいた化学兵器処理班みたいな人はノートパソコンを持って部屋を出ていくところだった。

モオルダアは壁に背をもたせかけて座り込んだ。これはどうしたらいいのだろうか？　手にしているモデルガンを見ながら考えている。これは優秀な捜査官のようなことが出来るまたとないチャンスではあるのだが、上手くいくかは解らなかった。しかし、こうなったらやるしかないようだ。モオルダアはモデルガンを構えて表の門がある方へと走っていった。

モオルダアは誰にも気付かれぬように門の近くまでやって来ると木の陰に身を潜めた。そこから玄関の方を覗くと先ほどの「化学兵器処理班みたいな人」がノートパソコンを持って出てくる場所だった。

緊張が高まっていくなか、ノートパソコンを持った男が門へと近づいてくる。モオルダアは男に見つからないように少しずつ自分の位置を変えながら男が通り過ぎるのを待った。そして男が自分の脇を通り過ぎるとすかさず飛び出して男の背中にモデルガン突きつけた。

「動くな！」

と、カッコ良く言ったつもりが、緊張のため声が裏返ってしまった。恥ずかしくて赤面していたモオルダアだったが、ノートパソコンを持った男はモオルダアの言ったとおりに動きを止めている。これでモオルダアは調子が出てきたようだ。

「そのパソコンをこっちに渡すんだ」

今度はさっきより少しカッコいい声で言えた。モオルダアは銃を突きつけている手と反対の手を男の方に差し出した。すると男はゆっくりとノートパソコンをモオルダアに渡した。ノートパソコンがモオルダアの想像していたよりも重かったのであやうく落とすところだった。

これでとりあえず証拠は守ることが出来た。すこし安心したモオルダアだったが、ここからどうすれば良いのだろうか？ 彼の知っているテレビドラマや映画などではこういう事のあとは、銃のグリップの部分で男の首の付け根の辺りを殴ると男は気絶するのだが、今モオルダアの前にいる男は顔全体を覆うヘルメットみたいなものをかぶっているし、防護服もなんだかごわごわしていて、殴ったりしてもあまり効き目がなさそうな感じである。

これは困ったことになったが、ただ一つ幸いなのは彼がモデルガン突きつけている男がモオルダアの予想に反してかなり怯えているということだ。これならなんとかなるかも知れない。

「よし、それじゃあこのまま門を出るんだ。そうしたら前を見たまま道路を走り続けろ。もしも振り返ったりしたら撃つからな」

「え……!?!」

前にいる男はなぜそんな事をするのか意味が解らなかったがとにかくそうしないと撃たれてしまうようなので、モオルダアが突きつけている銃をぐいと押すのと同時に門の外へと歩き出した。そして門の外まで来るとモオルダアが突然大きな声で「走れ！」と言った。男は慌てて走り出した。

「走れ走れ！ オレの銃はまだおまえの背中を狙っているぞ！ 走るんだ！ 死にたくなければ走るんだ！ ナーッハッハッハッハッハッ！」

完全なアブナイ人になってしまったモオルダア。これのどこが優秀な捜査官だというのだろうか？

モオルダアは男が十分に離れたところまで走っていった事を確認すると、反対側へ大急ぎで走り出した。走っている途中に車の急ブレーキの音と、それに続いてドシンという音が後方から聞こえてきたので、ちよつと振り返ると先ほどの男が車に跳ねられていた。ちよつと心配になったモオルダアだったが、防護服がごわごわしてたしヘルメットも被っているし大丈夫だろう、と思ってそのまま走り続けた。

飛び出しは危険です。やめましょう。

### 3 秘密の穴蔵

キモエはスケアリーの持つ懐中電灯の明かりを頼りにライターを見つけると、それでロウソクに火をつけ始めた。そこにあるいくつものロウソクに火が灯されるたびに二人の逃げ込んだ穴蔵は次第に暖かい光に包まれていった。

「まあ…」

と言っただけで、その後には何も言わなかったがスケアリーが言いたかったのは「ステキ！」という事だろう。辺り一面にぬいぐるみや絵本が置かれているこの場所はいかにも女の子の部屋という感じだった。かなりホコリを被ってはいるようだがそれらがローソクの明かりに照らされている光景は何とも言えない懐かしい気持ちになるものだった。ただしこの場所自体は金属製のトンネルのような作りになっていたのだが。

「ここなら安心です。ここは私と父しか知らない秘密の隠れ家なんです」

「ステキですね。でもどうしてこんな場所が庭にあるんですの？」

「良くは知りませんが、ここは昔防空壕だったみたいなんです。私が子供の頃庭で遊んでいる時に偶然見つけたんですが、父も母もこの事は知らなかったみたいです。母は家のことなど興味がないみたいで、いつもどこかに出かけていましたから結局母はこの場所を知らないままでしたけど」

キモエは昔を懐かしむように話していたが、スケアリーは外のことを心配していた。しかし「化学兵器処理班みたいな

人たち」がいなくなるまでここに隠れていなければいけないのだし、あの怪物のことも気になる。少しぐらいキモエの思い出話に付き合っても良いだろうとは思っていた。なによりも、この空間にいると先ほどの怪物のことが忘れられるような落ち着いた良い雰囲気なのだ。

「あれはあなたが描いた絵かしら？」

スケアリーは壁に立て掛けてある額を指さして聞いた。クレヨンで山のようなものと赤い太陽と人が線で描かれている。

「ええ。子供の頃はここで父に絵を習っていたんです。母は私が画家になりたいと言うのを良く思っていないなかったので家では絵を描かせてくれなかったんです。それで父はここで私に絵を教えてくださいました。教えると言っても一緒に絵を描いて遊んでいた、という方が正しいですけど」

キモエはさらに他の絵を引っ張り出してきて、それらについての思い出をいろいろ語っていった。スケアリーはだんだん飽きてきていたが、話を聞いていくとキモエの思い出には父親のことばかりで母親はほとんど出てこなかった。しかも大人になるにつれて母親とは仲が悪くなっていき、母親が亡くなる直前にはほとんど口も聞かなかったということだ。

「母はいなくなっても父だけにはどうしても助かって欲しかった」と両親を亡くした事故について語るキモエにスケアリーは何となくキモエのドロドロした部分を知ってしまったような気がして少し嫌な気分になっていた。

「あの、そろそろ大丈夫なんじゃないかしら？　きっと庭には誰もいなくなっているはずですよ」  
そう言ってスケアリーは庭に出るハッチのところへ向かった。しかし、そこで思い出してしまった。この穴蔵の中の懐かしい暖かさのためにすっかり忘れかけていたあの怪物のことを。

正直なところスケアリーは自分の前に怪物がいた時のことがほとんど記憶に残っていないのだ。どうして助かったのかさえも解らない。キモエが何かを言って怪物がいなくなったというところは何となく覚えているのだが。スケアリーは一度キモエの方に振り返った。

「先ほどのあの怪物のようなものですけれど…。あなたはあれが何だと思えますか？」  
スケアリーにはどんな答えが返ってくるのかだいたい想像が出来たが、ハッチを開ける前に聴いておきたかった。

「私も見た時は驚きましたけど、やっぱりあの絵には不思議な力があるんだと思います。スケアリーさんが襲われた時も私が止めたらどこかへ行ってしまったし。きっと今頃はまた絵の中に戻っていると思います。だからもう外に出ても

大丈夫ですよ」

こんな話は信じたくなかったのだが、先ほどもキモエを見てあの怪物は逃げていった。キモエが大丈夫と言うのなら大丈夫なのだろうか。もしもまた襲われたとしても、今度は心の準備が出来ているし、不覚にも腰を抜かしてしまうような事はないだろう。

スケアリーはもう一度ハッチのところに行って手を掛けたが、そうする度に怪物を目の前にしていた時の光景という恐怖感のようなものが頭の中に甦ってくる。

「まだ出るのはやめた方が良くも知れませんか。あの怪物がいなくても他の人達がまだ私達を捜しているかも知れませんから」

嘘をついたスケアリーは自分が情けなくなっていたが、あのショックから立ち直るにはもう少し時間があるような気がしていた。もう少しこの懐かしい空間に身を置けばいつものスケアリーに戻れるのだと思っていた。

#### 4 夜道

モオルダアは彼のボロアパートに向かって歩いてしたが、途中でこのまま帰ったら「化学兵器処理班みたいな人たち」に見つかってしまうのではないかと、とうとうところに気付いた。そうだとしたらどこへ行ったら良いのだろうか、と一度立ち止まって考えてみたが特にいい場所は思いつかない。ローン・ガマンのアジトにはさっき行ってしまったし、ここから行くには少し遠すぎるのだ。

「まあ、大丈夫かな？」

と、何の根拠があるのか解らないが楽観的になっているモオルダアはそのままボロアパートに向かうことにした。

歩き出すとモオルダアの携帯電話へスケアリーから電話がかかってきた。

「ちよいとモオルダア！ どういう事ですか？」

「どういう事と言われても、良く解らないんだけどねえ。キミ達は無事なのか？」

「ええ、一応無事ですけれど、ちよっと問題があるんですよ。ですからこれからキモエさんの屋敷の裏庭に来てくれないかしら？」

「えっ、また行くの？」

せつかくキモエの屋敷からここまで歩いてきたのに、また戻るのには面倒だった。

「また、って何なんですか？ とにかくあたくし達は外が安全かどうか解るまでは外に出られないんですよ。ですからあなたがキモエさんの屋敷にまだ彼らがいるかどうか確認してもらわないといけないんですよ。それに、あたくしの大事なノートパソコンがお屋敷の中に置きっぱなしですから、それも心配ですわ」

「ああ、それなら大丈夫だよ。キミのパソコンはボクが守ったぞ。もう事件の証拠はこれ以外にないからね」  
「あら、そうでしたの。それは良かったですわ」

「ところで、外に出られないって、キミ達はどこにいるんだ？」

「秘密の隠れ家ですから、あなたには教えられませんわ」

「なんだそれ?!」

なんだか良く解らない気分になっていたモオルダアだったが、とにかくキモエの屋敷に戻ることにした。もうモオルダアのアパートは目の前だというのに。

しかたなく振り返って歩き出そうとしたモオルダアは後ろから呼び止められた。

「良いものを持っているな、モオルダア」

モオルダアは驚いて振り返ったが、彼を驚かせたのいつもとは違ってはスキャナー副長官ではなかった。それは夜の闇の中に現れて、モオルダアに事件解決のヒントを与えてくれる謎の男。

「うわあ、ビックリした」

分かり易く驚いたモオルダアだったが、呼び止めた男の顔には見覚えがある。

「あれ、あなたはいつかの事件で…。ということは今回はまた複雑な事情がからんでいる事件ってことかな？」

「そう思うのかね、モオルダア君。でもそれはキミが知らなくても良いことだ。それにキミの持っているパソコンもキミには必要ないものだ。それはこちらに渡してもらおうか」

謎の男は無表情に言いながら手を差し出してきた。何かの情報が貰えると思っていたモオルダアだったが、今回は逆に自分の持っているものを要求されている。

「それは出来ませんよ。これはボクのじゃないし。それよりもあなたは誰なんですか？」

「それもキミが知る必要のないこと。とにかくそれを渡してもらおうか」

そう言いながら、謎の男はもう片方の手もモオルダアの方に差し出してきた。その手には銃が握られている。

モオルダアは困っている。彼の持っている銃はモオルダアのモデルガンとは違って本物に違いない。こういう謎の男は本物の銃と決まっているのだ。しかもその銃には消音器までつけられている。この銃を撃つとプスツという音がして撃たれた人は情けなく殺されてしまうのは映画で何度も見ている。これはかなりまずい状況である。しかし、ここでパソコンを渡してしまったら、後でスケアリーに会うのはもっと恐ろしい。それよりも、この謎の男はモオルダアがパソコンを渡そうが渡すまいが彼を撃つつもりなのだろうか？

「ぐずぐずしている暇はないんだ。ここで死にたいのか？ それとも真実をつきとめたいのか？ どっちなんだ？」

謎の男は目を血走らせながら、さらにモオルダアの方へ銃を近づけてきた。どうやら本気のようなだが、パソコンを渡せば命は助けてくれそうだ。モオルダアは「はい」と言いながら謎の男にパソコンを手渡した。

パソコンを受け取った謎の男は銃をしまうとモオルダアの方に鍵を放り投げた。受け取ったモオルダアがそれを見ると、それはコインロッカーの鍵のようだった。

「キミに必要な情報はそこにある」

謎の男は謎めいた表情を変えずに言う、足早にその場を去っていった。

しばらく謎の男が遠ざかっているのを見つめてしまったモオルダアだったが男の姿が見えなくなるぐらいになって「もう少し分かり易くして欲しいなあ」と思った。一体この鍵はこのコインロッカーの鍵なのだろうか？

モオルダアはスケアリーのノートパソコンを奪われた事をどうやって言い訳しようかと考えながらキモエの屋敷に向かっていた。キモエの屋敷に向かうには駅の階段を使って線路の反対側に出るのが一番近い。モオルダアは駅に着いたところでポケットにしまってあった鍵を取り出した。この駅のコインロッカーの鍵なら都合が良い。もしかするとロッカーの中にはパソコンなんかよりもっと重要な証拠が入っているのかも知れないし、そうしたらスケアリーのノートパソコンの事はなんとかごまかせるかも知れない。

モオルダアは鍵に書かれた数字と同じ13番のロッカーを探した。わざとこの数字を選んだのかそれとも偶然か知らないが、モオルダアはこの不吉な数字に意味もなく期待してしまっただけだ。

13番のロッカーには鍵がついていなかった。モオルダアは祈るような気持ちで鍵を回した。ここはロッカーでないとしたら、一体このコインロッカーを探せばいいのだろうか？

モオルダアの願いが通じたのか、鍵が回ってロッカーの扉が開いた。「よしっ」と小さくつぶやいたモオルダアだっ

たがそこにあるものをみて少しガツカリだった。そこには書類を入れるのに使うような大判の封筒が一つ入っていただけだった。

「たったこれだけなら、さつき渡してくれたらいいのに」

モオルダアは不満そうに封筒を取り出すとキモエの屋敷へ向かって歩き出した。

## 5 怪しい自動車

暗い夜道。キモエの屋敷からそう遠くないところに一台の車が止まっていた。そこへ「化学兵器処理班みたいな人たち」の防護服を着たままのクライチ君がやって来て、車の後部座席へ乗り込んだ。車の中にはウィスキーの臭いが充満していた。

「マジ暑いつす」

後部座席に座ったクライチ君は、防護服の内側に新鮮な空気を入れようと胸のところを何度か引っぱりながら言った。そんなことをしても、細菌や放射能みたいなものから身を守るための防護服なので空気は入ってこない。

「だいたい、現場にいた人間は誰もウィルスなんかに感染してないのに、化学兵器処理班はおかしいんじゃないっすか？ それに、交通事故にあった人がいてボクの責任だと言っすよ」

クライチ君の隣に座っていた男は持っていたウィスキーを飲むと一度クライチ君の方を見た。それからまた元のように前を向いてから話し出した。

「嫌ならもうそんな服は着なくても良いんだがね。エフ・ビー・エルの二人にはもう何も残っていない。あとはまたいつものように後始末をすればいい」

「でも、その後始末が厄介じゃないですか？ あれはどこに行ったか見当もつきませんよ」

クライチ君の質問に答える前に男はもう一度ウィスキーを飲み込んだ。

「ウワサによると、あの娘に何かあれば、あれは現れるってことじゃないか」

「それって、あり得るっすねえ」

クライチ君は怪しく目を光らせた。

クライチ君が降りた後、車は静かに走り出した。その中で男は運転手に向かって半分独り言のようにいった。



「あの喋り方はなんとかならんのかね」  
運転手はバックミラー越しに黙って男と視線を合わせただけだった。

## 6 裏庭

キモエの屋敷の塀越しに庭の方を覗き込んだモオルダアはそこに誰もいないのを確認するとそのまま塀によじ登った。それから先ほどと同じようにバランスを崩して塀の下に落ちた。今回はちょっと痛かったがそれでも何事もなかったように木の陰に身を潜めてスケアリーに電話をかけた。

「もしもし。裏庭に来ただけど、キミ達はどこにいるんだ？」

「秘密の隠れ家って言いましたでしょ？ それよりも外はどうなんですか？ もう出ても大丈夫なんですか？」

「どうやらこの屋敷にはボク以外に誰もいないようだ。静かで平和な夜といった感じかな」

「そんな例えはどうでも良いですわ。これから出ていきますから待っているんですよ」

モオルダアは言われたとおり待っていた。彼のいる場所からスケアリー達の隠れていた秘密の隠れ家入り口は反対の方にある。同じ裏庭といっても広い屋敷なので秘密の隠れ家の入り口はモオルダアからまったく見えなかった。ハッチを開けて出てきたスケアリーとキモエの姿がモオルダアには闇の中に忽然と現れたように見えて少しゾツとしていた。

「一体なんだと言うんですの？ 化学兵器とかそういうものは今回の事件とは関係ないことをごさいますしょう？」

近づいてくるスケアリーはモオルダアにそう言った。モオルダアは最初にノートパソコンのことを聞かれなかったので少しホッとしていた。

「化学兵器というのはこじつけにすぎないよ。ただボクらの捜査を邪魔したかっただけさ。ボクが手に入れたこの資料に何かの…」

「それより、モオルダア。あたくしのノートパソコンはどこにあるんですの？」

モオルダアはコインロッカーにあった封筒の事を話してごまかそうとしていたのだが、見事に失敗だった。

「えっ！？ 何が？」

「あたくしのノートパソコンはどこにあるんですの？」

モオルダアの目が泳いでいるのに気付いたスケアリーがきつい感じで聞き直している。

「あたくしのノートパソコンですよ！」

ヤバイ、怒っている。しかし銃で脅されて簡単に渡してしまったと言ったらさらに怒るに違いない。

「さあ？ ノートパソコンと言われても、ボクには何のことだか……」

あまりにも白々しいモオルダアの態度にスケアリーは握りしめていた拳をモオルダアに向けて繰り出すところだったが、ちょうどその時、屋敷の屋根の方ですんと何かが落ちたような音がした。

モオルダアは「なんだろう？」と思ったただだったが、スケアリーは違った。あの怪物が屋根の上にいるのではないか？　と急いで恐くなった。

「あの、ここで立ち話もなんですから、続きはどこか他でしませんこと？　オホホホッ」

明らかに顔色を変えているスケアリーを見てモオルダアはさらに「なんだろう？」と思っていたが、とにかくノートパソコンの件についてはとりあえずなんとかなりそうなので、スケアリーの言うとおりに移動することにした。

## 7 F B Lビルディング

今回の液体人間事件（モオルダアはそう呼んでいる）の証拠品が全て何者かによって押収されてしまうと、もう化学兵器処理班みたいなことはどうでもよくなった、という感じでF B Lビルディングはまたいつものけだるい落ち着きを取り戻していた。ペケファイルの二人に残されたものはモオルダアが手に入れた封筒の中にあるものだけである。

スケアリーはキモエと一緒に応接室にいる。このF B Lビルディングにいる職員達はほとんどがエキストラなので夜になるとビルの中には人がほとんどいなくなり、どの部屋も使い放題なのである。それで、わざわざキモエを地下にある薄汚いペケファイルの部屋に入れるよりはきれいな応接室にいてもらおうということのようだ。（ペケファイルの二人の他に夜になってもF B Lビルディングにいるのはスキヤナー副長官と時給を稼ぐために残っているバイトの技術者とかである。それからエキストラがどうのこうの、とかいう話は「主な登場人物」参照。）

モオルダアは封筒の中のものを取り出しながら「これがスケアリーのノートパソコンよりも重要な手掛かりでありますように」と願っていた。先ほどキモエの屋敷の裏庭で何かに怯えるような感じだったスケアリーは、今のところノートパソコンの事は忘れていたようだったが、すぐに思い出すに違いない。もしもこの封筒の中に重要な手掛かりが入っているのなら「あのパソコンはこれと引き替えに渡してしまった」とか、そんな事を言えばなんとかなるに違いないの

だ。

「なんだこれ!？」

封筒の中身を取り出したモオルダアは落胆していた。一番上にあっただのは、キモエの屋敷の青写真だった。始めはそれがなんだか解らなかったが、よく見てみると部屋の配置や階段の位置などが昼間に見て回ったキモエの屋敷と一緒であることが解った。しかし、こんなものを見せられても、もうすでにキモエの屋敷の中は十分に見て回ったので意味がない。

モオルダアは青写真をどけて次の書類に目を通した。それは二年前に起きた交通事故の報告書のようなだった。モオルダアは、これはキモエの両親が巻き込まれた交通事故に違いないと思っていた。そうでなければ、こんな報告書に何かの意味を見いだすのは不可能だから。

モオルダアはさらに封筒の中に何か入っていないか確認してみたが、それ以外には何も入っていないかった。モオルダアは困っている。これではノートパソコンと引き替えにしたなんていう言い訳はどうしても通じそうにない。「ああ、どうしよう!」そう思ってモオルダアはドアの方に目をやった。そろそろスケアリーがノートパソコンの事を思い出してここへ向かって来ているに違いない。

モオルダアの予想どおりペケファイルの部屋のドアが勢いよく開いた。

「ちよいとモオルダア! あたくしのノートパソコンはどうしたんですの!」  
謝るのか、ごまかすのか、モオルダアは心の中で葛藤していた。もし上手くごまかせたとしてもこのままではバレた時のスケアリーの怒りが倍増していくだけだ。謝ったとしても、この勢いではスケアリーの鉄拳制裁からは免れられそうにない。

「それよりもスケアリー。大変な事が解ったよ!」

モオルダアはごまかす方を選んだようだ。

「キモエさんの両親は生きてるよ!」

何を根拠にそんなことをいうのか解らないが、スケアリーを驚かすには十分な出任せだった。

「それって、どういう事ですか?」

理由を聞かれても出任せに根拠はない。一瞬戸惑ったモオルダアだったがとりあえず机の上にある交通事故の報告書をスケアリーに渡した。どんどん深みにはまっていくのが自分でも解っていたモオルダアだったが「これも人生さ」と意

味もなくシブイ開き直り方をしていた。

「確かに、この報告書には不可解な点がありますわねえ」

スケアリーが思わぬ事を言ったのでモオルダアは「でしょー？」と目を輝かせていた。

「これをキモエさんに確認していただいたら詳しいことが解るかも知れませんが、あの方は今回の事件でずいぶんとシヨツクを受けていらっしやいますから、どうしたものかしら？」

「そこを気にしていたらボクらの仕事は勤まらないぜ！」

「なんですの？ その『だぜ！』って。ムカつきますわ！ でもとりあえずキモエさんに確認してみないといけませんわね。ところでモオルダア。この報告書はどうやって手に入れたんですの？」

「それは、極秘のルートからだけど」

「それで、あたくしのノートパソコンはどうなったんですの？」

「それは…、極秘のところには…」

結局モオルダアは鉄拳制裁から逃れることは出来ないようだ。

モオルダアはちり紙で鼻血を抑えながらスケアリーの後について廊下を歩いていた。

「嘘なんかつくから、そんな目にあうんですのよ！」

スケアリーはまだ怒りが収まらないようではあったが、なんとかこらえてスタスタと歩いている。

「ホントの事を言ったってキミは…、まあいいか。それよりもその報告書のどこがおかしいんだ？」

スケアリーは立ち止まってモオルダアの方に振り向いた。また殴られると思ったモオルダアは怯えた目をスケアリーの方に向けて身構えた。

「あなたは、ただの出任せでキモエさんの両親が生きているなんて言ったんですの？ まったくどういふ神経をしているのかしら。おかしいのはこの写真ですよ」

スケアリーは事故の報告書に添えられている遺体の写真をモオルダアに見せた。死体を見るのが怖いモオルダアだった。写真ならなんとか直視できる。それに、そこに写っていたのは青白いことを除けば生きている人間と変わらないきれいなものだった。

「とても交通事故で亡くなったとは思えないなあ」

「それだけじゃありませんのよ。あたくし、さっきキモエさんといういろいろお話をしていたんですけど、キモエさんが言うには事故で遺体の損傷がひどくて、二人の遺体はほとんど人間とは思えないような状態だったって事ですのよ。実際にキモエさんが見たわけではないですけど」

「それじゃあ、どこかに嘘があるということだね。キモエさんが嘘を言っているのか、その写真が嘘なのか、キモエさんに遺体の状況を伝えた人間が嘘をついたのか」

モオルダアは立ち止まったまま考え込んでしまっているが、スケアリーはこんなところで立ち止まっても仕方がないと思いキモエさんのいる応接室へ向かおうとしていた。

「キモエさんの言うことを全部信じてもいいものかなあ？」

モオルダアはスケアリーを引き止めるように聞いた。モオルダアのこの言葉にはスケアリーにも少し引っ掛かるところがあった。先ほどキモエの屋敷であの怪物に襲われた時の事が頭の中に甦ってくる。あの怪物はキモエを見てどこかへ行ってしまった。キモエはあれが絵から飛び出したなどと言っているが、本当は何かを知っているのに知らないフリをしているのだろうか。

あれは絵から飛び出して来たわけではない。しかし、実際に存在していてスケアリーに襲いかかってきたのだ。それとも、あれは怪物でもなんでもなくて、スケアリーの恐怖心が彼女に錯覚を起こさせただけかも知れない。スケアリーはまだあの怪物の事をモオルダアに話していない。少なくとも、あれが何か解るまで「あの怪物に襲われた」なんていう途方もない話をモオルダアにはしたくなかったのだ。

「誰が嘘をついているにしても、とにかくこの写真をキモエさんに見せてみないと何も始まりませんわ」  
確かにそのとおりなので、モオルダアはまた歩き出したスケアリーを追いかけた。

## 8 応接室

「これは私の両親ではありません」  
写真を見るなりキモエはきっぱりと否定した。

「でもここに書かれている名前はあなたの両親のものですわよねえ？」

「そうですけど、これは何かの間違いに決まっています」

キモエはまったく知らない人間の遺体を見せられて「これは両親か？」と聞かれたことに苛立っていた。そして、父親との思い出を汚されたような気がして涙がこみ上げてくるのを必死にこらえていた。

「ということは、キモエさんの両親の死は曖昧なものになってしまっただよねえ」

少し遠くでキモエの屋敷の青写真を見ながらモオルダアが言うと、キモエの心はついに折れてしまったようだ。

「曖昧な死なんてありません。私の父は死んだんです。私を一人残して死んでしまったんです。目も当てられぬ姿になって戻ってきたというのに。曖昧だなんて、そんな言い方はひどすぎます。あなた達はいつたい……」

モオルダアの何気ない一言でキモエがこの二年間耐えてきたいろいろな事が一気に吹き出して来てしまったようだ。キモエは顔を伏せたまま声をあげて泣いている。スケアリーはモオルダアを睨みつけていたが、こんな事になるとは少しも思っていなかったモオルダアには何もできない。

スケアリーはキモエの隣に座ると、キモエの肩に手を掛けて軽く自分の方へ抱き寄せた。

「良いんですよ。どうしても拭い去れないつらい事もあるんですから。あなたはこれまでよく頑張って来ましたわ。でも、今あなたは事件に関わっているんですから、ここはもう少し強くなっていただかないといけませんわよ」

キモエはスケアリーの言うことを聞いていたのかどうか解らないが、今度はスケアリーの太股の上に顔を埋めて泣いていた。子供のように声をあげてなくキモエを見てモオルダアはなんだかここに居づらい感じになってきたので、手にしていた青写真を持って部屋を出ることにした。

## 9 ペケファイルの部屋

なんだか全然ワケが解らないなあ、と思いながらモオルダアは机の上に拡げた屋敷の青写真を眺めていた。あの謎の男はこんなものをモオルダアに渡してどうしろというのだろうか。

モオルダアはしばらくの間青写真を見ながら、自分がその屋敷に住むことを想像して楽しんでいた。名士達を招いてディナーをとるモオルダア。ウィットに富んだ会話で場をなごませるモオルダア。葉巻を吸うモオルダア。そんな優雅な生活の中でも事件が起きると秘密の扉を開けて地下の秘密基地に降りていくモオルダア。「これじゃあまるでバットマンだな」と思って、何となく虚しくなるモオルダア。

ここでモオルダアは変な想像をやめて事件に集中することにした。こんな良く解らない謎を解こうとするよりも前

に、現実を起こっていることを調べるのが先である。モオルダアは警察に電話をかけてマサシタと新米の警官がどうなったのかを聞いてみた。

「だいたい予想はできていたのだが、二人ともまだ見つかっていないということである。それから、これも予想できていたが、警察署にあった例の液体は「化学兵器処理班みたいな人たち」が来て押収してしまったそうだ。

結局何も解らない。モオルダアが腕組みをして考え込んでいるとペケファイルの部屋の扉が開いた。

「おい、モオルダア！ 何をやっているんだ！」

突然やって来たのはスキヤナー副長官だったが、今回はこれでもう三度目なのでモオルダアはあまり驚いていない。

「途方に暮れているんですよ。それより、あなたこそ何をやっているんですか？ こんな夜遅くに、もう帰っているかと思いましたよ」

「私は出番がありそうな時にはちゃんとここで待機しているんだよ。それはどうでも良いけど、なんか変なのが来てるからキミに知らせに来たんだよ」

「変なの、って？」

「良く知らないけど、モオルダアに会わせろと言っているらしいぞ。今ビルの入り口のところに待たせてある」  
「なんだかスキヤナー副長官は受付係みたいな事をしている。そんな事を思いながらモオルダアは入り口のところへ向かった。」

そこには風呂敷を持ったフロシキ君がそわそわしながら待っていた。

「こんなところに人を待たせるなんてエフ・ビー・エルもたいしたことないな」

モオルダアを見るなり悪態をついているフロシキ君はビルの中の方をチラチラと見ていた。どうやらフロシキ君はFBLビルディングの中がどうなっているのか見てみたかったようだが、このビルも一応は一般の人間は立ち入り出来ないようになっているので簡単には入ることが出来ない。

「キミが来てくれたおかげで、ボクがローン・ガマンのアジトに行ったことの意味が出てくるってワケだな」

二人の会話は全然会話になっていない。しかし、フロシキ君もローン・ガマンも今回は意味もなく登場したのではないというところは確かなようだ。きっと何かを発見したに違いないのだ。

「アンタが喜びそうなものを持ってきたよ」

フロシキ君は人のことを「アンタ」と呼ぶタイプの人間のようだ。モオルダアはそう思っていたがそこには特に意味がない。

「やっぱりあれは霊的エネルギーが関わっていたということか？」

「そんなものよりもここにあるのはもっとリアルなものだぜ」

そう言っつてフロシキ君は風呂敷の中からポリ袋を取り出した。食品を保存する時などに使う簡単に密閉できたり開けたり出来るあのポリ袋である。フロシキ君がそのポリ袋をモオルダアの前に持ってきて開くと、リアルな臭いがモオルダアの鼻を突いた。

「クサッ！ 臭いなあ、それ」

思わず鼻をつまんだモオルダアだったが、悪臭が今回の事件には良く登場していることを思い出した。警察署も臭かったし、FBIビルディングもモオルダアがいない間に臭くなっていったということだ。そして、その臭いの元は「化学兵器処理班みたいな人たち」が持ち去って行ったという事だから、それは重要なものに違いない。

「そんなものをどこで手に入れたんだ？」

「どうやら世間はエフ・ビー・エルよりもローン・ガマンに期待しているらしいぜ」

フロシキ君は何故か得意げである。

「怪しい人が現れてこれを置いていったつんだよ」

怪しい人というのはモオルダアからノートパソコンを奪っていった謎の男と同じ人物だろうか？

「その人って無表情だけど妙に威圧的な人じゃなかった？」

「そんなことはなかったけどねえ。フードを被って顔は良く解らなかったし、一言も喋らなかったぜ」

それじゃあ、あの謎の男とは別の人間に違いない。だいたい、あの謎の男がモオルダアではなくてローン・ガマンに重要なものを渡すワケがない。

「今ヌリカベのやつが詳しくこの物質を分析中だから、すぐに来てくれ。ヌリカベのやつはモオルダアさんじゃ理解できないだろうからスケアリーさんと一緒に来て欲しいって言ってたぜ」

ヌリカベ君がもう少し分かり易く説明してくれたら、自分にも理解できる！ とモオルダアは思っていたが、フロシキ君にそれを言っても仕方がないので、何となくモヤモヤしてしまうだけだった。それよりも、今すぐにローン・ガマンのアジトへ行けるわけではない事を思い出した。あれからキモエはどうなったのだろうか？



「ボクらにもいろいろやる必要があるから、キミは先に戻っていてくれないか。後で必ず行くから」

「それなら、オレは中で待っているけど」

フロシキ君はどうしてもFBLビルディングの中が気になるらしい。

「こんな重要な手掛かりを持ってきているオレは今では一般人ではなくて関係者という事だからね。中に入ってもいいだろう？」

「いやあ、キミはダメなんじゃないか？ 見た目が怪しすぎるから」

「どういふこと？」

「キミが中にいるときっと逮捕されるから、帰った方がよいよ。中が見たかったら今度内緒で入れてあげるから」

「約束だぞ！」

フロシキ君はモオルダアの前に右手の小指を差し出した。指切りをしようと言うのだろうが、モオルダアはフロシキ君と指切りをする気にはなれなかったので、人差し指で軽くフロシキ君の小指の先をたたいてごまかした。

ペケファイルの部屋に戻るとスケアリーが待っていた。

「ちよいとモオルダア！ どこに行っちゃったんですの？」

「ちよつと、来客だね。なんだか今回はボクの知らないところでいろいろと話が進んでいるからまいっちゃうよ、ところでキモエさんは？」

「あの方なら応接室にいますわよ。あれからいろいろ聞いてみたんですけど、キモエさんは何も知らないみたいですわ。あれが演技だとしたら大したものですけどね。あなたもさつき見たでしょう？ それと、キモエさんが先ほどは泣いたりして失礼しました、って言っていましたわよ」

それを聞いてモオルダアは少し安心した。何気なく言ったことで人を傷つけるのはモオルダアの得意とするところだが、そういうことがあるとモオルダアもけっこう傷つくのだ。

「それから、今夜はキモエさんはあたくしの家に泊まることになりましたわ。あの家はちよつと危険な感じでございませよ？」

「それはそうだね。確かに危険だよ。交通事故の報告書と一緒にあの屋敷の青写真が入っていたんだから、きっとあの屋敷自体に何かがあるに違いないんだ。だけど、今夜は帰れそうにないよ」

「何でですか？ あたくしはもう疲れたから帰ろうかと思っていただけ」

「でも、もう手に入らないと思っていた事件の証拠があるなら、帰って寝るわけにもいかないよ」

「あら、それはどういう事ですか」

疲れ切っていたスケアリーの瞳に輝きが戻ってきたような感じがした。

## 10 ローン・ガマンのアジト

ローン・ガマンのアジトには正式メンバーのヌリカベ君とその他の二人と、ペケファイルの二人が集まっていた。全員防毒マスクをつけているのでモゴモゴと喋っている。

「一体この臭いはなんなんですか？」

防毒マスク越しにスケアリーが聞いた。今のところ臭いの元は密封されていて、この部屋に悪臭は漂っていないのだが、いつ何時あの臭いが漏れてくるか解らないと言うことで全員防毒マスクをつけているのだ。

「突然変異したバクテリアが人間の皮膚を少しずつ分解している時に発生する臭いだと思います」  
「憧れのスケアリーに聞かれたのでヌリカベ君はいつもよりも多めに喋っている。」

「突然変異する前には普通のバクテリアだったってこと？」

「普通のバクテリアという種類はありません」

モオルダアの質問だとヌリカベ君はいつものように答える。

「バクテリアといえばあたくしは事件現場で採取した液体におかしなものを見つけたんですのよ。あの液体が人間が溶けて出来たものだと思ったら、バクテリアが見つかったもおかしな事ではないんですけれど、人間の体内にいるようなバクテリアとは思えない特徴がありましたわ」

「それが、つまり突然変異したバクテリアってこと？」

モオルダアは自分にも少しは解るということを知ってもらいたくていちいち口を挟んでくるが、あまり意味がない。

「変異するのは人間の皮膚に触れて何時間か経つてからなんです。だから時間が経つとその皮膚は少しずつ溶けだして、凄く臭くなるんです。もしかすると、スケアリーさんが見つけたそれが突然変異する前の状態かも知れません。元の状態では皮膚を溶かすような性質はないのですが、変異してから皮膚を分解し始めるんです。ボクらが手に入れた皮

膚にも始めは元の状態のバクテリアが見つかったんですが、性質が変わるなんて気付かなかったんで、サンプルはとってないんです」

今度は少し長すぎなのでヌリカベ君の代わりに元部長が説明した。

「そんなものはなくて良かったのかも知れないぜ。あれは絶対に人間を瞬時に溶かしてしまう強力な化学兵器に違いないんだから」

せっかくなのでフロシキ君も話しに加わった。

この時すでにモオルダアの頭の中では変な想像が始まっていた。そしてそれは証明できないいくつもの事柄を除けば完璧な理論であった。

「人間を溶かすのは人間を殺すことが目的ではないと思うけどね。仮に、人間とは似てもにつかぬ何かが地球にやってきて人間の中に紛れ込もうとしたとするでしょ。そう言う時に彼らは体の色や形を変えて人間になりますのかなあ？それは違うと思うよね。いくらなんでも、それは現実的じゃない。そうじゃないとしたら、どうやって人間の姿に化けるのかということだけど、それは意外と簡単なことなんだよ。ヤツらは自らの体に人間の皮膚を被って人間になりすますんだ。それで彼らには人間の皮が必要になるから、特殊なバクテリアを使って人間の体の内側だけを溶かして皮膚を手に入れるんだ。それでも、しばらく経つと皮も溶け出すのは、まだ彼らの技術も完璧ではないということだと思うけど。もしかすると今はそのバクテリアの試験の段階なのかも知れないしね」

得意げに話したモオルダアであったが、誰もモオルダアの話を最後まで聞いていなかった。始めからモオルダアの言うことを聞く気がなかったスケアリーが別の質問をしたので話がそちらに移っていたようだ。

「ホントにそれが新種のバクテリアで人間を溶かすことがあるのなら一大事ですわ」

「それはそうですけど、このバクテリアは人間の体内に侵入することがほとんどないからそれほど危険ではないんです。それに皮膚に付着すると性質が変わってしまい、少しは皮膚を分解しますが、それが致命的になる前に変異したバクテリアは死滅してしまうんです。もし体内に入ったとしても変異しているために体内の組織を分解することはないんです。でも悪臭は問題ですけどね」

元部長はあたかも自分が調べたことのように言っているが、これは全部ヌリカベ君から聞いたことである。

「でも人間が溶解して出来たと思われる液体が短い間に二度も発見されたんですよ。それに二人の人間が行方不明ですわ。これはどうやって説明したらいいんですの？もしかしてそのバクテリアがまた別の性質に変異したということ

があってもおかしくありませんわ」

「誰かが直接人間の体内にバクテリアを注入したんだと思うけどね。どんな理由であれ、その必要のある誰かがそれを実行したんだよ。それに今回の事件で行方不明なのは四人だよ。キモエさんの両親のことはまだ確認できてないんだからね」

今度は自分の推理にうっとりすることなく最後まで皆が話を聞いていることを確認しながらモオルダアは言った。

「それじゃああなたはキモエさんの両親がまだ生きていて、この騒動に関わっているとおっしゃるの？」

「生きているかどうかは別として、誰にも予期できないような誰かが関わっているような気はするよね。だいたいそのバクテリア付きの人間の皮膚をここへ持ってきたのは誰なんだ？」

モオルダアの言うことは先ほどの地球外生物の話よりはまともなのでみんなもまともに反応している。

「あれは幽霊みたいに気味の悪いやつだったぜ。顔はフードに隠れてほとんど見えなかったけど、妙に目がギラギラしてて。それで一言も喋らずにオレにそれを手渡すとそのまま煙のようにいなくなっちゃったんだから」

煙のように、とはフロシキ君の大げさな言い回しである。本当は気の小さいフロシキ君は、その誰かの不気味さにはしばらく唾然としていたので、去っていくところまでは覚えていなかっただけだが。

幽霊みたい、と聞いてモオルダアはまた「エクトプラズム」を持ち出してきたくなかったが、もうそろそろ「それはないなあ」という感じがしていたので我慢した。スケアリーは今回の事件で幽霊みたいなものには敏感に反応してしまふ。キモエの屋敷の印象とか、そういうもののせいでもあるが、なによりもキモエの屋敷で遭遇した得体の知れない何かの姿が鮮明に彼女の頭に甦ってきてしまうのだ。あの怪物の目もギラギラしていた。それからキモエの屋敷の部屋に飾ってあったあの絵に描かれた怪物の目もギラギラしていた。全ての終わりを知らせているかのようなあの目。出来ればもう二度と見たくないものであった。

「話が済んだのならもう行きますわよ、モオルダア」

「あれ、もう帰るの？ せっかく盛り上がってきたのに」

と言っても、スケアリーはすでに玄関へ向かって歩いていった。モオルダアは一度振り返ってローン・ガマンの正式メンバーとその他の二人に黙って手を振ってからアジトを後にした。

モオルダアが玄関を出るとスケアリーはもうすでに自分の車の近くまで歩いていった。

「ちょっと、今日はなんだか変だけど大丈夫なの？」

小走りにスケアリーを追いかけてきたモオルダアが聞いた。

「大丈夫に決まっているでしょ。朝早くから起こされて変な事件の捜査をさせられて、大事なパソコンをなくして、最後には変な話を聞かされて。全然大丈夫ですわよ！ ですからあなたはまた鼻血を出したくなければ一人で歩いて帰らないさい」

なんだか猛烈に怒っている。モオルダアにはどうしてスケアリーがこんなに怒っているのか良く解らなかったが、これではどう考えてもスケアリーの車で送ってもらうのは無理なような気がしたので、車に乗るのはあきらめた。

スケアリーは車を発進させると、何ブロックか進んで、何度か角を曲がってそこでなぜか泣きそうになって車を止めた。そしてそのままうつむいて黙っていた。

## 11 F B Lビルディング

応接室ではキモエが毛布にくるまってソファの上で仮眠をとっていた。夜になってほとんど人のいないF B Lビルディングの中ではあるが、一人で屋敷にいるよりは安心なのであろう。それにスケアリーはすぐに帰ってくるはずだから、その後はスケアリーの家へ行ってゆっくり休めるはずだ。

普段は屋敷に閉じこもって絵の勉強をしている「自称(女)ニート」の彼女にとって、今日は一日が長く感じられた。半分だけ目を開けて時計を見るともう深夜になっていた。スケアリーが帰ってくるまでは寝ないで待っていようと思っていたキモエだったが、目をつむるといつの間にか眠りに落ちていた。

浅い眠りの中でキモエは夢を見ていた。こんなふうには神経の高ぶっている時には普通の夢を見ることはあまりない。広くて暗い場所にキモエは一人であたはずんでいた。始めから彼女は一人でそこにいたのだが、彼女は自分だけがそこに残り残されていることを知っている。どこに行くことも出来ず、不安な気持ちのままそこに一人でいなければいけないことは解っていた。辺りは真っ暗で何も無い。

キモエは遠くから何か近づいてくるのに気付いた。まだ視界には何もないのだがキモエにはそれが何であるかは解った。それはキモエの屋敷に飾ってあるあの怪物の絵にそっくりなのだが、それは絵に書かれた怪物とは違うものだ。

そう思ったとき、その怪物はいつの間にかキモエのすぐ近くまで近づいてきていた。「これは私の味方じゃない」と思ったキモエは恐ろしくなり逃げだそうとしていたのだが、足が棒のようになって動くことが出来ない。怪物はもうすでにキモエの前にやって来て鋭いかぎ爪でキモエにつかみかかって来るところだった。かぎ爪が目の前に迫って来た時、キモエは自分を呼ぶ父親の声を聞いて目を覚ました。

「キモエさん、起こしてしまってもういいです」

応接室には一人の男が入って来ていた。キモエが夢の中で父の声だと思ったのは、この男が彼女を呼んだ声だったようだ。

「私はエフ・ビー・エルのイチクラです。あなたを安全な場所までお送りするためにやって来ました」

このイチクラと名乗る男は付け髭をつけて変装しているクライチ君である。これで変装とはひどいものだが、キモエはクライチ君の顔をハッキリとは見たことがないので気付いていない。

「でも、ここにはスケアリーさんがやって来るはずですが」

「ん！？ ああ、そうでしたね。でも彼女は今夜は忙しくなるということですから、私が代わりにやって来たのです。さあ、急がないといけませんよ。ここだって安全とはいえませんがねえ。さあ、急いで」

変装したクライチ君は少し強引な感じでキモエの手を引いて起きあがらせた。キモエは少し心配だったが、ここへやってこられるということはエフ・ビー・エルの職員には違いないのだし、大丈夫だろうと思って変装したクライチ君についていくことにした。

## 12 車中

そのころ、まだローン・ガマンのアジトの付近をトボトボと歩いていたモオルダアのところへ一台の車が近づいてきた。車はモオルダアのすぐ横に停止してモオルダアを驚かせた。別に驚くようなことでもなかったのだが、モオルダアは事件についてあれこれと推理のような妄想を頭の中で展開させていたので些細なことでも驚いてしまうようだ。

車の窓が開くと中からスケアリーが顔を出した。

「乗せていってあげてもいいんですよ、モオルダア」

妙にスッキリした表情のスケアリーを見てモオルダアは不思議に思っていたが、これなら殴られることもなさそうだし、なによりも、このまま歩いていたのでは時間の浪費である。モオルダアはスケアリーの車に乗り込んだ。

「あなたはキモエさんのお父様がどうしてあの絵を描いたのだと思いますか？」

運転しながらスケアリーが聞いた。「あの絵」と聞いてモオルダアにはそれがあの怪物を描いた絵であることがすぐに分かった。

「さあねえ。あの絵が他の絵と違うのは、もしかすると作風を変えた後の一枚目だったからかも知れないね。あれが最後の作品ということだから、今でも絵を描き続けていたとしたらあの家には恐ろしい絵が沢山飾られていたのかも知れないけどね」

モオルダアにしてはまともな意見にスケアリーは少し物足りない気がした。

「あの絵には何か特別な意味があるように思えるんですよ。もちろん、あの怪物が絵から飛び出すなんてことはあり得ませんけれど。でもあの絵の印象が強烈で後で何かに襲われた時に、それがあの怪物に襲われているような錯覚に陥るといふことは考えられますよ？」

「ボクは危険な状況になるといつも君に怒られているような感覚になるけどね」

「ちよいと！ 真面目に聞かないのならどうなっても知りませんわよ！」

スケアリーが静かに話していたのでつい油断して冗談を言ってしまったモオルダアはやっと真面目になった。それと同時にやっとスケアリーの言っている意味を理解したような気がした。

「それって、キミが誰かに襲われたってこと？」

「誰かじゃなくて、何かですわ。でもあたくしはずっとあの絵の怪物に襲われたと思いこんでいたんですけど。でもそんなことはあり得ませんでしょ？ あたくしはあのお屋敷に入ってあの絵を見た時からずっと不気味な気持ちでいましたから、だからとっさの出来事に錯覚を起こしたに違いありませんのよ。あたくしを襲ったのは大きなイヌとか、どこから逃げ出した肉食動物とかそういうものだと思うんですよ」

スケアリーはどうしても自分を襲ったのが得体の知れない怪物だということに認めたくないようだ。

「でも、そうだとするとまた話がややこしくなってくるけどねえ。謎の液体に行方不明の二人。それから写らないカメラとかバクテリアとか。それからキモエさんの両親のこともあるけど。そこに大きなイヌとか逃げ出した肉食動物まで

出てきてしまうと話を一つの線で繋げるのは一苦勞だよ」

「別に一つの線でつながらなくても、全てに納得のいく説明が出来れば良いことでございませう?」

「ただしね、キミがああ絵の動物に襲われたとしたら、上手いこと話がつながるような気もするんだけどね。だって、あの絵の怪物は皮膚がなかったでしょ?」

スケアリーはブレーキをかけて車を止めた。モオルダアの話にゾツとしてはいたが、車を止めたのは目的地に着いたからであった。

「着きましたわ」

「あれ? ここはどこだ?」

てっきりF B Lビルディングに向かっていると思ったモオルダアだったが、ここは違う場所のようだ。よく見ると窓の外にはキモエの屋敷の塀が見える。

### 13 もう一つの車中

薄暗い狭い道でスピードを出して走っている車の中でキモエは怯えていた。運転しているのは付け髭をつけたクライチ君だ。

「本当にこの道で良いんですか?」

後部座席から身を乗り出してキモエが聞いた。

「ダイジョブですよ。あなたに危害が加わるところも面倒な感じですよ」

クライチ君の言うことを聞いてキモエはさらに不安になっていた。

その時クライチ君がバックミラーにこちらを追いかけてくる物影を発見した。

「マジですか? もうつつか!?!」

意味の解らない独り言を言っただけでクライチ君は車をさらに加速させた。クライチ君の様子を見てキモエも振り返って車の後ろを確認した。

それは猛スピードで走る車にどんどん近づいて来てすぐにそれが何か解るぐらいの距離まで近づいてきた。あの怪物がこの車を追いかけてきているのである。獲物を追いかける肉食動物のように四本足で走っている。キモエは近づいて



くる怪物を目を凝らして見つめていた。そしてそれが車に飛びかかって来る瞬間にキモエはその怪物と目を合わせた。その時キモエは何かに気付いてハッとした。

車に飛びかかって来た怪物の足が後方のトランクの上に乗った時、クライチ君は急ブレーキをかけた。怪物はそのままの勢いで車の前方に投げ出されたが、地面にたたきつきられる直前に体勢を立て直して、見事に着地した。今度は前方からこちらに向かって突進してこようと身構えている。

クライチ君は素早く車を降りて怪物に相對していた。手には球状のものが握られている。クライチ君は怪物から注意をそらさないように、辺りを見回すと、すぐ近くにこの道路と垂直に交わる路地を見つけた。

クライチ君が持っていた球状のものを怪物の方にかざすと、怪物はクライチ君目掛けて突進してきた。それを見たクライチ君は怪物との距離が半分ぐらいに縮まったところで持っていた球状のものを路地に向かって投げた。それを見た怪物はスリップしながら向きを変えて勢いよく路地を転がる球を追いかけていった。

クライチ君はホッとして車に戻ってきた。

「あれは一体何なんですか？」

何が起こったのか理解できていないキモエが聞いた。

「なんて言うか、マタタビボールですよ」

なんの説明にもなっていないが、クライチ君はここで緊張の糸が切れたのか、思わず付け髭をとってしまった。

「あっ、あなたは！」

キモエはようやく自分が騙されて連れ出されたことに気付いた。

「あっ、やべえ！」

クライチ君は慌てて車内のドアの全てにロックをかけた。もう少しのところまでキモエはドアを開けて逃げ出せたのだが、クライチ君の方が少しだけついていていたようだ。

車が走り出してもキモエはなんとか外に出ようと車のドアのレバーをいじっていたのだが、開けることは出来なかった。開いたとしてもこのスピードで走る車から降りることは無理だったに違いない。

「心配ないですよ。家まで安全に送ってあげるだけですから」

そんなことは信じられないが、キモエはあきらめておとなしく後部座席に落ち着くことにした。「きつとまたあの絵が助けてくれるに違いない」と、そう信じながら。

## 14 キモエの屋敷

モオルダアは扉をよじ登って裏庭に侵入しようとしたが、やっぱり今回も扉の上でバランスを崩してみつともない感じで庭に落ちてきた。起きあがったモオルダアの前にはスケアリーがいた。

「あれ？ いつの間に入ってたんだ？」

「あなたこそ、どうして表の門から入ってこないんですの？ あたくしはただ用心のために車を裏に止めただけなんですけど」

「まあ、それはどうでも良いことだよ。それよりも、ここへ来たのはやっぱりキミもあの青写真が気になっているからだろ？」

「違いますわよ。あなたと一緒にここへ来れば、あたくしを襲ったあの何かが今度はあなたを襲うんじゃないかと思って、そうすればあたくしはあれが何だったのか確認できますでしょ」

「どうやらモオルダアはおとりとして連れてこられたみたいだ。どうしてスケアリーは自分ではなくモオルダアが襲われると確信しているのか解らないが。」

「なんだか言ってるこの意味が良く解らないけど。でもせっかくここに来たんだからボクはボクの調べたいことを調べよ」

モオルダアは屋敷の周りを歩いてどこかに侵入できる場所はないかと探していた。歩きながら窓を見つけるとモオルダアはその窓が開くかどうか確かめていたが、それらは全て閉まっていた。灯りを消した屋敷の中は外からはほとんど見ることが出来ない。モオルダアの後ろで窓の中を覗いていたスケアリーは、そのむこうの闇の中にあの怪物が潜んでいるのではないかと思うと手に汗がにじんでくるのを感じていた。

「モオルダア、やっぱりこういうことは朝になつてからいたしませんこと？」

「そんなことを言っても、ここへ連れてきたのはキミの方じゃないか」

「あたくしはお屋敷の中に入ろうなんてことは思っていないんですけど。ここに居るだけであれば必ず現れると思っ  
ていますから。それに、あんな真つ暗な中で何かがあるのを襲ったとしてもあたくしはあなたを助けることが出来  
ないですわよ」

「そうかも知れないけど、もしもお腹を空かせた猛獣がいるとしたら、ボクらはすでに襲われていると思うけどね」  
鍵の掛かった窓をガタガタとゆらしながらモオルダアが言っている。何かに気付くと子供みたいに夢中になるモオルダ

アを、いつもなら「勝手にしなさい」という感じで放っておくスケアリーであったが、この場所で一人になることは危険であると思っていた。

「そんなにお屋敷の中を調べたいのなら、そうすれば良いんですわ。こっちに来なさい」

スケアリーはモオルダアを連れて勝手口まで来た。ここを通ったのはスケアリーとキモエが最後なので、誰かが鍵を掛けない限り中に入れるはずである。

勝手口の扉を開けるとモオルダアはモデルガンと小さな懐中電灯を取り出して中に入っていった。

「いい加減にオモチャの銃はやめたらどうなんですの？」

スケアリーはモオルダアの後から本物の銃と懐中電灯を構えて入ってきた。そして自分の手にしている銃を見ながらスケアリーは忘れていたことを思い出した。

「あらいやだ。モオルダア、あたくし何でこんなことに気付かなかったのかしら」

こんなふうに自分の誤りを認めるスケアリーはめずらしい。

「この扉の外にあたくしを襲った何かの足跡があるはずですわ」

モオルダアは屋敷に侵入して気分が盛り上がっていたところに水を差された感じだったが、スケアリーと一緒に再び庭に戻った。

「おかしいですわ」

スケアリーは自分が襲われた辺りから、怪物が逃げていった扉の方まで懐中電灯で照らしていったが、そこに足跡はなかった。

「誰かが故意に消したとしか思えないね」

モオルダアの言うとおり、スケアリーが照らしている場所には人間が靴で地面をならした跡があった。

「どういうことですか？」

地面を見ながら、スケアリーはほとんど独り言のように聞いた。

「何かの存在を隠したがっている誰かがいるってことだよ」

モオルダアも地面を見ながら、ほとんど独り言のように答えた。

優秀な捜査官になりきっているモオルダアは暗い屋敷の中を怖がることもなく進んでいく。彼は各部屋の扉を開けて

中を調べていた。スケアリーはモオルダアが部屋の扉を開けるたびに何か飛び出して来るのではないかとヒヤヒヤしながら銃を構えるのだったが、屋敷の中はいたって静かである。

「ちよいとモオルダア、一体何を探しているというんですの？」

「いちいちヒヤヒヤするのが面倒になったスケアリーが聞いてみた。」

「ボクの推理が正しければこの家には隠された部屋があるはずなんだよ」

その隠された部屋というのは、さっきモオルダアの妄想の中に登場した地下の秘密基地のことだろうか。

「そんなことはあなたの持っている青写真を見れば解ること何じやございませんの？」

「そうなんだけどね。あれは部屋に置いて来ちゃったし。あれ？　そういえばキモエさんはどうなったんだ？」

「あらいやだ、あたくしったら…」

キモエのことをすっかり忘れていたスケアリーは慌てて外に出ようと屋敷の廊下を後戻りし始めた。するとその時、屋敷の外に大勢の人間が入ってくる気配を感じて二人は廊下の窓の横に身を潜めた。

窓からそつと外の様子をうかがうと、庭にはライフルのような物を持った人が大勢やって来てそれぞれ決められた配置へと迅速に移動していくようだった。これは先ほどのインチキ臭い「化学兵器処理班みたいな人たち」とは違う訓練された本物の特殊部隊のようだった。何の特殊部隊かは解らないが本物である。

配置についた特殊部隊はそれぞれ物影に隠れているので、庭は再び先程までの静寂を取り戻したように見える。そこへ一台の車が門から庭の中へと入ってきた。車が止まると運転席から降りてきたのはクライチ君だった。クライチ君は片手に銃を持って後部座席の扉を開けた。そして銃を車の中に向けて何かの指示をすると中からキモエが出てきた。クライチ君はキモエの背中に銃を突きつけて庭の中の方へと歩いて来た。

「どういたしましょう。あたくしがうっかりしていたせいでキモエさんが大変な事になっていきますわ」

そう言ったもののこの状況で二人には外の様子をうかがう以外に出来ることはなかった。何かをしようとしたところで、次に起こったことはほんの僅かの間に方がついてしまったので何も出来ることはなかった。

モオルダアとスケアリーの頭上から幽かにドシンという音が聞こえてきた。音の大きさから判断するとそれは二階ではなく、さらにその上の屋根の上から聞こえてくる音のようだった。二人が「何だろう？（何かしら？）」と思う間もなく、屋根の上から何か落ちてきて二人が覗いている窓の外に着地した。

モオルダアはこれを見て驚きの悲鳴とともにひっくり返ってしまうところだったが、彼が目の前に落ちてきた物を確認するよりも先に、それはキモエのいる方へと突進していった。

「ああああ…」

モオルダアが何かを言おうとしたが言葉になっていない。スケアリーも心の中では同じ感じだったに違いない。勝手口の外でスケアリーを襲った何かの姿は錯覚でも幻覚でもなく、スケアリーの見たそのままの姿であることが今確認できたのだ。

キモエはクライチ君から離れようと掴まれている腕を必死に振りほどこうとしていたが、無駄な抵抗だったようだ。クライチ君は怪物が自分の方へ向かって来るのにもかかわらず平然と暴れるキモエを押さえつけている。

怪物とクライチ君達の距離が縮まっていくと再びモオルダアの「ああああ…」という声が漏れた。するとその時、物影に隠れていた特殊部隊が一齐に飛び出してきて怪物に向かって発砲した。

何発もの弾が命中したはずだが怪物は痛がるだけでなかなか倒れない。もしかするとそれは麻醉銃のような物だったのかも知れない。しばらくの間、同じところで狂ったようにもがいていた怪物は次第に動きを鈍らせると最後には動かなくなってしまった。

するとそこへワンボックスカーが門を通って入って来た。中からは「化学兵器処理班みたいな人たち」と同じような格好をした人間が数名降りてきて怪物の周りを囲んだ。彼らは怪物の体を調べていたがすぐに怪物の体を持ち上げてワンボックスカーの荷台に押し込んだ。ワンボックスカーはすぐに外へ走っていった。

「モオルダア！ どうするんですの」

頭の中はまだ「ああああ…」という言葉で埋め尽くされていたモオルダアだったが、スケアリーの言葉に少しだけ我に返ることが出来た。スケアリーが「どうするんですの」と言ったのは、何かの特殊部隊が屋敷の中へ入って来ようと玄関を開けているのに気付いたからである。

「アワワワワ！ これは大変な事になったよ！」

「そんな事は解っていますわよ！」

大変な事になった時にどうすれば良いのか。二人があんなすごい物を目撃してたと知れたら、彼らに何をされるか解らない。大変な事になった時には逃げるしかない。

二人は慌てて勝手口から外に出た。そこにはまだ何かの特殊部隊の姿はなかったが、遠くからこちらへライフルを

持って走ってくる数名の足音が聞こえていた。スケアリーは「なんだかデジャヴみたいですね」と一瞬変な事を考えてから、塀の方へ向かおうとするモオルダアを引き留めた。

「こちらですわ！」

スケアリーはモオルダアの手を引いて先ほどの秘密の隠れ家へと向かった。

## 15 秘密の穴蔵

スケアリーが続いてモオルダアが中に入ってハッチを閉めた。ここへ入ってくるところを特殊部隊に見られていないか心配で、二人は黙って様子をうかがっていたのだが誰も二人には気付いていないようだ。

スケアリーはキモエがやったのと同じように、ライターを探してローソクに火をつけた。次第に明るくなるこの秘密の隠れ家に対するモオルダアの反応はスケアリーの時とはまったく違っていった。モオルダアだったら、こういう場所は「秘密の隠れ家」ではなくて「秘密基地」にしたがっただろう。モオルダアはコンピューターとか監視カメラの映像を表示するモニタとか、そういう物ではなく大量のぬいぐるみや絵本が置かれているこの場所に少しガツカリした。

一瞬の落胆の後にモオルダアはそんなことを気にしている場合ではないことを思い出した。

「これは一体どういうことなんだ？」

モオルダアの言う「これ」とはこの「秘密の隠れ家」も含めて色々なことを表す「これ」になってしまっている。

「あれは一体なんなんだ？」

今度の「あれ」はさつき彼が見た怪物のことだろう。

「あたくしの見たものはやっぱり本物だったのですわね」

「キミはあんな怪物に襲われたの？ よく無事でいられたねえ」

「それはあたくしにも良く解らないところなんですのよ。あたくしが銃を持っていたからあれが逃げたのか、それとも他の理由があったのか知りませんけど…。とにかく、さっきの人たちはあの怪物を生きたまま捕らえたかっただようですね。それよりも、あのクライチって方は何なんですか？ あの方はFBLの捜査官じゃなかったんですの？」

「なんか、どうやら違うみたいだよ」

二人はやっとクライチ君の正体に気付いたようだ。

「それよりもボクは気になるんだけどねえ。前の事件でキミが見つけた人間とトラのDNAを併せ持つ動物のことだけだ」

「何なんですのそれ？」

スケアリーはあまり興味がなくなっているので忘れていいのかも知れませんが、シーズン2の最初の二つのエピソードで彼らが追っていた謎の生物のことです。

「もしかして、あなたは先ほどの怪物は人間と何かの動物を掛け合わせた生物だとおっしゃりたいの？」

「まあ、ボクの知る限りではさっき見たような動物はどんな凶鑑にも載ってないからね。もしも、あれが人間によって作り上げられた生物でないとしたら、あれは宇宙人も知れないしね。…もしくは絵から飛び出してきた妖怪かな？」  
宇宙人と言ったところでスケアリーからの反論があると思っていたモオルダアは、最後にちよつとおどけて見せたのだが、ただスケアリーの気分を悪くしただけのようだった。スケアリーは眉間にしわを寄せて、なんとかして自分で納得のいく説明が出来ないかを考えていた。

ちよつとした間の悪い沈黙を破ったのはモオルダアの携帯電話だった。電話の音に軽くビビったモオルダアが電話に出ると、それはスキヤナー副長官からだった。

「おい、モオルダア！ 何やってるんだ？」

「何って言われても、色々やってますよ」

「それはどうでも良いんだが、キモエさんの姿が見えないんだがキミ達と一緒になのか？」

「キモエさんは一緒じゃないですけど…」

ここでモオルダアが本当のことを言う前に彼の少女的第六感が何かを訴えかけてきていた。FBLの捜査官だと思っていたクライチ君は実は謎の組織の一員であると解った。それと同様にFBLの人間だからといって誰にでもかまわず本当のことを伝えて良いのか解らないのだ。スキヤナー副長官がそうでないにしても、キモエが連れ去られたことをスキヤナー副長官に伝えてFBLが対策を講じるとなれば、どこかからペケファイルの二人がああ怪物の捕獲作戦を目撃したことも知られてしまうかも知れない。

「…姿が見えないってどういうことですか？ それは大変な事ですよ！」

「いやあ、そうなんだがね。キミ達がいらないからつきり一緒にどこかへ行ったのかと思ってね。ということはすぐに搜索を始めないといけないな。キミ達もすぐに戻って来るんだぞ！」

すぐに戻れそうにはない状況だが、モオルダアは了解して電話を切った。

「ボクらはいつまでここにいれば良いんだろう？」

モオルダアはスケアリーに聞いたが彼女に解るわけではない。

「ここが見つかからない限り、ここはとても安全な場所ではあるんですけど、ここにいと外の様子がまったくわからないのが難点ですわね」

「秘密基地にピッタリな場所なんだから、せめて潜望鏡みたいな物でもあればいいんだけどなあ。普通はそうするけどね」

そうするのはモオルダアだけだと思うが。モオルダアは拳骨を作って頭のすぐ上にある天井を軽くたたいてみた。モオルダアが思っていたよりも硬かったようで彼は手を振りながらその手を引っ込めた。

「いったいここは何のための場所なんだ？」

「さあ、知りませんわ。キモエさんが言うには防空壕だった、ってことですけど」

「それに少し豪華すぎないか？ 入り口のハッチにしたって大げさすぎるよ。防空壕というより、ちょっとした核シェルターって感じもするしね」

「でも、戦争の頃ってこの家が一番栄えていた頃でございましょう？」ですから、こんな防空壕を作ってもおかしくはありませんわ」

「まあ、そうかも知れないけど」

まだ何かを言いたそうだったがモオルダアはそれ以上言わなかった。

お互い何かを考え込んで、しばらくの間沈黙が続いていたが入り口のハッチを誰かが開けるような音が響いてきて、二人は慌てて身構えた。始めは誰かがハッチの上を歩いたり、物が落ちて来ただけかとも思ったのだが、誰かがハッチを開けようとしているのは確かなことのようにだ。

スケアリーは口ウソクを全て吹き消してから銃を取り出して入り口の方へ向けて構えた。モオルダアが同じようにしてモデルガンを構えていることは言うまでもないが。

真っ暗になった穴蔵の中にハッチを開ける音が聞こえてくると入り口の付近が月明かりに照らされて少しだけ明るくなった。それが誰だかは確認できなかったが、誰かがこの穴蔵に入ってくるのは解った。そして、その人物が入り口を閉めるとまた再び穴蔵の中は真っ暗になった。



「エフ・ビー・エルですよ！　そこを動かさないで！」  
スケアリーが懐中電灯のスイッチを入れて侵入者を照らすと同時に大きな声で言った。そこに照らし出されたのは心臓が止まるぐらいに驚いているキモエだった。

驚きのあまり言葉も出ずに目を見開いているだけのキモエを見て、モオルダアは本当に心臓が止まってしまったのではないかと思つて心配になった。キモエはなんとか今のパニック状態から立ち直ろうと必死だったようだ。言葉にならない声を何度か漏らした後にやつのこと「スケアリーさん…」という言葉が来た。

「あら、キモエさんじゃありませんか」

スケアリーはキモエに向けていた懐中電灯を自分の顔に向けた。胸の下から照らし出されたスケアリーの顔を見て、モオルダアは軽く驚いたが、これは前の事件でも経験しているので悲鳴をあげるまではなかった。

「あたくしですよ。スケアリーですわ。あなたは彼らから逃げる事が出来たんですの？」

キモエはまだ普通に喋ることが出来ない状態だったようで、しばらく呼吸が整うのを待つてから答えた。

「彼らはもういなくなりました。この家に誰もいないということを確認したら引き上げて行つたようです。でも私はもうあんな恐い思いはしなくて、それでここに隠れていようと思つたんです。きつとスケアリーさんならここに居る私を見つけてくれると思つていましたし。でも、私よりも先にスケアリーさん達がいるとは思つていなかったから」  
キモエはスケアリーの顔を見て安心して居るようだったが、スケアリーはこれを見て申し訳ない気持ちになつていた。  
キモエがクライチ君に連れ去られたのはほとんど彼女の責任なのだから。

「あたくし、あなたに何と云つて良いのか、ホントに申し訳ありませんでしたわ。あなたの安全を第一に考えなくてはいけないのに、あなたを一人にしてしまつたりして…」

「それは良いんです。どうせ、あれを捕まえるには私が必要だったはずですから。あれは存在してはいけけないものなんです。私を守つてくれたのかも知れませんが、そのために関係のない人まで犠牲になつてはいけけないのです。だから私を誘拐したあの人は、私をおとりにしてあれをおびき出したに違いありません」

「問題は、どうしてキモエさんをおとりにする必要があつたのか、というところだよ」

このモオルダアの質問には何か裏があるような感じもした。キモエもその意味に気付いていたようだ。

「私も始めはどうして自分が誘拐されたりするのか解らなかつたのですが、あれが先ほど私の乗せられた車のすぐ後ろまで迫つてきた時に気付いたんです。それは私がここへ連れてこられる途中のことでしたけど。あれが私の乗つた車を

追いかけてきてすぐ後ろまで迫ってきたんです。その時私はあれの目を見て全て解りました」

キモエが自分の知った真実を二人に話すのに少し興奮していることに気付いて、少し間をあけてからまた口を開いた。「始め私は本当にあの絵からあれが飛び出して私を守ってくれていると思っていました。おかしい事だと思われても仕方ありませんが、私は常にあれが私を守ってくれていると思えたからこれまで一人でもなんとかやってこられたんです。でも私が間近に見たあれの目はそれが間違いだと言っていました。あれは絵から飛び出した魔物なんかではなくて、私の父だったのです」

ロウソクに火を点けながら聞いていたスケアリーの手がここで止まってしまった。ここにある半分のロウソクに火を点け終わって、中は明るくなっていたのでスケアリーの「そんなことはあり得ませんわー」という表情がよく見えた。

「でも、あなたのお父様は二年前の交通事故で……」

「私の両親の死が曖昧だと言ったのはあなた達でしたけど」

確かにそうなのだが、どうしてキモエの父親があんな怪物になるのかスケアリーには理解できなかった。

「どうやらすごいことになってきたみたいだよ、スケアリー」

モオルダアの目は輝いていたが、スケアリーはいまだに「そんなことはあり得ませんわー」という表情のままである。

## 16 どこかの研究施設

数人の男達がモニタ画面に映し出される映像に見入っている。男の中の一人は、モオルダアからスケアリーのノートパソコンを奪っていった男である。そして、部屋にはウィスキーの臭いも漂っていた。

モニタ画面には、今別の部屋でおこなわれている検査の様子が映されていた。白衣を着た医師のような者達があの怪物を取り囲んで心電図を確認したり、血液を採取したりしているようだ。血液という表現が正しいのかどうかは解らないが、怪物から採取された体液は人間の血液のような赤い色をしている。

怪物は麻酔をかけられているのか、グツタリとして少しも動き出すような気配はない。それでも万が一に備えて、医師達の周りには迷彩服を着た男達がライフルを持って立っていた。

この作業は一人の医師を中心にして進められているようだった。しばらく続いた作業は、一段落したようで、医師達は計器の数値などを記録していき中心になっている医師に伝えた。そして、それが終わると医師達と迷彩服の男達は全

員がガスマスクの装着を始めた。中心になっていた医師もガスマスクの装着のために医療用のマスクをはずしたのだが、この時にその顔が火傷のあとのように爛れていることが解った。

全員がガスマスクを付け終わると、中心になっていた医師が大きな注射器を取り出した。一目見ただけでは注射器と解らないような大きさと機械的な外見をしていたが、その器具の扱い方を見るとそれが注射器だと解った。

医師は注射器を持って先端を怪物の背中に当てた。医師はしばらくの間躊躇してその体勢のまま止まっていた。周りの医師達はこの様子をおかしく思ったのか、互いの顔を見合わせていた。その雰囲気を感じた医師は、一度怪物の背中に当てていた注射器を離してから、一度注射器を確認するような仕草を見せた。それから、また怪物の背中に注射器の先端をあけると、今度は一気にそれを背中に刺して、中身を注入していった。

怪物は注射器を刺された瞬間に一瞬だけ体を動かしたが、後はそのまま静かにしていた。するとしばらくして、怪物の体が縮み始めた。それと同時に怪物の体の下から、液体が流れてきた。

注射器の中身の成分によって、怪物の体が溶かされているのだろうか。徐々にかさを増していく液体の中で怪物の体は徐々に崩れはじめ、最後には全てが液体と化してしまった。

怪物が乗せられていた台は、この液体がちょうど収まる大きさの箱の役目もしていたらしい。怪物が完全に液体になつてしまうと部屋の外から作業員風の男達がフタを持って入ってきて、怪物の箱にフタをした。そして、それを台車の上ののせて、部屋の外へと持ち去っていった。

モニタ画面でこの光景を見届けた男達は無言で立ち上がると部屋から去っていった。途中で一人がウイスキーのビンを持った男に近づいていき、小さな声で「本当にこれで大丈夫なのか？」と聴いたが、ウイスキーのビンを持った男は黙って頷いただけだった。

## 17 F B Lビルディング

モオルダアとスケアリーはキモエを連れてF B Lビルディングに戻ってきた。彼らを迎えたのは、キモエの捜索のために組織されたエキストラの捜査官達とスキヤナー副長官だった。

「おいモオルダア！ 何をやっているんだ！ 私はすぐに戻れと言ったはずだぞ。こうしている間にもキモエさんは…」

と、言いながらスキヤナー副長官はキモエと目を合わせた。

「キモエさんは自宅にいたので、保護しましたよ」

モオルダアが言うどエキストラの捜査官達はあきれ顔で解散していった。

「自宅にいたって、それはどういうことなんだ？」

なんとなく納得のいかないスキヤナー副長官はモオルダアに聞き返したのだが、自宅にいたのは事実なのだから、それ以上の説明は出来ない。

「それよりも、キモエさんを安全な場所に連れて行かないと」

「ここでも十分安全だと思うが」

スキヤナー副長官はキモエがこのビルから連れ去られたことを知っているのだろうか？ モオルダアは辺りを見回してからスキヤナー副長官に向かって小声で話し始めた。

「どうやらエフ・ビー・エルの内部に我々の捜査を妨害している者がいるみたいなんですよ。キモエさんを連れ去ったのはクライチ君なんですよ」

「クライチ君って、誰だっけ？」

モオルダアは説明するのが面倒になってきた。

「とにかく、ここは危険なんです。護衛を付けてどこかに隠れていてもらわないと。出来れば女性の捜査官が良いけど、誰か信頼できる人はいませんかねえ」

「さあ、ここにいるのはエキストラばかりだからなあ。急に言われても手配できないよ。私じゃダメなのか？」

「それはちよつと無理だと思いますよ」

男性恐怖症のキモエには、必要以上に男性ホルモンを感じさせるスキヤナー副長官は向かないだろう。彼らの後ろでのやりとりをなんとなく聞いていたキモエが話にわって入ってきた。

「あの、護衛の方は誰でも良いです。あたしの変なわがままで迷惑をかけているみたいですし。今はそんなことを気にしている場合じゃないですから」

「それじゃあ、そういうことで私がキモエさんの警護を担当することにするかな」

モオルダアは心配そうに去っていく二人を見ていた。それよりもスケアリーはどこへいったのだろうか？ ここへ来てから姿が見えなくなっているが。

朝から捜査にかり出されて、オマケにさんざん恐ろしい目にもあってきたスケアリーは、FBLビルディングに戻って来るなり、ペケファイルの部屋へ向かい椅子に座ると目の前の机に顔を伏せて眠り始めた。眠るとすぐにあの怪物に襲われる恐ろしい夢が始まって、スケアリーはうなされている。

モオルダアは事件が思わぬ方向へ転回したことに盛り上がっているの、眠っているわけにはいかなかった。FBLビルディングの中を駆け回り必要な資料をかき集めていた。とはいっても、この広いFBLビルディングのどこに必要な資料があるのか、見当もつかない。誰かに聞こうにも、ここにいるエキストラ捜査官達はもうすでに帰ってしまったし、スキヤナー副長官はキモエを「安全な場所」に連れて行ってしまったので、残っているのは時給を稼ぐためにいつまでもFBLビルディングにいるバイトの技術者だけだ。

モオルダアは技術者が必要な資料のありかを知っているはずはないと思ったのだが、聞かないよりはマシなので、技術者の部屋へ行ってみた。部屋に入ると技術者はパソコンの画面上をスクロールしていく意味の解らない文字をボンヤリと眺めていた。

「戦時中のことに関する資料を探してるんだけど、キミ知らない？」

技術者はモオルダアがどうして自分にそんなことを聞くのか、と思っていたのだが運のいいことに技術者はその資料のありかを知っていた。技術者はパソコンをいじってそれまで表示されていたウィンドウを閉じて新しいウィンドウを開いた。そこに技術者が何かをキーボードで打ち込むと資料室の場所が表示された。

「4階にある第18資料室ですね」

モオルダアはこのパソコンの作業に驚いている。

「今はそんなこともパソコンで調べられるの？」

「いや、そうじゃなくて、これはボクが作ったデータベースなんです。最近ずっと暇だったから、夜に誰もいなくなるとビル内を探検してたんです。それで見つけたものを全部記録していったんです。でも運がいいですよ。まだ探検は五階までしかしてませんからね」

「へえ…」

モオルダアは納得したのかどうか良く解らないような返事をしたが、とにかく資料のありかが解ったので技術者に礼を言って部屋を出た。技術者はまた先ほど閉じたウィンドウを開いて良く解らない作業を再開した。

モオルダアは資料を抱えて興奮気味にペケファイルの部屋へと向かっていた。そして部屋の扉を勢いよく開けると、ちよんど悪夢が最高潮に盛り上がりつつあったスケアリーは悲鳴をあげて目を覚ました。モオルダアがスケアリーを驚かせたのだが、逆に彼はいきなり悲鳴を聞いて驚いていた。

「ちよんと、ノックぐらいたらどうなんですか？」

まだ息が整っていないスケアリーがモオルダアを睨みつけながら言った。そんなことを言われても、スケアリーはいつもノックもせずこの部屋に入ってくるのだが。

「いやあ、キミがいるとは思わなかったから。それよりも、すごい物を見つけちゃったよ！」

モオルダアは資料を机の上に置くと、近くにあったキモエの屋敷の青写真真も取り出した。

「そういえば、キミはキモエさんと色々話してみたんだけど、キモエさんのお母さんについては何か知ってる？」

「さあ、知りませんわ。キモエさんはお母様とあまり仲が良くなかったみたいですから。お母様のやっっていることが一番気に入らなかつたことですね。アカバネ48というグループに入って歌ったり踊ったりしてたって話ですわよ」

「なんだそれ？」

「AKBと言う人もいるらしいですね。東京の赤羽駅周辺で活動するグループみたいなんですけれど、48才以上の女性じゃないとグループに入れないということですよ」

「それはなかなか面白い作り話だね」

「作り話じゃございませんわ！ キモエさんは嘘なんかいう人じゃありません」

「そうじゃなくてね。嘘をついているのはお母さんの方だよ。キモエさんはそれを信じ込まされたんだな。それもなかなか面白い嘘だね」

こんなふうに戻りくどい感じでモオルダアが喋っている時には必ず変な話が出てきてスケアリーを困らせるのは彼女にもだいたい解ってきていた。

「何か言いたいことがあるのなら最初に言うてくださらないかしら？」

「AKBというのはおぼちゃん達のグループ名ではなくて、戦時中から続いているある計画の名前なんだよ」

モオルダアは古びたファイルを取り出してスケアリーに渡した。ホコリを被ったファイルをスケアリーは指先でつまむようにして受け取った。

「なんですか、これ？」

スケアリーは指先でつまむようにしてページをめくっている。

「戦後にエフ・ビー・エルの誰かが調べていた極秘のA K B計画に関するファイルだよ。出増田という名前で探していたらそのファイルに辿り着いたんだ」

「戦後って第二次大戦の後ということですか？」

「そうだよ」

と言ったものの、モオルダアも少し疑問に思うところがあった。一体エフ・ビー・エルっていつから存在しているのだろうか？ しかし、それを気にしていても仕方がない。

「キモエさんの祖父は軍のために化学兵器を開発していたんだ。その研究の場所がああな屋敷だったんだよ。あそこは妙に階段が多かったりして少し変な建物だとは思っていたんだけど、そういう理由があったんだねえ」

「あの階段は使用人が使ったり、家の人が使うためのものだから、特におかしなところはありませんわ。それに、そのA K B計画というのがあったとして、今回の事件と何か関係があるんですか？」

「おかしなのは終戦とともに終了したはずのA K B計画が1947年に再開されているところなんだよ。彼らは気象観測気球だと言ってるけどね」

「何ですか、その喋り方は。ムカつきますわ！ それに、ロズウェル事件と関係していると言いたいのでしょけれど、何でもそういうところに結びつけるのはやめていただけたら。あんなのは嘘に決まっていますわ」

「でも、あの怪物の姿をみたら、そういうところと結びつけてもおかしくないと思うけどね。とにかくボクの考えでは、現在でもA K B計画は続いているんだよ。そして、その計画を進めている人物の中にはキモエさんのお母さんがいるはずなんだ」

「どうして、そんなことを言うのか解りませんが、確かにキモエさんのお父様は婿養子で、出増田家の血を引いているのはお母様の方だとキモエさんも言ってましたわ」

スケアリーはなるべくモオルダアの根拠のない推論を否定しなかったのだが、思わずモオルダアの推論を裏付けてしまうようなことを言ってしまった。これを聞いてモオルダアはさらに盛り上がってきた。

「もし、今でも計画が続いているとしたらそれはどこでおこなわれているのか？ という感じだけど、そこでやっとこの青写真が役に立つんだよね」

モオルダアは青写真を抜けておかしなところがないか調べ始めた。スケアリーも仕方なくそれに付き合ったのだが、最初におかしなところに気付いたのはスケアリーだった。

「ちよいと、これおかしくありませんこと？」

スケアリーが指さしたのはあの怪物の絵が飾られている部屋だった。今日の恐ろしい体験から無意識にその部屋に目がいってしまふ。そしてそういう体験というのは早く忘れるべきなのにいつまでも鮮明に覚えているものなのである。

「この部屋はこんなに広くありませんわ」

モオルダアも何度かあの部屋に入ったので思い出してみると、やはりこの青写真に書かれている部屋は彼の見たものよりも広い気がする。

「これは今すぐ行って調べないと」

「こんな深夜にあのお屋敷に行くっていうんですの？」

あの怪物が捕らえられた後とはいえスケアリーはあの屋敷は恐いから夜中には行きたくないようだ。

「そんなこと言っても、ぐずぐずしていると証拠がなくなってしまうよ。彼らはいつだってボクらよりも先にいろんな事を片付けていってしまうんだから」

彼ら、って何ですか？　と言い返したいところだったがスケアリーはもしかするとあの屋敷で恐ろしい計画が進行しているのではないかと思い、ここは勇気を出して屋敷へ行くことにした。

## 18 関係ないけど

スキヤナー副長官はキモエを車に乗せて「安全な場所」へと向かっていた。マサシタのストーカー事件から男性恐怖症になっていったキモエだったが、なんとかそれを克服しようとしてスキヤナー副長官が彼女の警護をすることに同意したのだ。しかし、やはり落ち着かずになんかそわそわしているキモエを見てスキヤナー副長官は「もしかして私に気があるのではないか？」と変な想像をしていた。

「お嬢さん、安心してください。あなたのことはきつと私が守って見せる」

この余計な一言がさらにキモエを不安にさせた。



## 19 真っ暗なキモエの屋敷

塀の上からモオルダアがキモエの屋敷の裏庭に落ちてきた。今回はどうしても塀を乗り越えるのが上手くいかない。手には怪しげな機械も持っている。塀の外からスケアリーの声が聞こえてきた。

「中の様子はどうなんですの？」

「庭には誰もいないみたいだ。きっと中にも誰もいないだろうねえ」

モオルダアは塀の方を見ながらスケアリーが塀を乗り越えてくるのを待っていたが、彼女は門から入ってきてモオルダアの後ろから声をかけた。

「何をぐずぐずしているんですの？」

モオルダアは不思議そうに振り返ったが、よく考えたら門から入ってくるのは普通のことなので、特に気にせず二人して表の方へと回っていった。

スケアリーは念のため銃を取り出していたが、モオルダアはモデルガンではなくて怪しい機械をいじりながら歩いていた。

「それは一体何なんですの？」

「朝にここで撮った写真が上手く写らなかったでしょ。あれはきっと強力な磁力が原因じゃないかと思ってね。きっとAKB計画で強力な磁力を発生させる装置とか使われていたに違いないよ。怪しい場所があればこれが磁気を感じて知らせてくれるはずだよ」

「そうかも知れませんが、もう怪しい場所はその絵のある部屋だと解っているんだから、そんなものは必要ないんじゃないんですの？」

それはそうなのだが、もしも強力な磁力が検出されたらそれでカメラが写らなかったことの説明になるので、それでいいのだ。

屋敷の玄関に近づくにつれて、モオルダアの持っている磁力計の示す数値が少し増えてきた。使い方も良く解らずに使っているモオルダアにはそれが何を意味しているのかは解らなかったが、他の場所よりも電磁波とかそんなものが多いのではないかと思っていた。ただし、こんな僅かな数値の増え方では、デジタルカメラに影響を与えるほどではないだろう、とも思っていた。

玄関に鍵は掛かっていなかったようで、スケアリーが静かにドアを開けるとギーーツと音を立てて開いた。また幽霊

屋敷みたいですね、とスケアリーは思っ嫌な気分になっていた。

スケアリーが懐中電灯である陰鬱な絵の並んでいる廊下の方を照らした。彼女は懐中電灯の明かりでは少しも明るくならない廊下を見ながら、どうして自分がこんなに怯えているのか不思議にさえなっていた。あの怪物はおそらくもう出てこないし、ましてや幽霊なんているわけはないのに。それでも、スケアリーは恐ろしい感じがしたのでモオルダアを先に歩かせた。今はモオルダアもこの屋敷の雰囲気を感じていないようだったが、彼にはそれよりも手にしている磁力計が気になっているので、スケアリーに言われるまま先に廊下を歩いていった。

磁力計を見ながら歩くモオルダアはなかなか前に進まない。ゆっくりと歩きながら、スケアリーは姿の見えない何かの後ろからやって来て彼女の肩に手をかけたりするんじゃないのか、とそんな想像をして恐ろしくなるとモオルダアの前に出て歩いた。しかし、前を歩くと懐中電灯の光の当たらない影から何か飛び出して来るのではないかと、また恐くなりモオルダアの後ろに下がった。

こんなふうに怯えるスケアリーのことは少しも気にせずゆっくりと歩くモオルダアが、問題の部屋の前で立ち止まった。

「やっぱり、ここに近づくとつれて数値が上がっているなあ」

「どうでもいいですけど、早く部屋に入りませんか?」

「うん、まあそうだねえ」

モオルダアが部屋の扉を開けた。開けると中から何か飛び出してくるのではと、スケアリーはまた恐ろしい想像をしていたが、何も起こらなかった。

二人は部屋に入って懐中電灯の明かりに照らし出されたあの怪物の絵をみてギョツとした。この絵のギョツとするような恐ろしさは何度見ても変わらないようだ。

「あれ、おかしいなあ」

ギョツとした後にすぐに元に戻ったモオルダアが磁力計を見ながらつぶやいていた。モオルダアの予想では、この部屋に来たら磁力計の数値が一気に上がるはずだった。この部屋のすぐ外は彼のデジカメラが正常に動作しなくなった事件現場だったし、単純に考えればそうなるはずだった。

「そんな使い方の解らない機械なんか使っいても埒があきませんわ!」

「うん、まあそうだねえ」

モオルダアはそう言うのと磁力計をしまつて辺りを見回した。

「何かあるとしたら、あそこしかないよね」

モオルダアは怪物の絵の方を指さした。スケアリーもそう思っていた。青写真でこの部屋は絵のある壁から反対側の壁の窓までがもつと広くなっていたのだ。ただし、絵の裏に秘密の扉があるとは思えなかった。しかし、モオルダアはすっかりそう信じ込んでいたようだ。

モオルダアは腕まくりをしていかにも力仕事をする時の姿になると、自分の背よりも高い大きな額縁の両端に手をかけた。

「モオルダア。まさかその裏に隠し扉があるなんて考えてないでしょうね？」

スケアリーがそう言った時にモオルダアはすでに半分ぐらい額縁を動かしていた。重たいのは額縁だけで絵のキャンバス自体はそれほど重さではないので、モオルダア一人の力でも簡単に動かせたようだ。

「あれ、おかしいなあ」

絵を壁からどけて別の壁に立て掛けたあと、モオルダアは少しガツカリしていた。絵の裏側には隠し扉などなく、他と同じ木製の板を並べた壁になっていた。

「そんな単純な話ではありませんわよ。その壁の裏に何かがあるとしても、ここは秘密基地じゃございませんのよ」  
スケアリーは他の場所を調べようと辺りを懐中電灯で調べている。

モオルダアは無然として腕を組むとたつた今額縁をどけた壁に背をもたせかけた。腕組みをして壁に背をもたせかけて考え込むのは彼の思っている優秀な捜査官の仕草でもあったのだ。しかし、彼が背をもたせかけたその瞬間、モオルダアの後ろの壁がくるりと横に回転してモオルダアは変な悲鳴をあげながらそのまま後ろに倒れた。

驚いて振り返ったスケアリーは半分だけ開いた回転式の隠し扉から出ているモオルダアの下半身を目にした。

「やっぱりここは秘密基地だよ」

隠し扉の奥でほとんど見えないが、モオルダアが上体を起こして言っているらしい。スケアリーはゆっくりモオルダアの方へと近づいて行くと隠し扉の中を懐中電灯で照らした。モオルダアが倒れているすぐ横から地下へと階段が続いていた。

「まあ…」

スケアリーはそれだけを言つて真つ暗な地下へと続く階段を眺めていた。

モオルダアは懐中電灯を持って階段を降りて行った。

「ちよいと危険じゃございませんの？」

「大丈夫だよ。幽霊なんか出ないから」

そう言われてスケアリーが恐ろしい形相でモオルダアを睨んでいたのだが、暗闇の中でモオルダアはそれに気付かなかったようだ。「まさか、モオルダアはあたくしが怖がっていることに気付いてあんなことを言うのかしら？」とスケアリーは思っていたが、モオルダアにそれだけの洞察力があるとは思えない。きつと冗談のつもりで言ったのだと思っ  
てスケアリーはモオルダアについていった。彼女がこの屋敷の不気味さに怯えていると言うことはモオルダアに絶対に知られたくなかった。

「ボクが思うに、この下はもぬけのカラだよ」

「どうしてそう思うんですの？」

「彼らがこの秘密基地を放置しておくと思わないけどね。さっきの怪物を捕らえた時みたいに、アツという間に全てを無かったことにしてしまうんだよ」

「そうだと良いですね。でもこの階段の下からあの怪物みたいなのが何匹も出てきたらどういたしますの？」

これはあまりスケアリーらしくない想像である。しかし私はこのスケアリーの考えを聞いて「DONT」というシューティングゲームを思い出してしまった。そんなことはどうでも良いのだが。とにかくスケアリーは恐ろしくて思考が混乱していたのかも知れない。彼女は汗をかいた手に握られた銃を何度も握り直していた。

暗い階段を慎重に降りてきた二人の前に鉄製の扉が現れた。

「これはますます怪しい感じだね」

モオルダアはそう言いながら扉に手をかけたが、一瞬スケアリーの言っていた「あの怪物みたいなのが何匹も…」という話が気になって手を止めた。スケアリーの方を振り返ったモオルダアだったが、暗いためにどんな表情をしているのかは解らなかった。ただ、いつでも銃を使えるように構えている人間の緊張感みたいなものは強烈に伝わって来た。

モオルダアはもう一度扉に手をかけて、そしてもう一度スケアリーの方を振り返った。今度はスケアリーがゆっくりと頷いたようにも思えた。とにかくこの扉を開けなくては何も解らないのだから開けるしかない。

扉には鍵が掛けられていたわけでもなく簡単に開けることができた。ゆっくりと重い鉄の扉が開いて二人は中を覗き

込んだ。それと同時に部屋の中から「ゴーツ」という猛獣の咆哮とともに、何かが硬いものにぶつかるバーンという音がした。

張りつめた緊張感の中にいた二人をパニックに陥らせるにはこれ以上の出来事はない。スケアリーは思わず銃の引き金を引いていた。乾いた音とともに放たれた弾丸は硬い金属の壁にぶつかって跳ね返った。それとほぼ同時にモオルダアの小さな悲鳴が聞こえた。

いまだにパニック状態のスケアリーは部屋中に懐中電灯の光を向けて彼らに襲いかかってきた相手を探した。すると、光の中に肩のところを押さえようとしているモオルダアの姿が現れた。

「モオルダア！ 大丈夫ですか？」

「い…痛い…」

スケアリーの撃った銃の弾は壁に跳ね返ってモオルダアを襲ったようである。流れ弾というやつだろう。しかし、ここでモオルダアはもの凄く後悔していた。肩を撃たれて、反対の手で傷口を押さええている時に言うべきことは何なのか。モオルダアはいつでもそんなことばかり妄想の中でシミュレーションしてきたのだ。ここは「なに、かすり傷さ。大したことではないよ」と言わなければいけなかったのだ。例えば相手がスケアリーであっても。しかし、実際にはもの凄く痛かったので、情けない感じで「痛い」としか言えなかったようだ。

スケアリーはもしかすると自分がモオルダアに大怪我を負わせてしまったと思い、慌ててモオルダアに近づいて肩の傷に懐中電灯の光をあてた。破れた上着の下にモオルダアの腕が見えた。出血はしていたが、ただのかすり傷だった。怪我の程度としては転んで擦り剥いた程度であろう。

大げさなモオルダアにあきれていたスケアリーだったが、背後に気配を感じて慌てて後ろに懐中電灯を向けた。そこには黒猫が一匹いて二人の方を見ていた。懐中電灯の光に少し驚いていたようだったが、そのままゆっくりと開けっばなしの扉の外へと歩いていった。どうやら先ほど二人を驚かせたのはこのネコだったようだ。

「なんでネコがここにいるんですの？」

「さあね、ネコはどこにでも入り込むからね」

自分の怪我がそれほどひどくないことに気付いたモオルダアは起きあがって部屋の電気を点けるスイッチを探していた。大抵の場合、電気のスイッチは部屋の扉の隣にあるのだが、この秘密基地でもそれは同じだった。灯りを点けるとそこに現れた予想外の光景に二人は少し驚いていたようだった。

「あれ、おかしいなあ」

モオルダアの3度目の「おかしいなあ」は良い意味でモオルダアの予想を裏切った「おかしいなあ」だった。もぬけのカラだと思われていたこの秘密基地は、おそらくここが使われていた時と同じ状態だったのだ。

秘密基地というよりは秘密の研究所という感じだろうか。ここにある器具類は古すぎて現在ではほぼその役割を完全に果たすことは難しいと思われるものばかりだった。しかし、部屋のあちこちに積み重ねられている資料などはつい最近作られた物のようだった。

「これは一体……」

最後まで言わないとどっちが言ったのが解らないが、これはスケアリーの言葉である。モオルダアはすでに部屋に散らばる資料に興味を示して、夢中になって次から次へと目をとおしていた。

「この部屋は一体何なんですか？」

スケアリーが哑然として眺めている部屋は彼女が想像していたよりも広かった。5メートル四方ぐらいのこの部屋の壁は全て金属で出来ている。以前は何かの研究に使われていたのだと思われるが、現在はモオルダアが夢中になって読んでいる資料を置く場所にされているようだ。

「ボクが思ったとおりA K B計画は続いていたんだよ」

モオルダアが興奮気味に言った。

「でも、ここは研究施設としては使われていなかったみたいですから」

「それはそうだけど、でも研究資料は最近のものだよ」

モオルダアの目が妙な物を発見して輝いている時にはちよつとやそつこのことでは引き下がらないのはスケアリーにも解っていた。ここは彼の話を聞くしかないのだろうか。

「キモエさんの両親は交通事故で亡くなったんじゃないみたいだよ」

モオルダアが興奮気味に話し始めた。

「この写真の撮影はあの事故の報告書に書いてあったのよりも後の日付になっているからね。あの事故はA K B計画のためにでっち上げられたものに違いないね」

モオルダアは持っていた資料をスケアリーに渡した。見るとそこには白衣を着たキモエの母と手術着のようなものを着

せられたキモエの父と数名の研究員らしき人物が写っていた。

「キモエさんのお父さんは出増田<sup>デマシタ</sup>清<sup>キヨシ</sup>っていつのか。なんだかあれな感じだね。しかし、どうしてこんなことになったんだろう？」

そう言いながらモオルダアは次の資料をスケアリーに渡した。それを見たスケアリーは多少の困惑を秘めた表情をモオルダアに向けた。

「どうしてこんなことが起きるんです？」

スケアリーの見た資料によるとキモエの父キヨシはA K B計画のための人体実験のモルモットにされていたことが解る。

「こんな姿にされてしまって、これはまるであの怪物のようじゃありませんこと」  
スケアリーの目は写真に釘付けになっている。

「そうだね。あの怪物はもしかするとキモエさんの父親かも知れないよ。でも、あれが父親だからキモエさんを守ろうとしたと考えるのは間違っているような気がするけどね。こっちの資料によるとキモエさんの父親はそんな姿になる前に実験に失敗して亡くなっているみたいだよ」

モオルダア渡された次の資料を見てスケアリーはちよつとムカツとしていた。

「どうでも良いですけど、資料は古い順に渡してくださいださらないかしら？」

「まあ、そうだけど。ボクだって上から順に見ているだけだから、時間は前後することだってあるでしょ。でも、その資料から解るのは、あの怪物は新たな生命を与えられた屍ということだね。こんなことをキミは否定するだろうし、ボクもちよつと信じられないけどね」

めずらしくこういう現象に関して半信半疑なモオルダアであったが、スケアリーの感心はそれ以外にあったようだ。

「あたくしが腑に落ちないのはあの絵のことですわ。あれはキモエさんのお父様が描いたということですけど、どうして自分の描いた絵にそっくりな姿に変えられてしまったんですの？」

確かにおかしい事である。キモエの父キヨシは芸術的感性によって自分の運命を予見していたとでもいうのだろうか？モオルダアはこの疑問に納得のいく説明は出来そうにないと思っていたが、これまでの出来事をつなぎ合わせたら一つの結論に達するのではないかとも思っていた。

その時二人は同時に部屋の扉の方に気配を感じて振り返った。そこには先ほど二人を驚かせたネコがいた。ネコは二

人に見つかりと慌てて階段を昇って逃げていった。

「ちよいとモオルダア…」

このネコの様子に何かを感じたのかスケアリーはモオルダアの方を見ていた。モオルダアもきつと似たようなことを思っていたに違いない。二人は部屋を出て階段を昇っていった。先ほどのネコの姿はもうなかったが、庭の方から自動車のエンジン音が聞こえてきた。二人は大急ぎで隠し扉を閉めると、怪物の絵を元のように壁の前に戻した。

モオルダアは誰がやって来たのかを確かめるために前庭を見渡せる部屋まで行って、窓から少しだけ顔を出して、外の様子をうかがった。庭に入ってきた車は一台だけで、乗っていたのも一人だけだったようだ。

車の中から出てきたのはクライチ君だった。クライチ君は車を降りて玄関の方へと向かって来た。それを見てモオルダアは一度スケアリーの方へ振り返ったが、彼女も自分と同じようなことを考えていることが解った。二人は玄関の内側でクライチ君が扉を開けるのを待っていた。

静かに玄関の扉が開いてクライチ君が中に入ってくると、モオルダアのモデルガンとスケアリーの本物の銃がクライチ君に向けられた。

「おい、クライチ！　ここで何をしてるんだ」

モオルダアがそう言うと同時に懐中電灯の光がクライチ君の顔にあてられた。クライチ君は眩しそうにしながら両手を静かにあげた。

「特にどうってこともないんですけど。ちよつとした好奇心でやつですよ」  
クライチ君はいつもの口調で説明している。

「しらばっくれたって無駄ですわ！　あなたはここに何をしに来たんですの？　あなた達がさっきその庭でしていたことをあたくし達はしっかりと見ていたんですからね」

そう言われてもクライチ君は少しも表情を変えずにニヤニヤしていた。しかし、次の瞬間にそれは一変した。クライチ君は恐怖におののきながら自分に銃を向けている二人の後ろにある螺旋階段の上の方を凝視していた。

「で、で、でたあ…！　怪物だ…！」

まさか、とは思ったが二人は思わず振り返ってクライチ君が見ていた方を確認してしまった。するとクライチ君は素早く玄関の方へ向き直り、外に出ると扉を閉めて車の方へと全力疾走した。

「しまった！」



クライチ君の迫真の演技にまんまと騙されたモオルダアは扉を開けてクライチ君の方へ向けてとモデルガンを構えたがクライチ君はすでに車に乗り込むところだった。

「おい、待て！ クライチ」

そう言いながらモオルダアはモデルガンを車のタイヤに向けて発射した。何発かは見事タイヤに命中したのかも知れないが、B B弾でタイヤをパンクさせられるワケはない。車は悠然と門を出て走り去って行ってしまった。

遠ざかっていく車の音を聞きながらモオルダアは震えるコブシで何かを思いっきり殴りつけたいと思いついた。見回したが、殴っても痛くないような物が見つからないので、その怒りは胸に納めることにした。

「もしかすると、あの方達はあの秘密の研究室の存在をまだ知らないのかも知れませんか」

モオルダアよりは冷静だったスケアリーが銃をしまいながら言った。彼女の言うことも理解できる。知られたくないことはアツという間に「無かったこと」に出来てしまう組織がああ秘密の研究室を放って置くはずがない。彼らはその部屋を探すために何度もここへやって来るのだろう。

「とにかく、あの研究室の資料は全て持ち出さないといけないみたいだね」

二人は再び研究室へと戻ると出来る限りの研究資料を持ち出してスケアリーの車に積み込んだ。

## 20 早朝

秘密の研究室にあった資料を車に積み込み終わった頃には、すでに夜が明けていた。思っていたほど多くの資料がなかったのが、良かったのか悪かったのか二人にはなんとも言えない気持ちだった。とにかく、数回の居眠りを除けば24時間起きたままの二人にとっては、資料が少なかったことは良かったのかも知れない。

「それじゃあ、あたくしは帰りますから、あなたは歩いて帰ってくださいるかしら」

「こんな大事な資料を車に乗せたまま帰るの？ これはエフ・ビー・エルで厳重に保管しないとダメだよ」

スケアリーは何か言いたそうだったが、黙ってモオルダアの言うとおりにした。ただし機嫌はもの凄く悪そうだった。

F B Lビルディングの地下駐車場に到着するなりスケアリーは車を降りてモオルダアに言った。

「あたくし、ちょっとやることがありますから、先に部屋に戻っていますわね」

やること、というのは多分寝ることだろう。彼女のほとんど閉じている目を見れば解る。トランクのところで資料を取り出していたモオルダアのところへスケアリーが車の鍵を放り投げてきた。モオルダアは「えっ?!」と言ってスケアリーの方を見たが、もうすでにスケアリーはビル内へと続く扉を開けているところだった。

扉が閉まる音がしてモオルダアが一人駐車場に残されると辺りは静まりかえった。一人で持ち出すには少し量が多すぎるトランクの中の資料を見てモオルダアはため息をついていた。そして、これは二度に分けて運ぶしかないと思ったように、資料の半分だけを両腕で抱えたとアゴやヒジを駆使してトランクを閉めた。それからヒザを曲げて資料を抱えている手に持っている鍵をトランクの鍵穴の高さまで持つてくると、トランクに鍵を掛けた。この時、何度か鍵を入れるのに失敗して鍵穴の周辺に傷を付けてしまったのだが「これはどこかへ行ってしまったスケアリーのせいだ!」と聞き直って、恐れることはやめにした。

鍵を掛ける音が地下駐車場に響いて、その後にはまた静寂が訪れた。キモエの屋敷でも、この地下駐車場でも静かすぎる場所に一人でいるというのは、なんとなく気味の悪いものだと、モオルダアは思っていた。

モオルダアが扉の方へ向かって歩き出した時、彼は後ろから呼び止められた。ここにいるのは自分だけだと思っていたモオルダアは抱えていた資料をばらまきそうになってしまうぐらい驚いたのだが、疲労のためかそんな体力も残っていないかったようだ。

モオルダアが振り返ると、そこにはマスクをしてフードを被った女性が立っていた。見た目からはそれが女性であるとは断言出来なかったのだが、その声はしわがれてはいたが女性の声に違いなかったのだ。この容姿を見てモオルダアにはこれがローンガマンのアジトに現れた謎の人物に違いないと解った。

「あなたはキモエさんのお母様ですね?」

モオルダアはいきなり呼び止められて驚いたのを隠すために、妙に落ち着いた口調で言った。言われた相手は少し驚いていたようだったが、静かに頷いた。

「そうです。私はキモエの母です。私は全ての過ちを償うためにここへやって来たのです」

そう言ってキモエの母親はマスクとフードをはずした。その下からは炎で皮膚を焼かれたように赤く爛れた顔が現れた。落ち着いていたフリをしていたモオルダアだったが、予想外に恐ろしいものを見せられて、思わず変な悲鳴をあげた。「これが私してきた恐ろしい研究の結果なのです。私はその研究に夫を巻き込み、そして娘までも巻き込もうとしてい

ました。でも信じてください。私は真実を知るまでは、全て人類のためだと思ってやってきたのです」

キモエの母親が落ち着いて喋っているので、モオルダアも再び落ち着きを取り戻していた。

「人類のためなら、自分の夫を実験台にするのですか？」

赤く爛れた顔ではほとんど表情とよべるものは感じられなかったのだが、モオルダアの言葉を聞いてキモエの母親の瞳には明らかな動揺が感じられた。

「それは違います。悪いのは彼らなんです。いいえ、もしかすると彼らの言いなりになっていた私の責任かも知れませんが。夫は私達の研究のことは何も知らないはずだったので。でもあんな絵を描くからいけないのです。あの恐ろしい絵は私達の研究を知っていたから書いたのか、それとも偶然の一致なのかは解りません。でも、あの絵を描いたことで彼らは夫が研究のことを勘付いたと思ったようです」

「それで、キヨシさんは消されることになったんですね。でもただ殺してしまうのはもったいないから実験台にしたということですね」

ほとんど表情の作れない赤黒い顔の中に輝いているキモエの母親の瞳から涙がこぼれてきた。

「ええ、私は夫を殺しました。しかも二度も。でもそんなことを今話しても意味がありません。それよりも私がここへ来たのは彼らのことをあなたに知らせる義務があると思ったからなんです。彼らのしていることは間違っています。彼らを止められるのはあなたしかいません」

話の展開に盛り上がってモオルダアは鼻息を荒げている。

「というど？」

「地底大戦争が始まるのです。私の研究は地底に潜んでいる敵と戦うために…」

ここでプスツという音と伴にキモエの母親の言葉がとぎれた。

「それで、どうなるんですか？」

モオルダアが聞いてもキモエの母親はなんとも言わない。そしてがくりとヒザをついたかと思うとそのまま倒れてしまった。倒れたキモエの母親の後ろには消音器のついた銃を持つ謎の男が立っていた。謎の男とは、つまりモオルダアからスケアリーのノートパソコンを奪っていった男のことである。

「ああ、なんてことを！」

驚いているモオルダアを謎の男は無表情に睨んでいた。

「モオルダア君。キミが知る必要のないことは知らなくてもいいのだよ」

「あなたは一体誰なんですか？」

「それも知る必要のないことだよ。私は私の信念に従って動くだけだ。だから私はキミが知る必要のあることは教えるし、知る必要のないことは教えないのだよ」

「何を言っているのか良く解りませんが」

「とにかく、早くここを立ち去るんだな。キミに殺人の罪がきせられてもかまわないのならそれでいいのだが」

「彼らの力を使えばそれぐらいは簡単だよ。しかし心配することはない、ここは私が全て片付ける。そんな資料はもう意味がないから早く部屋に戻るがいい」

「だって、これは誰にも渡せない重要な資料だから」

「例えその資料が本物であっても彼らはもうすでに手を打っている。もうその資料には意味はないのだよ。キミが戦う相手はキミが思っているよりもずっと巨大なんだ。だが、彼らがキミ達のことを恐れているというのも事実だがね。さあ、解つたらもう行くんだ。場合によってはキミのことも撃たなければいけない」

モオルダアには何がなんだか解らなかったが、殺人の濡れ衣を着せられたり、撃たれたり嫌なので、立ち去ることにした。念のため資料は持ったまま。しかし、謎の男が資料を要求しないところを考えると、ホントにその資料には意味がなくなったのかも知れない。

モオルダアが扉のところまで行くと、後ろから謎の男がモオルダアを呼び止めた。

「人類の運命はキミが握っているのかもしれないぞ」

謎の男は無表情のまま変な事を言っていた。なんだか意味が解らなかったが、駐車場の入り口の方から車がタイヤをきまして猛スピードでこちらへ向かってくるのがわかったのでモオルダアは慌ててビルの中へと逃げ込んだ。

## 21 朝？

目を覚ましたモオルダアは「あれ？」と思って部屋の中を見回した。寝ている時にはなんとなく自分の部屋にいるような感じだったのだが、彼はベケファイルの部屋の椅子に座ったまま寝ていたようである。時計の針は十時半を指して

いた。地下にあるこの部屋ではそれが朝なのか夜なのか解らなかったが、モオルダアは自分が起きた時の感覚からしてまだ朝だと解った。

まるで注いだまま一晩放置されたコーラののような気分だ、とモオルダアは思っていた。どんな気分かは良く解らないのだが、昨日のことが全て夢だったんじゃないかと思えるような、そんな不思議な気分だったようだ。しかし、昨日のことが夢でないことは解る。彼の目の前のパソコンの画面にはタイトルだけ書いてある書きかけの報告書がある。「溶解人間事件に関する報告書」と書いてそのまま寝てしまったのだろう。モオルダアはこれを見て鼻から軽く息をもらすようにして笑うと、そのタイトルを消して「液体人間事件に関する報告書」と書き直した。モオルダアはこれで満足したようだが、どちらにしても変わりはない。

タイトルだけ書き直したモオルダアだったが、その先を書く気分ではなかった。その前に気になることを色々考え直してみたかったのだ。それに、この部屋に戻ってきた時にはイビキをかいて寝ていたスケアリーがいなくなっているのも多少気にはなっていた。

地下の駐車場へ来るとスケアリーの車はそこにはなかった。それから、キモエの母親が射殺された跡も見事に消えていた。モオルダアは何もない駐車場の床を見つめながら、キモエにはどこまで説明したらいいのかを考えていた。或いはなにも知らせない方がいいのだろうか。しかし、キモエは少なくとも父親に関することは知りたがるだろう。それを知ったら、当然母親のことも気になるはずである。やはり何も知らせるべきではないのだ。知ればキモエの身も危険になるかも知れないのだし。

結論が出そうにないことを考えていると遠くから車の近づいてくる音が聞こえてきた。それはモオルダアの近くまで来て止まった。スケアリーの車だった。

「あら、モオルダア。こんなところであたくしをお出迎えですか？」

車から降りてきたスケアリーは冗談っぽく言っていたが、その顔には疲れがハッキリと見て取れた。

「そんなワケじゃないけど。キミは一体どこへ行ってたんだ？」

スケアリーがこの質問に答える前に、助手席のドアが開いてキモエが降りてきた。

「あの、すいません。私どうしてもあのスキヤナーって方が恐ろしくて逃げてきてしまいました。特に何をされたとか、そういうことじゃないんですけど、やっぱり私は……」

スキヤナー副長官と一緒に夜を過ごすという荒療治はやはりキモエには耐えられなかったようだ。モオルダアは黙って頷いた。

「それよりも、モオルダア。あなたはどう思いますの？ キモエさんはあのお屋敷に帰りたがっているんですけど」  
こう聞いたスケアリーだったが、本当は彼女だってあの家が危険だと言うことは知っているはずである。ただ、スケアリーもキモエにどこまで話していいのか解らずにうやむやな説明しか出来なかったのだろう。それで、最後はモオルダアにまかせたということなのだろうか。モオルダアはどうして、そんなことを自分に聞くのか？ と思ってスケアリーを見ると、彼女は申し訳なきような表情をしていた。

「キモエさん。残念ながらあの家は危険だからもう帰れないよ」

モオルダアが思い切ったこう言うのを聞いてキモエは明らかにうろたえていた。

「でも、もう事件は解決したんじゃないんですか？ あの怪物は処分されて、それからマサシタはもうすでに死んでいくんですよ？ ドロドロに溶かされて。スケアリーさんが言うてましたよ」

スケアリーがそんなことをキモエに話していたとは知らなかった。しかし、キモエがそのことを口に出したので、モオルダアが明らかに矛盾した説明をしてしまうような事態は避けられそうだった。

「それは、そうなんだけど。あの家の敷地内には昔、軍の研究施設があったんだよ。ほら、あのキモエさんの秘密の隠れ家とかそういう場所も関係があるのかも知れないけどね。そこで研究されていた化学兵器に少し問題があつてね。それが今でもあの辺りに残されていて、危険なんだよ。キモエさんの屋敷の庭にあった血溜まりのようなものとか、あの怪物とか。おそらく全てが化学兵器に関連していると思うんだ。それから…」

ここまでなんとなく出任せの説明をしてきたモオルダアだったが、ここで言葉が詰まってしまった。真面目にモオルダアの言うことを聞いているキモエを見て、半分嘘の説明をしていることがいたたまれなくなっていたのだ。そして、この先を話すことで、モオルダアは間違いなくキモエを騙すことになるのだ。

モオルダアが先を続けられなくなるとスケアリーが話し始めた。

「あなたの両親の死因はその化学兵器によるものだったんですよ。きっとお屋敷のどこかにあった化学兵器の残骸みたいなものをあなたの両親が見つけてしまったのかも知れませんか。その影響であなたの両親は亡くなったと思うんですけど、そう言うことがおおやけになると、色々と都合の悪い人たちがいることは知っているでしょ？ それでその人達は嘘の交通事故をでっち上げたんですよ」

キモエは暗い顔をして自分の足下を見つめていた。同じ理由からではないのだがモオルダアとスケアリーも悲しそうな顔をしている。特にモオルダアには今の状況がづらいものだった。今キモエが立っている妙に綺麗な床は数時間前に彼女の母親が撃たれた場所なのだ。感じの悪い沈黙の中でモオルダアは何かを言わなければいけないと思いい口を開きかけたが、その時モオルダアの携帯電話が鳴り出した。電話に出るとそれはスキヤナー副長官からだった。

「おい、モオルダア！ 何をやっているんだ！」

「何って言われても。なんかテンション低くなってるんですよ」

「なんだそれは？ それはどうでもいいんだがね。キモエさんがいないんだよ。キミは何か知らないかね？」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。今ボクらと一緒にですから。あなたが変な事をしてないということもちゃんと解ってますから、安心していいですよ」

「安心するものにも、私が女性に変な事をするワケないじゃないか。あまり知られていないが、私は紳士ということとおっているからね。特に問題がないのならそれでいいかな。まあ、せいぜい頑張りたまえ」

何を頑張るのか良く解らないが、スキヤナー副長官は電話を切った。さらに妙な気分させられたモオルダアが携帯電話をしまようと、キモエが顔を上げて言った。

「それじゃあ、仕方ないですね。あの家は大好きだったんですけど。でも私はあの家と昔の思い出に縛られていただけかも知れません。今の私には新しい空気が必要です。きつとそうに違いありません。あの家に戻れないのならそれで結構です」

ペケファイルの二人を見ながら話すキモエの瞳には何か吹っ切れた感じの力強さを感じられた。彼女に対して嘘の説明をしたことで多少の罪悪感はあったのだが、二人も安心したようだった。

「そうですね。それも良いかも知れませんがね。新しいお住まいが見つかるまでは、あたくし達が責任を持ちますから心配なさらないでいいですよ。それに、あなたの大切な思い出の品だって持ち出すことは出来るんですから」  
スケアリーは不自然な笑いを浮かべながらモオルダアの方へ助けを求めるべく視線を投げかけたが、モオルダアからはもう出任せは出てこなかった。しかし、それはどうでもいいことだったのかも知れない。あの家を去ることは「終わり」ではなく「始まり」なのだ。キモエは理解していたようだった。

モオルダアは本当にこれでいいのかと思つてキモエの方へ視線を移した。するとその時、キモエの後ろに見える駐車場の出入り口の通路をネコが走って出ていった。

「あら、またネコですわね」

スケアリーもネコに気付いていたようだ。

「しかも、黒猫」

モオルダアが小さくつぶやいて、スケアリーと目を合わせた。「きつとこれでいいのだ（ですわ）」と二人は思った。ネコが走り去っていくのを見て、なぜかこの暗い駐車場が少し明るくなったような気もしていた。

## 22 報告書を書く前に

今回はあまりにも謎が多すぎて、さすがのモオルダアも報告書に「あることないこと」を書くのは困難だと思っていた。ここはせめてカメラが上手く写らなかった原因だけでも納得のいく理由を見つけたかった。

モオルダアはまず技術者のところへ行つてあの磁力計の数値について聞いてみたが、キモエの屋敷で観測されたぐらゐの磁力では電子機器に影響はないということだ。問題なのはあの場所ではなくて、あの場所にあった何かということだろう。

異常な動作をしたカメラはモオルダアのカメラだけでなく警察署の監視カメラもそうだった。あのカメラの前を通つたのは新米の警官だったが、あれは果たして本当にその警官だったのだろうか。カメラの映像を解析した技術者は、あの映像のゆがみも磁力とは関係ないと言っていた。

新米の警官は屋敷の庭には来ていない。ということはモオルダアが写真を撮つた時にあの警官が近くにいたからおかしくなった、ということではない。ここまで考えてモオルダアは自分の適当な推理があたりそうな気がして来て身震いしていた。

警察署に連行されたのはマサシタではないし、監視カメラに映つたのは新米の警官ではない。それはあの怪物だったのだ。最初はマサシタの皮を被つて警察署に入って、出る時には新米警官の皮を被っていた。悪臭も血溜まりのような液体もそれで全て説明がつく。

例のバクテリアでマサシタを溶かして、残った皮を被っていたところを警察に捕まったのだ。そして、変異したバクテリアがマサシタの皮を分解し始めると、その時に近くにいた新米の警官を襲つて、その皮を被つて警察署を出たに違いない。



それでは、どうしてカメラのや監視カメラに影響があったのか。それは、あの怪物にキモエの父親が乗り移っていたからである。実際あの怪物はキモエを守っていたのだし、それは十分に考えられることだ。霊魂というものが存在するのか、或いは人の記憶は脳だけでなく体の組織全体に刻まれているのか。いずれにしても一度死んだ人間の体を使って生まれたあの怪物が意志を持ってキモエを守るといふ事は何か霊的な力が働いているに違いないのだ。

モオルダアの理論はどんどん飛躍していくが、彼としては完璧なものだと信じて疑わなかった。それから、モオルダアは立ち上がるとFBIビルディングの警備員室へ向かった。

「ちよつと、監視カメラの映像を見たいんだけど」

モオルダアが警備員室にいた警備員に言うと言警備員は迷惑そうな顔をしていたが、捜査のためだと言うと渋々モオルダアに映像を見せた。

モオルダアが見たかったのは彼らが駐車場にいた10時40分から11時までの間の駐車場の出入り口の映像だった。

「このどこかで必ず映像が乱れるはずだよ！」

モオルダアは息をのんで映像に見入っていた。しかし何時になっても映像は乱れなかった。そしておかしなことに、必ずそこを通ったはずの黒猫の姿も確認出来なかった。

「もう良いですかねえ？」

あつげにとられているモオルダアに警備員が少しイライラした感じで聞いた。

「ああ、まあ、良いけど…」

モオルダアは色々ワケが解らなくなって、また最初から考え直さないといけないと思つてガツカリしていた。



## #019 「歌と劇：プロフェシー」

### 作者まえがき

時々へんなことを思いついてしまっただけでニヤニヤしてしまうのですが、今回のエピソード「歌と劇：プロフェシー」にはニヤニヤだらけです。

まず最初の思いつきで、今回はいつもの小説風から脚本風になっています。そしてさらなる思いつきで登場人物に歌わせることにしました。その後は思いつくままニヤニヤの連続です。

脚本風ということですが、細かい設定などはなるべく書きませんでした。そこは読む人が演出家となって頭の中に描かないといけないという意味で、この作品は無理矢理インタラクティブでもあります。インタラクティブとはそういうことではない！ という感じもしますが別にいいのです。思いつきですから。

作曲までしなければいけなかったのですが、内容のわりには作るのに時間がかかりましたが、実際に演じてみるともの凄いいことになるのではないかと思われまます。誰か実際に演じてくれませんかねえ？（責任はとりませんがね。）

### ついでに、 作者から注意

Web版ではページにMIDIファイルが埋め込まれていて曲の再生が出来ましたが、縦書きPDF版では曲の再生が出来ません。でもPDF版の公開に合わせて収録曲が配布されるので、ダウンロードして聴いてください。

### 登場人物

モオルダア…言わずと知れたFBLの優秀な特別捜査官

スケアリー…言わずと知れたFBLの優秀な特別捜査官

スキヤナー…言わずと知れたFBLの副長官

ニコラス刑事…言わずと知れないかも知れない有能なそこそこイケメン刑事。

ドコデーモス…南の島国エニホウエアの王（太り気味）

ドチラーノン…ドコデーモスの妻

アティラーノン…ドコデーモスとドチラーノンのお年頃の娘

ばあや…アティラーノンの世話をするばあや

予言者…どう考えても予言者という意味においてエニホウエアに住む予言者

通行人1…どう考えても怪しいという意味においてエキストラではない通行人

通行人2…どう考えても怪しいという意味においてエキストラではないもう一人の通行人  
言わずと知れたFBLのその他の職員達とか警官とかその他の通行人など…エキストラ

## 1 南方の小さな島国

「アティラーノン入場」

アティラーノン 「歌」

プリンセス、エニホウエア！

南の国のお姫様！

南の島の、お姫様！

プリンセス、エニホウエア！

アティラーノン…ああ、なんてステキな朝なのかしら！ 今日南風がこんなに爽やか。これはきっと良いことが起こる前触れに違いないわ！ お父様！ お父様ー！

「沈黙」

アティラーノン…ヘンねえ。お父様はどこへいったのかしら？ きつとまたお酒を飲み過ぎて寝坊しているんだわ！ まったく駄目な王様なこと！ こう言う時はどうしたらいいのか、あたしはちゃんと知っているのよ！ こういう時はお父様が起きて来るまで歌えばいいのよ！

アティラーノン 「歌」

ウソでしょ、マジなの？ お魚ダンス

迷路にはまって、目が回る

ア、恋をするのよ、見知らぬ国で

ア、夢みた人は…

「ドコデーモス入場」

ドコデーモス…おやおや、ずいぶんと上機嫌じゃないか。何か良いことでもあったのかな？

アティラーノン…あら、おはようございます、お父様。今日はとっても良いことが起こる予感がするのよ。きっとあたしの願いが叶うに違いないわ！

ドコデーモス…またその話かね。おまえも仕方がないなあ。何度も言っているようにおまえのお母様があれだけ反対しているんだ。そう簡単にはいかないよ。

アティラーノン…ですから、お父様からお母様によく言って聞かせて欲しいのよ。あの国はとても安全なところなんですから。

ドコデーモス…その日本という国では何があるんだ？

アティラーノン…未来の王様が…ステキな王子さまと出会えるのよ！

ドコデーモス…そうは言ってもねえ…

「ドチラーノン入場」

ドチラーノン 「陰鬱な歌」

煉獄、灼熱、地の果て、ハルマゲドゥン！

アティラーノン…どうなさいましたの、お母様？

ドチラーノン…許しません！あの国にいけば必ずや災いが起こるのです。決してあの国には…あの薄汚い毒ガスにまみれた監獄のような国へ行ってはいけません。

アティラーノン…それはまたずいぶんな言いぐさですわ。何度も言っているように日本はお母様が思っているようなところではないのよ。それなのにお母様はあの予言者の言うことばかり信じて、あたしのことは少しも聞いてくれないんだから。

ドチラーノン…なりません！おまえが何と言おうと、この国のため、そしておまえのためにも、あそこへいくことは許されないのです！

ドコデーモス…まあまあ、そういわずに。あの子があんなに行きたがっているというのに、どうして…  
ドチラーノン…なりません！誰が何と言おうと許しませんからね。

「ドチラーノン退場」

ドコデーモス…ちょっと待ちなさい。あの子のことも少しは考えてあげなければ…

「ドコデーモス退場」

アティラーノン…ハア…。どうしてお母様はいつもあんな感じなのかしら。このままでは「夢みた人」にはいつまでもめぐり合えないわ。

アティラーノン「歌」

思いは募る、人は悲しみ

移ろいでゆく時に埋もれる

もしも、空を飛べたら

広い、世界に一人

あなたの元へ焦がれる

気持ち伝えられるのに…

アティラーノン…もうこうなったら実力行使でいくしかないわ！…ばあや！ ばあや！

「アティラーノン退場」

## 2 FBLビルディング

「スケアリー入場」

スケアリー 「歌」

おめかしなんて、必要ないわ

扉の向こう、誰もいないの

だけどそれでは、あんまりですわ

背後霊にも、エチケット！

スケアリー…まったく、ヒマすぎてイヤになってしまいますわ。いつになったらあたくしの才能を發揮できる難事件が起こるのかしら。最近は遺体の解剖もしていませんし。こんなことでは腕がナマってしまいますわ。ちよいとモオルダア！ モオルダア！…あら、いないのかしら？ まったくあの人もどうしようもない人ですわ。こういう時にはヘンな事件を見つけてくるに違いありませんわ。それで「これがエイリアンの仕業だとは思わないか？」とか言うに違いありませんわ。もうウンザリですよ。

「ノックの音」

スケアリー…どなたかしら？ あたくし今は事件の捜査で忙しいんですよ。

「ばあや入場」

ばあや…忙しいところまことに申し訳ねえですが。あなた様方が優秀なエフ・ビー・エルだと聞いてやってまいりました次第で。どうか、このばあやの願いを聞いてもらえねえだろうか？

スケアリー…あたくし達はエフ・ビー・エルではなくてエフ・ビー・エルの捜査官ですよ。でも優秀なことには変わりありませんけど。どうぞ入っていらして。

ばあや…面目ないです。

スケアリー…それで、どういったご用件かしら？

ばあや…はい。ワタスのお仕えしているエニホエアという国のドコデーモス王様の娘様のアティラーノン姫のことでございます。

スケアリー…：何のことだか解りませんか？ それはどこの国のですの？

ばあや…エニホエアという国のドコデーモス王様の娘様のアティラーノン姫が日本に来るので日本のことでございます。

スケアリー…あたくしの聞いたのはそういうことではないのですが。まあ良いですわ。そのアティラーノン姫という方のことですね。

ばあや…そうでございます。アティラーノン姫がお忍びで日本へやって来て、あるデパートでイベントをやるのでございます。

スケアリー…イベントって何のですの？

ばあや…ご自慢の歌を披露するのでございます。

スケアリー…それはデパートのイベントらしいイベントですけれども。それがどうしたというんですの？

ばあや…姫様が日本にいる間、あなた方に姫様を災いからお守りしていただきたいのでございます。こういうことから、あなた方以外に出来る人はいないと警察の方から聞いてここへまいったのでございます。どうか、お引き受け願えないだろうか？

スケアリー…普通、そういうことは警備会社がやるものですけれど。



ばあや… 予言による災いは並みの人間には防ぎきれないものがございます。それでワタスは警察にお願いに上がったの  
でございますが、そこでニコラスというお方が「そういうことならうってつけの人たちがいる」とあなた方を紹介され  
たのでございます。

スケアリー… ニコラスですって?! それは若い人でした?

ばあや… はい。それはもう若くて男らしい青年でしたよ。ウヒヒヒヒイ…。

スケアリー… それなら、引き受けるしかなさそうですね。…ところでモオルダアはどこにいるのかしら? 面倒なこ

とはモオルダアにまかせて、あたくしは事態を把握するためにニコラス刑事様に連絡を取るべきですわ。

ばあや… それでは、お引き受けしてただけのですね。これではあやも一安心でございます。姫様はもうすぐにこち  
らにお着きになれる。お頼みもうしたぞ。ウヒヒヒヒイ…。

「ばあや退場」

スケアリー… ウフフツ。ウフフツ。まったくニコラス刑事様だったら、あたくしのことが気になってしかたがないんで  
すわね。それだから、ことあるごとにこうしてあたくし達を頼って来たりするんですわ。ウフフツ!

スケアリー「歌」

出会った時から気づいてたでしょ

知らないふりして気を引いたでしょ?

夢みるファンタジー

きらめくディスタニー

ウ・フ・フ・フ、ララララーラー

ウ・フ・フ・フ、ララララーア

「モオルダア入場」

モオルダア…ど、どうしたの？

スケアリー…あらイヤだ！ 部屋に入るはノックぐらいしたらどうなんですか？

モオルダア…いやあ、色々考えることがあってねえ。キミが来ているとは気付かなかったから。

スケアリー…あら、あなたも物考えることがあるんですね。そんなことよりもあたくし達にはやる事が出来た

んですから、あなたはすぐにどこかの国のなんとかというお姫様を迎えに行って護衛をしなくてはいけませんわよ。

モオルダア…なんだそれ？ どこかのなんとかじゃ全然解らないけど。それよりもボクはもっと重要な事件を捜査中な

んだ。その何とかのどうかは警備会社にやらせるべきだよ。

スケアリー…そうじゃなくて、警察があたくし達を頼りにしているんだから、こっちが優先に決まっていますわ！

モオルダア…そんなことはないと思うけどね、ボクはテロを未然に防ぐために大忙しなんだぜ。

スケアリー…テロって、あの爆弾とかそういうテロですか？ そんなことをあなたが捜査できるはずはありませんわ。

モオルダア…普通はそうだけだね、今回の場合はちよつと特殊だしね。でもこれは明らかに誰かがテロ行為を企ててい

るに違いないんだ。規模は小さいといえ、そんな警護をやっている間にテロが起こってしまったら、救えるかも知れな

い命も救えなくなってしまうからね。

スケアリー…それは、大変なことですか！

スケアリー「歌」

ジレンマだーわー！

モオルダア…なんでさっきから歌うんだ？

スケアリー…今回はそういう設定なんですのよ！ あなたもそのうち歌わされるわよ。

モオルダア…それは勘弁してほしいなあ。ボクはそういうノリには一番向いてないと思うんだが。

[Exeunt]

### 3 ドコデーモス宮殿の一室

予言者…うーむ、これは一大事ですぞ。自体は急速に悪い方へと進んでいる。

ドチラーノン…まあ、なんということでしょう。一体何があの子を危険に陥れようとしているのです？

予言者…ウーン…、ウーン…。見えてきたぞ。イヌだ。尻尾が迷路になっているイヌに気を付けるのだ。

ドチラーノン…イヌですって！？ それはどういうことですか？ この島にはイヌは一匹もいないはず。

予言者…そう、そのとおり。この島にいる限り姫様は安全なのです。遺伝的にイヌ恐怖症のこの島の住人によってイヌは一匹残らず処分されましたからね。しかし運命の歯車は尻尾が迷路になっているイヌによってあらぬ方向へと回り始めています。

ドチラーノン…まさかあの子がこの島を離れて日本へ行くとも言うの？

予言者…ことによると姫様はもうすでにこの島を発たれているかも知れません。

ドチラーノン…それはあり得ませんわよ。この島を出るには島に三機しかない飛行機を使わないといけませんもの、そんなことをすればすぐにでも…

「ドコデーモス入場」

ドコデーモス…おお、ここにいたか。ちょっと聞きたいのだが、飛行機が二台見当たらないんだ。どこかで見なかったかの？

ドチラーノン…キョエエエー！

ドチラーノン 「陰鬱な歌」

牢獄、監獄、猛毒、サソリ！

災い、船酔い、あの子に迫る

ドコデーモス…いったいどうしたというんだ？

ドチラーノン…あなた！ あなたがあの子を甘やかすからいけないんですよ！ あの子が島を離れて日本へ向かってい

るのよ。

ドコデーモス…なんだったって？

ドコデーモス「歌」

そいつは大変だー！

予言者…王様、わざわざ歌で驚くことでもありません。ここは私にまかせてくれませんか。

ドコデーモス…おまえはあの子を救う手だてを知っているというのか？

予言者…出来る限りのことはしてみようつもりでございます。ただし一つ条件があります。

ドコデーモス…条件とは？

予言者「歌」

謎の男、未来を知る

彼の望む、ものは何か？

金銀財宝、それとも名誉

それとも、黒い髪の娘

ドコデーモス…だから何なんだ？

ドチラーノン…あの子が危険にさらされているというのに、そんなことは関係ないじゃないですか。早くあの子を助けないと。

ドコデーモス…それもそうだな。それで予言者よ。どうすればいいのだ。

予言者…残った飛行機で日本にまいりましょう。そして尻尾が迷路になっているイヌをくい止めましょう。

ドコデーモス…ずいぶんと解りやすいんだな。それで、その尻尾が迷路になっているイヌというのは何だ？

予言者…未来とはうつろうもの。尻尾が迷路になっているイヌも明確ではございません。ただし、その気配を感じることで出来るのなら尻尾が迷路になっているイヌをくい止めることも可能なのです。

ドチラーノン…さあ、そうと決まったら早速出発の準備をしなくては。

ドコデーモス、ドチラーノン、予言者「歌」

お姫様を助けに行くぞ

異国の地まで

お姫様の向かった先は

島国、日本

(ドコデーモス) どうしていつもお転婆ばかり

(ドチラーノン) それはあなたが甘やかすから

(予言者) いえいえ、それは運命の仕業

お姫様を助けに行くぞ

異国の地まで

お姫様の向かった先は

島国、日本

[Exeunt]

#### 4 さびれたデパートの前

「ばあやが誰かを待っている」

「アティラーノン入場」

アティラーノン…ばあや!

ばあや…おお、姫様。無事にお着きになりましたか。

アティラーノン…もう、ばあやったら。あたしはもう立派な大人よ！ここに来るぐらいどうってことないんだから。子供扱いしないでちょうだい。

ばあや…ばあやにとつては姫様をお守りするのが一番の勤め。どんな時でも心配せずにはおれませぬ。

アティラーノン…それにしても、思った以上にこの国は平和ね。そして静かだわ。どうしてこんなに静かなのかしら？

ばあや…今日はこのデパートが定休日なのでございます。それで周りの商店も店を閉めているということで、こんなに静かなのでございます。

アティラーノン…これではちよつと寂しいわね。こんな寂しいところでホントにあたしの「夢みた人」は現れるのかしら？

ばあや…それはばあやにはなんとも言えませぬ。それよりもデパートの人がお待ちかねじゃ。そろそろイベントの打ち合わせを始めなくてはなりません。早く中へまいりましょう。

「アティラーノン、ばあや退場」

「モオルダア、スケアリー入場」

スケアリー…ちよいとモオルダア、ホントにここであつてるんですの？

モオルダア…そうだけど。でもキミにはまだ何も話してなかったよねえ。どうしてそんなふうに疑ったりするんだ？

スケアリー…そうではなくて、ここつて、あのどこかの国のなんとかというお姫様がイベントをやるっていうデパートですわよ。

モオルダア…それはどうにも怪しいなあ。

スケアリー…怪しいってどういうことですか？

モオルダア…今回の件がボクらに任せられたのにはもちろん理由があるんだけどね。

スケアリー…それはあたくし達が優秀な捜査官だからに決まっていますわ。

モオルダア…そうじゃなくて、このテロには政治や宗教的な理念がないんだよ。なんといいか解らないけどね。ある予言書を解読していた人がいて、その人の説によるとどう考えても数日中にここで爆弾テロのような恐ろしい事件が起こるといふことなんだよ。そんな予言で警察が動くワケにもいかず、ボクらが捜査を依頼されたんだけど。

スケアリー…まあ！ それじゃあ、あたくし達はその怪しい予言書の研究者のどうでもいい説のためにこんな捜査をしているの？ そんなことなら、あたくしはニコラス刑事さまとイベントの警備をいたしますわよ。そんな予言なんかに振り回されるのは御免ですわ！

モオルダア…でもどっちにしろこのデパートに来ることに変わりはないんだから。もしかすると、そのどこの国のなるとか姫も何か関わりが…。あれ、誰か来るぞ！

スケアリー…ホントですわね。

「モオルダア、スケアリー物影に隠れる」

「ニコラス刑事入場」

ニコラス刑事…ああ、まったくどうして私がこんなことをしなければいけないんだ？ 私は凶悪犯罪や手強い知能犯相手に自分の能力を使うべきなのだ。それがどうしてイベントの警備なんか。思えばあの高原での事件が私の人生を狂わせたのかも知れない。あの時に、あの二人が現れなければ…。あの事件が謎を残しながらも解決したおかげで私は東京に戻って来られたワケだが。なんだか戻ってからの私はさっぱり良いところがないな。伝説とか予言がどうか、このおかしなイベントの警備はあの二人にピタリだと思っていたのだが、まさか断るとは考えもしなかった。私がこんな警備を担当するなんて…。

出世の道は平坦かも知れない。しかし正義の道は長く険しい。私は刑事になんかならなければ良かったんだ。

「スケアリー出てくる」

スケアリー「歌」

それは違うわ

あなたには出来るわ

あたくしの愛の力で

あなたは変わるわ

ニコラス刑事…あれ？ スケアリーさんじゃないですか。私は今回のイベントの警備を断られたと断っていたのですが、間違いだったのですか？

スケアリー…もちろん。そんなことはございませんわ。あたくしがあなたからの依頼を断るはずはございませんから。ウフフツ。

「モオルダア出てくる」

モオルダア…そうじゃないでしょ。ボくらにはもっと重要な任務があるんですよ。

ニコラス刑事…あれ？ モオルダアさんも。でもどうして二人はここにいるんですか？

スケアリー…モオルダア、あなたは一人で怪しいテロの捜査をすれば良いんですわ。あたくしはニコラス刑事さまとイベントの警備をいたしますから。

ニコラス刑事…いやあ、それなら大丈夫ですよ。それよりもテロってなんですか？ そんな恐ろしいことがあるのなら二人はそちらに専念していただきたいし、それに我々も出来る限り協力したいと思えますが。

スケアリー…テロなんてそんな大したことじゃありませんわ。ホントかどうか解らない予言の話ですもの。それよりもイベントの警備のほうが大切ですわ。あたくしとニコラス刑事さまがイベントの警備をしてモオルダアがテロの捜査をすれば良いと思いませんこと？

モオルダア…それはどうでも良いけどね。それよりも、どこかの国から来るお姫様とこのテロの情報は何か関係があるとは思わないか？

スケアリー…それは関係ないですわ！

ニコラス刑事…でも、まったく違うことをしているはずなのに、ここでこうして我々が出会ったということは偶然ではないかも知れませんよ。

スケアリー…そのとおりですわ！

ニコラス刑事…それじゃあ、ボクは警備のことについてこのデパートの責任者と話がありますから。なにか解ったらお互いに連絡を取り合いますよ。それでは。



「ニコラス刑事退場」

スケアリー…ああ、行ってしまいましたわ…。それでモオルダア。その予言というのはなんなんですか？  
モオルダア…それはここで話すにはちょっとややこしすぎるんだけどね。それよりも今日はキミなんかおかしくないか？

スケアリー…どこがおかしいというんですの？ あたくしはいつも変わららず完璧ですわ！  
モオルダア…それなら良いんだけど。

「モオルダア退場」

スケアリー…ああ、ニコラス刑事さま！ どうしてあなたはニコラス刑事さまなの？ バラの花の名前がニコラス刑事さまだったらバラはニコラス刑事さまで、ニコラス刑事さまはバラですか？

スケアリー「歌」

おかしなことね

頭の中がイバラの道よ

あなたのことを思うだけでも

トゲが刺さるの

あたくしの胸を

チクチクニコラス

晴れた青空

曇らすニコラス

「スケアリー退場」

5 さびれたデパートの中

「ばあや、アテイラーノン入場」

ばあや…これで明日のイベントの準備は万端でございますな、姫様。  
アテイラーノン…そうね。でもさっきの人は「夢みた人」ではなかったわ。  
ばあや…運命の人にはそう簡単に巡り会えるものではございませぬ。  
アテイラーノン…なんだか心配になってくるわ。本当に現れるのかしら？  
ばあや…島に伝わる伝説をそう簡単に疑うものではございせんよ、姫様。  
アテイラーノン…そうね、ばあや。会えたら良いのですけど…。

「ばあや、アテイラーノン退場」

「エキストラ1（清掃員）、エキストラ2（清掃員）入場」

エキストラ1…なあ知ってる？

エキストラ2…知らないよ！

エキストラ1…そうじゃなくてさ。ボクの知り合いにゲームが大好きな人がいてさ。子供が出来たら絶対にトゥームレイダーって名前にするって言ってるんだよ。

エキストラ2…なんだそれ？ 普通は登場人物の名前とかつけるだろ？

エキストラ1…まあ、そうだけだね。ボクに聞いても知らないよ。でもトゥームレイダーって言ったらアンジヨリージョリーナだよな！

エキストラ2…誰だよそれ！？

「エキストラ1、エキストラ2退場！」

「ニコラス刑事入場」

ニコラス刑事…ここがイベントの責任者がいるという部屋か。それにしてもこの建物は思っていた以上に古いな。それに床がホコリだらけだ。ちゃんと掃除をしているのだろうか？こんな場所でイベントをやるうなんて、アティラーノン姫という人は何を考えているのだろうか。いや、アティラーノン姫が自ら進んでここを選んだのではなくて、このデパートの誰かが彼女を呼んだのだとしたら、このデパートの人間にも気を付けた方が良いのかも知れない。とにかく警察に警備を依頼してくるほどのことだ。気を抜いてはいけない。

警察のほうから来ました、ニコラス刑事です。失礼します！

「ニコラス刑事退場」

「予言者入場」

予言者…どうやら私の思い描いたとおり事は運んでいるようですねえ。予言とは人々がそれに従うだけ。神の意志も運命の力もそこにはありません。人々は予言を聞いた時からその予言にあるような行動をとってしまうのです。何か行動を起こす時に必要なものはちよつとした道しるべなのです。それがなければ人々は道に迷う。私の予言に従って羊たちもこの国へやって来たようだ。きっと私の予言は現実のものになりますよ。そして私は全てを手に入れるのです。

「予言者退場」

## 6 予言の書より（抜粋）

「台詞のみ」

神々に呪われた排気ガスの国に尻尾が迷路になっていくイヌが現れる時、第一の国から訪れた災いにより森に囲まれた宝物の館は火山の神の怒りに触れるであろう。尻尾が迷路になっているイヌがひとたび吠えるのなら、宝物の館は炎に包まれる。さもなくば排気ガスの国のガスを吸い込んだ者はさまよい続け、カラが迷路になっている卵を産み落とす。そして、天界の王国から来た使者の涙は虚しく流れるだろう。

## 7 ペケファイル課の部屋

スケアリー…どうしてこれがあのデパートでのテロになるんですの？

モオルダア…良く解らないけどねえ。「火山の神」が爆弾で「宝物の館」があのだパートになるみたいだよ。あの辺はけっこう緑が多かったしねえ。

スケアリー…それだけなんですの？ 他の部分はどうなんですの？ 「排気ガス」とか「卵」とか「使者の涙」とかはどうなるんですの？

モオルダア…その辺は今解読中らしいよ。でもあのデパートには他の国から誰かが来るよねえ。それがもしかしたら「第一の国から訪れた災い」かも知れないよ。

スケアリー…全然信じられませんが。だいたい、こういうものって何にでもあてはまるような書き方をされているから、どうにだつて解釈できるんですのよ！

モオルダア…それはそうかも知れないけど、ボクの第六感はその場所で何かが起ころうとしているとボクに告げているんだよねえ。

「スキヤナー入場」

スキヤナー「歌」

おい！ モオルダア！

おい！ モオルダア！

何をしているんだ！

おい！ モオルダア！

おい！ モオルダア！

緊急事態だ！

スケアリー「歌」

ちよいと副長官

部屋に入る時は

ノックぐらいしたらどうなんですか？

スキヤナー「歌」

おや、スケアラー！

おや、スケアラー！

キミもいたのか

おい！ モオルダア！

おい！ スケアラー！

何をしているのだ〜！

モオルダア…：何をもって言われても…。予言の解説とでもいまいましようか。

スキヤナー…そんなことをしている場合ではないようだぞ。どうやら、どこかの国からテロリストが潜入しているらしい。彼らは自らを「角が迷路になっている羊団」と名乗っているようだ。

モオルダアとスケアラー…角が迷路になっている羊団！？

スキヤナー…そうだ。同時に驚くほどのヘンな名前だろ？

モオルダア…そうじゃなくて。…これはどうにも予言の書が怪しくなってきたなあ。

スケアラー…そうですわね。事態は緊急を要するのかも知れませんが！ あたくしは今すぐに警察と連携するためにニコラス刑事さまのところへ急行いたしますわ！

「スケアラー退場」

スキヤナー…なんだキミ達は？ 私はまだ詳しいことは何も言っていないのに、なんだか行動が早いな。うん、さすがは私の部下だ。一を聞いて十を知るといふやつだな。

モオルダア…そうじゃなくて、予言が現実のものになるような感じなんですよ。

スキヤナー…予言ってなんだ？ それは謎めいたラビリンズだなあ。

スキヤナー「歌」

ナンセンス

月明かりの

プリンセス

謎めいてる

ラビリンズ

瞳の中の魔法

「スキヤナー歌いながら退場」

(曲のイントロが流れる)

モオルダア…なんだか…もう。こんなにミステリアスな展開なのに、みんなが歌うから調子が出ないな。もしかしたら、ボクも歌ってみたら頭が冴えてくるかも知れない。

(歌が始まる手前で曲が止まる)

モオルダア…やっぱり、やめておこう。このノリにはどうしたってなじめないんだ。ああ、ボクもあんな感じになれたらなあ…。

「モオルダア退場」

「ドコデーモス、ドチラーノン入場」

ドコデーモス…ああ、なんという陰鬱な場所へやって来たのだ。荒れ果てた墓場から這い出した死人達でさえ、この場所には長居できない。

ドチラーノン…死人の話とは、なんと不吉な。ここにはあの子を救うため、災いの炎を消すために来たのでございま

す。そんな不吉な話はしないでください。

ドコデーモス…そうは言っても、この薄暗さ。このよどんだ空気を吸えばそんな思いもめぐるもの。とにかく、早いところを出たいものだが。

ドチラーノン…それは私も同じこと。この場所にいる二人に聞けば解ると聞いてやって来ても、その二人はどこへやら。ドコデーモス…無駄に時間を費やして娘を危険にさらすとは、断じて許されてはならぬ。おい！ 誰かいないのか！  
おい！ 誰か！

ドチラーノン…誰もいない部屋で誰かを呼んでも答えはありません。ここは島の掟に従って歌を歌えば良いのです。ドコデーモス…ふうむ。良いところに気が付いたな。さすがは我が妻だ。

ドコデーモス「歌」

予言者は言う、心配はないと

ドチラーノン「歌」

それでもあの子の顔を見るまでは

ドコデーモス、ドチラーノン「歌」

押し寄せる不安に息が詰まる

暗い地下室に光はあるか

早く助けたいな

ア・ティ・ラーノーン！

「エキストラ3（FBL職員） 入場」

エキストラ3…あの…。ペケファイルの二人ならデパートのほうに行きましたけど。…多分ア・ティ・ラーノーン様もそちらにいらっしやるかと…。

ドチラーノン…あら、そうなの？ それなら早く言ってくださらないと。

ドコデーモス…まったくだ！

[Exeunt]

8 さびれたデパートの前

「ニコラス刑事入場」

ニコラス刑事…あの責任者は私が来ただけであんなに驚くとは。しかし、それもしかたのないことだろう。どこの誰だか解らないような人のイベントのために警察がやって来るとは、誰も思っていないだろうからな。どうやらエニホエア王国という国については何も解らないようだが、本当にそんな国があるのだろうか？ もしも、ちゃんとした国だというのなら、それはそれで心配なのだが。しかし、待てよ。もしもそんな国から来たお姫様のイベントを何事もなく終わらせることが出来たら、きっと私の評価も上がるに違いない。どんな小さな国か知らないが、このイベントがきっかけで二国間に友好関係が築かれたりしたら…。出世の道も、正義の道も意外と平坦だ！

「スケアリー入場」

スケアリー…ニコラス刑事さまー！

ニコラス刑事…（うわっ、まずい！）

スケアリー…良かったわ。間に合いましたわ！

ニコラス刑事…どうしたんですか？ そんなに急いで。

スケアリー…大変なことになったんですよ！ イベントは即刻中止なさって。このデパートはテロリストに狙われているんですよ！

ニコラス刑事…まさかそんな？！ この古びたデパートに爆弾を仕掛けたりするんですか？

スケアリー…手段は解りませんが、とにかく危険なんですよ！ もしかすると、もう誰かがデパートの中に忍び込んで何かを始めているかも知れませんわ！ ここは二人でこの薄暗いデパートの中をドキドキしながら調べるんですよ！



よ！

ニコラス刑事…いやいや。ちょっと待ってくださいよ。ボクはさっきまでこの中にいましたけど怪しいことは何もありませんでしたよ。それに、ちょっと冷静になってください。聞いたところによると、このデパートでやるイベントには休日できえも20人ぐらいしか人が来ないってことですよ。明日は水曜日。それに今回のことは突然すぎてほとんど告知も出来てないってことですから誰も来ないですよ。そんなところでテロ行為をしたって何の意味があるんですか？ スケアリー…それは予言が…。あらいやだ！ あたくしだったらまたモオルダアに上手いこと騙されるどころでしたわ！ 偶然が重なったおかげであやうく怪しい予言を信じてしまうところでしたけど、あなたのおかげで目が覚めましたわ！ それじゃあ、あたくしはあなたと一緒に警備の方を担当いたしますわね。

ニコラス刑事…それは、もう大丈夫ですよ。スケアリーさんはその予言とかテロとかについてももう少し調べた方が良いでしょう。警備のほうはもう準備できましたし。

スケアリー…あら、そうなんですの。それじゃあ、あなたはもうこれからやることが無いんじゃないやございせん？ よろしかったら…

ニコラス刑事…あっ！ 私はもう行かないと。他にも担当している事件が沢山あって…。今日は徹夜だなあ。きっと明日もだ。いや、この先ずつとかなあ。もう大変ですよ。アハハハ！ それじゃあスケアリーさん！

「ニコラス刑事退場」

スケアリー…あら、行ってしまいましたわ…。きつとあたくしの愛の力で刑事という仕事への情熱が甦ったに違いありませんわ！ ええ、そうよ！ きつとあの方は一人前の刑事としてさらにステキになってあたくしのところへ戻って来るに違いせんわ！

スケアリー「歌」

じらされたって、かまわないわ

あたくし達はもつとステキになれる

回り道して、見つけることもあるわ

あたくし達の出会いのように

思い、めぐりめぐって燃え上がる

愛の炎、夜の荒野を照らす

情熱の、愛なのよ

恋する乙女じゃないの！

「アティラーノン入場」

アティラーノン…そこで愛の歌を歌っているのはだれ？　ここで愛の歌を歌えるのはあたしだけ。誰であろうと、そこで愛の歌を歌ってはいけません！

スケアリー…なんですかの、あなたは？

アティラーノン…伝説の歌姫、アティラーノンとはあたしのことよ！

スケアリー…あら、するとあなたが明日ここでイベントをやるといってお姫様ね。

アティラーノン…そうよ！　ですから、あなたがさっきここで歌っていた愛の歌は取り消しなさい！　ここで愛の歌を歌うのは伝説の歌姫だけと決まっているのだ。

スケアリー…そうしたいところですが、あたくしの情熱の炎はあなたのような小娘には解らないものよ。あたくしの愛の炎が消えないがごとく、取り消すことは出来ませんわ。

アティラーノン…小娘とは無礼な！　あたしは立派な女。お年頃のお姫様よ。未来の王様と出会うためにここへやって来たのです。第一の国から来る王子様はあなたのような年老いた女には見向きもしないわ！

スケアリー…あたくしは今いろいろなことを我慢して冷静になろうとしているのよ。ですから、あたくしの質問にちゃんと答えるんですのよ。さもないと、あたくしは…。まあ、いいですわ。じゃあ質問するから答えるんですのよ。

アティラーノン…その前に愛の歌を取り消すのなら答えてあげるわ。

スケアリー…その前に「年老いた女」を取り消しなさい！

アティラーノン…（まあ、なんて恐ろしい。もしかするとあの人は天界からの怒りの使者かも知れないわ！）解りました「年老いた女」は取り消します。

スケアリー…あら、意外と素直じゃないの。それじゃあ愛の歌も取り消しますわ。それで、あなたの言っていた「第一の国」というのは何のですの？

アティラーノン…それはあたしの島に伝わる伝説の話。「第一の国から来た王子さまと結婚したお姫様は末永く幸せに暮らしましたとき」という話よ。

スケアリー…それは、どう考えても一番最後の一文だと思うのですけれど。もう少し詳しく話すことは出来ないんですの？ あたくしは「第一の国」という言葉を聞いて、何か不吉なことが起きないかと心配になっているんですのよ。どうしてあなたが日本にやって来たのかとか、そういうところも説明してくださいませんか？

アティラーノン…（もう、面倒な人だわ。）

恵みの島のお姫様。第一の国で歌う時。

尻尾の迷路を抜け出でて、夢みた人と巡り会う。

迷路の羊が鳴くのなら。

降り注ぐのは天界の、怒りの使者の一撃か。

宝物の家に逃げ込めば、二人は愛に燃え上がり。

消えることなく照らす篝火。

スケアリー…なんですのそれは？

アティラーノン…島の伝説よ。

スケアリー…あたくし、それとよく似た予言を知っているんですけど、もしかして、それもあなたの国の…

「ばあや入場」

ばあや…ああ、姫様！ こんなところにおいででしたか。さあ、早くここを離れないと。王様と女王様がこちらに向かっているとのことですよ。

アティラーノン…まあ、それは大変な事ですわ！ 話の途中ですがあたしは行かなくてははいけません。

「アティラーノン、ばあや退場」

スケアリー…ちよいと！ どういうことなんですか？ それにしてもあの小娘は気に入りませんわ！ 若く美しいこのあたくしに向かって「年老いた女」ですって？ 笑わせるのもいい加減にしてもらいたいものですわ！

「モオルダア入場」

モオルダア…ああ、スケアリー。やっぱりここにいたのか。

スケアリー…ちよいと、モオルダア！ どういうことなんですか？

モオルダア…どうということって言っても…。何で怒ってるの？

スケアリー「歌？」

モオルダア！ モオルダア！

殴るわよ！ 殴るわ！

モオルダア！ モオルダア！

この鉄拳を受けるのよ！

「ホントに殴る」

モオルダア…ウウウ…。何で殴るんだ？

スケアリー…あらいやだ。モオルダア、あなたいたんですの？

モオルダア…いたんですの？ って、さっきボクを見てモオルダアと言ってなかったか？

スケアリー…あら、そうでしたかしら？ オホホッ。それで、モオルダア。何の用ですか？

モオルダア…なんだか衝撃でほとんど忘れかけてるけど、予言についてすごいことが明らかになったんだよ。

スケアリー…それってもしかして、予言がああ島の伝説と関係してるとか、そういうことじゃないでしょうね？

モオルダア…何でキミがそんなところに気付くんた？

スケアリー…それはどうでもいいですわ。そのことを追求するなら、また痛い目にあいますわよ。

モオルダア…それなら、何も聞かないけどね。ボクにはどうにも気になることがあって、例の予言の書を解読した人物に詳しく話を聞いてみたんだよ。そうしたら、あの予言の書はエニホエア王国の古い伝説を元に書かれている可能性があるってことなんだよ。

スケアリー…伝説だったら予言にはなりませんわよ。

モオルダア…まあ、普通はそうだけだね。ただエニホエア王国には昔から優れた予言者が沢山いるらしいんだ。国内のことも国外のことも、これまでに起きた多くの出来事がその伝説の中に書かれているんだよ。日本で起きた大きな自然災害なども大抵は書かれていたらしいよ。それに、伝説の中にはボクらのことも書かれているんだ！「地上の民に追われし地底の民は、彼らを追った二人の手により再び天の民に戻るだろう」って。興味深い一節だろ？

スケアリー…それは、そんなデタラメな詩みたいな文章だったらどうにでもこじつけは出来ますわ。それよりも恐ろしいのはそういう予言や伝説を信じすぎるあまり、無意識のうちに自らの手でそれを実現させようとすることですわ。エニホエア王国の姫は王子さまと巡り会えると信じてここにやって来ているのよ。

モオルダア…ホントに？

スケアリー…ホントですわよ！でも、日本に潜入したテロリストはその伝説と似たような予言を別の視点から解釈してデパートが炎に包まれることを望んでいるに違いありませんわ。どっちにしろ、そんな伝説や予言みたいなことは自然には起きないでしょうし。それにニコラス刑事さまが言うには、ここにはまだ怪しい人物は誰も来ていないってことですわよ。

モオルダア…でも、予言とよく似た伝説を信じてエニホエア王国の姫がここに来たのなら、テロリスト達もここに来る可能性は高いよね。これはこの付近を厳重に警備しないと危険かも知れないぜ。どの解釈が正しいか、それともどれも間違っているのかしらないけど、こういう話は意外とあなどれないんだよ。もしかすると、警備をしている人の中に伝説の王子さまがいたりしてね。

スケアリー…なんですか、その乙女チックな発想は？

モオルダア…そうじゃなくて、想像力が豊かと言って欲しいな。

「ドコデーモス、ドチラーノン入場」

ドチラーノン「歌」

排ガス、スモッグ、高温多湿

胃もたれ、胸焼け、ギトギト、天ぷらドーン！

ドチラーノン…さっきのお店のドンブリは酷い味でしたわね、あなた。

ドコデーモス…まったくだ。油の値段が高いのはどこでも一緒。きつと古い油を使い回しておるのだろう。

ドチラーノン…今度来る時にはもつと高級な店にいたしましょう。ヒルズという部族がいるところには美味しいものを出す店があるそうですよ。…おや？ あそこにいるのは探していた二人ではありませんか。

ドコデーモス…おお、これはちょうど良い。

モオルダア…ウワサをすれば怪しい人物という感じだな。

スケアリー…ホントですわ。ちよいとそこのお二人！ あたくしはFBLのスケアリーですけれども、あなた達は「角が迷路になっている羊団」のかたじやございせんこと？

ドチラーノン…まあ！ なんて恐ろしい。

ドコデーモス…我々を見て「角が迷路になっている羊団」ともうすか。娘のために遠い道のりをやって来たというのに、これほどの屈辱を受けるとは！ 打ち首にいたせ！ 打ち首にいたせ！ いや、それでは生ぬるい！ 一日に一ミ

リずつ、首を切り落とす地獄の刑だ！

モオルダア…ちよつとスケアリー。何かスゴイ怒ってるけど。

スケアリー…これはますます怪しいですわ！ あなた方が「角が迷路になっている羊団」ではないというのなら、誰なのかしら？

ドチラーノン…第一の国の民ともあろうものが、我々のことを知らないとは。

モオルダア…エニホエア王国の人だということほだいたい解りますけど？

ドコデーモス…ただの人ではない。私は王様だ！ 一番偉い王様だ！ その王様を「角が迷路になっている羊団」呼ばわりするとは。本来ならばおまえ達は即刻打ち首なのだが、おまえ達が私の探していた二人であることに免じて今は不

問に付そう。

スケアリー…お言葉ですが、この国では一番偉いのはあなたではないんですのよ。

ドコデーモス…ほう、おまえはなかなか面白いことを言うではないか？ それではこの国で一番偉いのは誰なのだ？ それはこの王様よりも偉いというのか？

モオルダア…この国に一番偉い人なんていないですよ。なんとなく決められた漠然とした意志に従ってこの国の人々は生きています。だから一番偉いのはその漠然とした意志ということになるのかなあ？

ドコデーモス…なんだそれは？

ドチラーノン…そんなことはどうでも良いのよ。二人に頼んでイベントを中止させるんです。

ドコデーモス…そうじゃないだろう。あの子のためにもイベントはやるべきなのだよ。それで誰も現れなければ、あの子も納得してもう二度とこのようなことはしなくなるだろうし。予言者もイベントを中止するようには言っていないか？

ドチラーノン…それはそうですが。予言者にさえ明確なことが解らないイヌのことですから、あの二人にどうこうできる問題ではないと思いませんか？

ドコデーモス…イヌのことなら予言者にまかせておけばいいのだよ。その他のことをこの二人にやらせればそれで良いことじゃないか。

ドチラーノン…そうかも知れませんが。それに予言者はどこに行っただんです？ ここへ来てからなんだかコソコソして落ち着かない様子で。

モオルダア…あの…。警備なら警察がやりますし、テロリストならエフ・ビー・エルが対処していますからダイジョブですよ。

ドコデーモス…私はそんなことを頼んでいるのではない。私の娘がどこにいるのかを知りたいのだ。

スケアリー…それでしたら、さっきまでここに居ましたわよ。ばあや様がいらして、あなた方が来るから逃げろ、というのであちらの方へ逃げていきましたけれど。

ドチラーノン…それを知りながらなぜ今まで黙っていたのです！

スケアリー…だって聞かなかったじゃございませんか。

ドコデーモス…そんなことよりもあの子のことが心配だ。我々もあちらの方へ向かうぞ！

ドチラーノン…そうですねあなた。

ドコデーモス、ドチラーノン 「歌」

愛しい娘よアティラーノン

ばあやと伴にあちらの方へ

箸が転んだならこちらの方へ

お年頃ならそちらの方へ

早く助けたいな

ア・ティ・ラーノン！

「ドコデーモス、ドチラーノン歌いながら退場」

スケアリー…なんだっていうの？ まったく。

モオルダア…あの人はあの人達なりに緊急事態なんだと思うけどね。話の展開からするとやっぱりこのデパートの周辺の警備をした方が良くと思うんだけど。

スケアリー…そうかも知れませんがね。なんだかあたくし悪いことが起こるような気がするんですよ。いったい何なのかしら、この胸騒ぎは？

スケアリー 「歌」

心の海に溺れてしまう

闇の中に世界が沈み

光が行き場をなくすなら

あなたは何を

求めるの？



モオルダア…???…良く分かんないけど。

「モオルダア、スケアリー退場」

## 9 翌日、さびれたデパートの中

「イベントの準備が進められる中、警察は付近の警備を、エフ・ビー・エルの職員はテロを警戒していることになっている。」

「ドコデーモス、ドチラーノン、アテイラーノン入場」

ドチラーノン…どうしてこんな無謀なことをしたのですか？

アテイラーノン…こうでもしないと、お母様は絶対にあたしがここへ来ることを許さなかったはずですよ。

ドチラーノン…私はあなたを災いから遠ざけるために、あなたがここへ来ることを許さなかったのです。

アテイラーノン…どうしてお母様はあんな予言者の言うことなんか信じるの？ あの人って陰険で気味が悪くて、あたし嫌いよ！ それに、島の伝説には災いなんてことはどこにも書いてないのよ。

ドチラーノン…いいえ違います。予言によればあなたはここで災いに巻き込まれるのです。伝説なんか信じてても良いことは何もありません。

ドコデーモス…まあ、よいではないか。何かがあっても予言者はきつと災いからおまえを守ってくれるであろう。

アテイラーノン…まさか、予言者がここに来ているの？

ドコデーモス…それだから、私達はこのイベントを中止にせずにいるんだ。そうでなければ、力づくでもおまえを島に連れて帰っていたところだぞ。何があろうともあの予言者が何とかしてくれるはずだ。おまえは心ゆくまでイベントを楽しめばいい。

ドチラーノン…それでも私は心配ですよ。

ドコデーモス…おまえは時々心配しすぎて困るなあ。

「ドコデーモス、ドチラーノン退場」

アテイラーノン…あの予言者がここに来ているなんて。まったく気分が悪いわ。あたしに災いが降りかかるとしたら、あの予言者の他にないわ。あのいやらしい目でみられるだけで、あたしは我慢が出来なくなるのよ。

「予言者入場」

予言者…これは姫様。こんなところにおいででしたか。

アテイラーノン…何をしに来たの？ あなたはあたしを災いから守らないといけないのだから、こんなところにはいけないでしょ。早くどこかへ行っておしまい。

予言者…姫様、未来の王様に向かってそんなヒドイ言い方は慎まれたほうが良いのではありませんか？

アテイラーノン…それはどういうこと？ あなたが未来の王様ですって？ どう考えてもあなたにはそんな資格はありませんわ。

予言者…島の伝説ではそういうことになっているかと思われませんがねえ。それに私の予言によってもそれは確実なのでございます。「夢みた人」は今姫様の目の前にいるのかも知れませんよ。

アテイラーノン…まあ！ 勘違いも甚だしいわ！ あなたが「夢みた人」であるはずないんですから。

予言者…伝説が姫様の思い描いたとおりであることはありませんよ。いずれにしても私が「尻尾が迷路になっているイヌ」をくい止めれば王様は私の望んだものを何でもくださるともうしておいでだ。

アテイラーノン…あなた、何をしようというの？ あなたの思い通りになんかならないのよ！

予言者…それは島の伝説が決めることではございませんか？ 姫様は「夢みた人」のために歌えば良いのです。そうすればあなたの目の前に「夢みた人」が現れますよ。さあ、もうそろそろステージの用意は出来そうですよ。姫様の愛の歌を未来の王様にしっかりとお聞かせください。

「予言者退場」

アティラーノン…どうしましょう！ これはあの予言者の罠だったのね。ばあや！ ばあや！ どこにいるの？ このイベントは中止しないといけないのよ！ ばあや！

こんな時にはあやはどこに行ったの？ ばあや！ ばあや！ ああ、どうしましょう。どうしましょう…。

「アティラーノン退場」

## 10 さびれたデパートの外

「モオルダアがテロを警戒して警備中」

「ばあや入場」

ばあや…おい、おまえ。おまえが優秀なエフ・ビー・エルか？

モオルダア…なんですか？ ボクは優秀なエフ・ビー・エルじゃなくてエフ・ビー・エルの優秀な捜査官ですけど。

ばあや…どうでもいいのだが、優秀なエフ・ビー・エルなら話があるからこちらにくるのだ。

モオルダア…ボクはいまテロの警備中なんです。持ち場を離れるわけにはいきません。

ばあや…そんなことはどうでもいい。あばかれなくてはならない陰謀があるのだ。

モオルダア…陰謀ですか！

ばあや…そうじゃ。陰謀じゃ。さあ、こちらへ来るのだ。

「モオルダア、ばあや退場」

## 11 さびれたデパートの外(別の場所)

「通行人1…イヌを連れて立っている」

「スケアリー入場」

スケアリー…ちよいと、それ何なんですの？

通行人1…何がです？

スケアリー…そのイヌですわよ！ 何で尻尾が迷路になっているんですの？

通行人1…可愛いでしょ、この子。セレブの間で大人気の尻尾が迷路になっているイヌですよ。血統書もあるんですよ。スケアリー…そうじゃなくて、そんな不吉なイヌは早くどこかへ連れて行きなさい。ここは今特別警戒地域になっているのですから、デパートのお客様とイベントに来たお客様以外は立ち入り禁止なんですよ。

通行人1…私はこのデパートに買い物きたお客様ですよ。

スケアリー…そのイヌはどうなさるんですの？

通行人1…この子はおとなしいからここにつないでおけば大丈夫。滅多に吠えたりしないからね。この子は禁煙の練習をするネコが現れない限り大丈夫ですよ。

スケアリー…何なんですの、その禁煙の練習をするネコってというのは？

通行人1…それだけおとなしい、つてことの例えですよ。それじゃあ、私は早く買い物すませて帰らないと妻に怒られますので、これで失礼しますよ。

スケアリー…ちよいと、お待ちなさい！…行ってしまいましたわね。でもこのおとなしいワンちゃんが災いを起こすはずはないですわね。よく見たらかわいいイヌなこと。…あらまあ、よしよし。イヌというのはあたくしみたいな良い人間の本质を見抜いてこうやってなついてくれるからステキですわね。

「スケアリー退場」

## 12 さびれたデパートの外階段

「モオルダア、ばあや入場」

モオルダア…べつに、さっきのところでも良かったのに、どうしてこんなところに来るんですか？

ばあや…それはこの国のヘンな習慣のせいだな。どうして灰皿がこんな場所にあるのか理解できかねる。

「ばあや、タバコに火を点ける」

モオルダア…なんだ、タバコが吸いたかったんですか。それだったらさっきの場所でもよかったのに。どうせ誰もいなかったから。

ばあや…それはそうかも知れませぬが、姫様に見られては困りますもんで。ワタスの国ではタバコなんぞを吸っているところを見られたら、誰でもこのばあやを悪魔とか鬼だとかいうのでございますよ。

モオルダア…それだったら、やめたら良いんじゃないですか？

ばあや…いつでもやめられるように練習はしておりますがな。

モオルダア…練習？…それよりも、陰謀っていうのはどうなつたんですか？ まさかタバコを吸うのにボクと一緒に連れてきたってワケじゃないでしょ？

ばあや…おう、そうだった。ワタスはワタスのお仕えしているエニホエアという国のドコデーモス王様の娘様のアティラーノン姫が生まれなすつた時からずっと姫様のお世話をしておるのでございますが、その姫様が今たいへんな危機に直面しているというような気配を感じ取ったばあやめがこうしてお願いをしにわざわざあなた様を頼っているのでございます。

モオルダア…何を言っているのか解りませぬが？

ばあや…あのずる賢い予言者が何かを企んでおるようなのでございます。

モオルダア…その予言者というのは王様と一緒に来たという予言者ですか。

ばあや…さようでございます。その予言者が島の伝説を利用して姫様やドコデーモス王様を己の意のままにしようとしているのでございます。

モオルダア…あつ、解った！ その予言者は王家の人たちをここに集めて暗殺しようと思んでいるんだな。そしてその仕事をするのは「角が迷路になっている羊団」というわけだ！

ばあや…それは違いますな。

モオルダア…違うの？

ばあや…とにかく予言者には気を付けるのです。予言者をくい止めぬ限り、姫様、いやエニホエア王国には必ずや災いが降り注ぐであろう！

モオルダア…なんだか大げさですねえ。でもボクはその予言者という人を見たことがないのでですけど、どんな人なんですか？

ばあや…それならあそこを見るがいい。

モオルダア…ああ、あの人か。顔はわかんないけど、いかにも予言者っぽい格好だね。

ばあや…それでは行くのだ！ エニホエア王国の行く末はおまえ達、優秀なエフ・ビー・エルにかかっているのだ。さあ行くのだ！

モオルダア…えっ？…まあ、行きますけど。ばあやさんはどうするんですか？

ばあや…まだタバコがこんなに残っているんだ。最後まで吸ってから姫様のところへ向かうから心配なさるな。

モオルダア…ああ、そうですね。それじゃあ、行きますね。予言者に注意ですね。

「モオルダア退場」

ばあや…おお。吸う度に短くなっていくこのタバコのようにワタスの精神がすり減っていくようだ。何としてでも姫様を守りたいのだが、あの予言者相手ではどうすることもできない。あんなエフ・ビー・エルにまかせて良いものか。…いや、島の伝説は予言者にも変えることは出来ないのだ。ワタスはやることはやったのだ。どんなに知恵を使おうとも、エニホエアの神々は伝説を信じる者を救ってくださるのだ！

ばあや「歌」

モクモク、煙の中に

未来を映し出す

島の伝説

ワクワク、するのもいいが  
炎に包まれたら最後  
麗しの姫を救う伝説

「ばあや退場」

### 13 (再び) さびれたデパートの外

「スケアリーが警備をしている」

「モオルダア入場」

モオルダア…ああ、ここにいたのか。どうやら予言者というのが曲者らしいぞ。

スケアリー…あら、モオルダア。どこにいらしてたんですの？ あなたがいない間に、あたくしは尻尾が迷路になって  
いるイヌと仲良くなってしまいましたわ。

モオルダア…なんだそれは？

スケアリー…どうもセレブの間で人気だったことですけど。でもあたくしが知らないのですから、インチキセレブの間  
で人気ってことですね。

モオルダア…全然意味がわかんないけど。それよりも、何かおかしなことかなかったか？

スケアリー…何もありませんわ。それで、あなたの言っていた予言者って何なんですか？

モオルダア…ほら、あそこにいる…。あれいなくなっちゃったなあ。まあいいや。ばあやが言うには、予言者が何か悪い  
ことを企んでいるらしいんだけど…

「モオルダアの携帯電話が鳴る。着信音はなぜかスキヤナーの歌のメロディーになっている」

モオルダア…もしもし。

スキヤナー（声だけ）…おい、モオルダア！ 何をやっているんだ！

モオルダア…何を、って。ちゃんと警備してますよ。

スキヤナー…その警備が間違っているんだ！ 例のテロリスト達は大手町方面へ向かっているらしいぞ！

モオルダア…マジですか？

スキヤナー…マジ、とか言うな！ さっきエフ・ビー・エルに匿名の連絡があつてな。最新テロリスト情報が手に入ったんだ。だからそんなところはどうでも良いから早く現場へ直行だ！

モオルダア…解りました。すぐに向かいます。スケアリー！ 大変だ！ 今すぐ大手町へ行かないと。きっと予言者もそこへ行ったに違いない。

スケアリー…えっ？ なんですの？ 大手町？ そんなことはどうでも良いじゃないですか？ それよりも、あそこにいるのはニコラス刑事様じゃございませんこと？ ちょっとあたくし、挨拶してきますわね。あなたはその何とか言うところに行けば良いんですわ。あたくしも後から向かいますから。それでは。

〔スケアリー退場〕

モオルダア…ちよっと、待ってよ。大変な事なんだから！…まあ、いいか。とにかく大手町へ直行だ！

〔モオルダア退場〕

〔予言者入場〕

予言者…やっぱりあのばあやが私のジャマをしていたようですね。しかし私の力を見くびっているようです。予言者は全てお見通し。私のジャマをすればどんなことになるか、すぐに思い知るでしょう。

〔通行人2入場〕



通行人2…未来の王様、バンザイ！

予言者…おお、おまえか。何事だ？

通行人2…姫様のイベントがもうすぐ始まるということです。

予言者…そうか。それなら急がなくてはいけないな。その前に私はやることがあるのでな。おまえは先に行って準備を進めているがよい。偽りの通行人、そして偽りのテロリストよ。

通行人2…かしこまりました、未来の王様！ 未来の王様、バンザイ！

〔通行人2退場〕

予言者…私の時代もすぐそこまで来ているようだな。

〔予言者退場〕

## 14 イベント会場の控え室

〔アティラーノンが会場の様子をうかがっている〕

〔ばあや入場〕

アティラーノン…ばあや。どこへ行っていったの？ もうすぐに始まるのよ。

ばあや…ばあやは姫様のために大忙しでございます。それにしても、思ったよりも人が集まっておるようだ。

アティラーノン…そうなのよ。これじゃあ、どの人が「夢見た人」かわからないわ。

ばあや…そう、心配なさらずとも。エニホエアの神々はきっと二人に運命の出会いをもたらしてくれましょうぞ。

アティラーノン…そうね。そうだと良いわね。でも、この人だから。なんだか悪い予感がするの。誰かが無理矢理に人

を集めて来たんじゃないかしら。

「エキストラ4（イベントの係員） 入場」

エキストラ4…アティラーノンさん。そろそろ本番ですので、準備をお願いします。

アティラーノン…ああ、とうとう始まるのね。ばあやもしっかり見守ってちょうだいね。

ばあや…ええ、姫様。しっかりと見届けさせてもらいますよ。

「アティラーノン退場」

「ばあや、タバコに火を点ける」

ばあや…タバコでも吸わないと落ちていられませぬわ。こんなものを吸っていなければ、こんなにそわそわすることもなかったのかと思うと、これはちと皮肉な話ですがな。しかし、やめようにもやめられんのがいけないところじゃ。

「予言者入場」

予言者…おやおや、またそんなものを吸って。王様にバレたらどうするんですか？

ばあや…現れおったな、予言者め。何をたくらんでいるのかしらんが伝説によって決められた運命を変えることが出来ないことぐらい、予言者ならわかっておるだろう。

予言者…残念ながら私は運命などというものは信じていないのですよ。私は運命を利用するのです。そうすることで私はここまで成功することが出来たのですよ。そして、私は望んだもの全てを手に入れることが出来るのです。

ばあや…だが日本の警察も優秀なエフ・ビー・エルも、そしてこのワタスがいる前で、おまえに何が出来るというのだ？

予言者…果たしてそうでしょうかねえ？ エフ・ビー・エルは私の流した偽の情報に踊らされて、ここにはほとんどいませんよ。それに、日本の警察はこんなところに人を集められるほどヒマじゃないようです。それから、ここに集まっ

ている客のほとんどが私が集めたテロリストだということには気付いていましたか？

ばあや…なに。おまえは姫様に何をするつもりじゃ？

予言者…姫様には何も起こりませんよ。私が警察にも止められないテロリストから姫様を守ってさしあげるのでしたら。それで私は王様から私の望むものをいただけるのです。

ばあや…何という卑劣な男！ 今すぐイベントは中止しなければ！

予言者…あっ、待ってください。私がただあなたにこれだけのことを教えられているのですか？ あなたの吸っているそのタバコですが。私は私の予言者の能力でああなたがどれだけ危険な人物かあらかじめ知っていましたからね。そのタバコにちよつと細工をしておきましたよ。そろそろ効き目が現れる頃だと思えますが。

ばあや…なんということを！ ああ、これはどうしたということだ。体中から毛が生えて来るではないか！ うう、目眩がする。誰か。誰か助けておくれ！

「ばあや退場」

予言者…これで邪魔者はいなくなった。それでは最後の仕上げにとりかかるとしようか。

「予言者退場」

## 15 イベント会場

「通行人2、数人のエキストラ5〜（客のふりをしたテロリスト達）とドコデーモス、ドチラーノンが開演を待っている、その後ろでニコラス刑事が警備をしている」

ニコラス刑事…なんだか平和な光景だなあ。どう考えても警察が警備するようなものではないのだが。何人か警官を帰らせた方がいいかな。他で事件でもあったらそれこそ大問題だし。

「スケアリー入場」

スケアリー…ニコラス刑事様！

ニコラス刑事…ああ、スケアリーさん。どうしたんですか？ モオルダアさんは？

スケアリー…モオルダアなら、何かがどうしたとか言って、どこかへ行ってしまうわ。

ニコラス刑事…なんですか、それは？ あなたも一緒に行った方が良いんじゃないですか？

スケアリー…そんなことはありませんわ。それにあたくしのことを必要としている人がここにいるのに、どうしてもモオルダアなんかについていけなくてはいけないの？

ニコラス刑事…ああ、そうですか。あの人達はすいぶんとあなた方のことを信用しているんですね。それならここにいたほうが、あの人達も喜ぶでしょう。

スケアリー…何を言っているの？ またそうやってはぐらかして。

ニコラス刑事…何がですか？

スケアリー…もうごまかしたり出来ませんわよ。あたくしここで思い切っけて聞いてしまいますわ！

スケアリー「歌」

もうこれ以上待てないの

あなたの思い、ここで…(途中で終わる)

ニコラス刑事…あっ！ 始まりますよ。

「アティラーノン入場」

「ドコデーモス、ドチラーノンの拍手と客のふりをしたテロリスト達の偽の拍手でアティラーノンを迎える」

ドチラーノン…どうとう始まりましたね、あなた。どうしても心配でなりません。

ドコデーモス…そう心配するな。予言者も先ほど心配はいらぬ、ともうしていたではないか。

アティラーノン…みなさま。今日は忙しい中、こんなにたくさん集まっていたいただいて、本当にありがとうございます。それでは、あたしの愛の歌。一生懸命歌うので聞いてください！

ニコラス刑事…おお、あれがアティラーノン姫なのか?! なんて美しいのだ! スケアリー…ちよいと。ニコラス刑事様?

「ニコラス刑事、アティラーノンの前に向かう」

アティラーノン「歌」

ウソでしょ、マジなの? お魚ダンス

迷路にはまって、目が回る

アー、恋をするのよ、見知らぬ国で

アー、夢みた人は、奇跡の海で

待っているの

思っているの

珊瑚礁、きらめいて燃え上がる

南の島の、恋の秘密

伝説に迷い込むラビリス

抜け出して、あなたの元へ

「間奏」

ニコラス刑事…なんて素晴らしい歌なんだ。それにこの歌声。私の魂が揺さぶられるようだ!

スケアリー…何なんですの、あの歌は？ それにニコラス刑事様はどうしてあんな女に見とれているんですの？

「通行人1、尻尾が迷路になっているイヌを連れて入場」

通行人1…おや？ 今日はずららしい人が来ているんだなあ？

通行人2…よし、みんな準備は良いか？ 二番が終わったら作戦開始だ。

エキストラ5「小声で」…おう！

アティラーノン「歌、2番」

マジなの？ マジだわ、フカヒレさんす

お城の生活、目が回る

アー、恋をしたのよ、見知らぬ国で

アー、夢みたあなた…

「伴奏だけ続く」

ばあや「声だけ」…姫様！ 姫様！ 大変な事になりもうした！

アティラーノン…ばあや?! どこなの？ どこにいるの？

ばあや「声だけ」…姫様、ばあやはここにおります。予言者にこんな姿にされてしまいました。

アティラーノン…そのタバコをくわえたネコ！ もしかして、あなたがばあやなの？

ばあや「声だけ」…そうです。姫様、早く逃げるのです。予言者はとんでもないことをたくらんでおるのです。

アティラーノン…ダメよ。歌わないと「夢みた人」には出会えないのよ。

「禁煙の練習をするネコ入場」

禁煙の練習をするネコ（ばあや）… いけません姫様！ 全ては予言者の陰謀なのです。

通行人1… ウワァ！ アレは禁煙の練習をするネコじゃないか！ おい、ダメだ！ 落ち着くんだ。行っちゃダメだ！

「尻尾が迷路になっているイヌ、通行人1の持っている綱を振りほどいて吠えながらステージへ走る」

通行人2… ウワァ！ 大変だ！ イヌだ！ アレは尻尾が迷路になっているイヌだ！

エキストラ5… ウワァ！ イヌだ！ 大変だ！ 尻尾が迷路になっているイヌは破壊の神だ！ ウワァァァ！

「通行人2、エキストラ5、逃げ出す（退場）」

ドチラーノン… あなた！ 大変よ！ アレは尻尾が迷路になっているイヌじゃありませんか。

ドコデーモス… なんて恐ろしい！ 予言者は？ 予言者はどうしたのだ？

ニコラス刑事… なんだ、この騒ぎは？ 大変だ！ 猛犬が突進してくるぞ。美しいアティラーノン姫を守らなければ！

「ニコラス刑事、ステージに上がってアティラーノンをかばう。尻尾が迷路になっているイヌは二人の横を通りすぎて、禁煙の練習をするネコを追いかける。その後を通行人1が追う。禁煙の練習をするネコ、尻尾が迷路になっているイヌ、通行人1退場」

スケアリー… ちよいと、どういうことですか？ どうしてあの二人は見つめ合っているんですか？ その小娘！ ニコラス刑事様から手を離さない！ さもないと発砲しますわよ！

ニコラス刑事…ケガはありませんか？ お姫様。  
アティラーノン…ええ。あなたのおかげで…。私の夢みた人…

ドチラーノン…あの子は何事なの？

ドコデーモス…見たまえ、あの二人を。どうやら伝説は本当だったようだ。

アティラーノン…ハッ！ ばあやが、予言者が！ 大変な事になっています。早く助けないと！

ニコラス刑事…落ち着いてください。ここはまだ危険です。早く安全なところに逃げましょう。

「アティラーノン、ニコラス刑事退場」

スケアリー…ちよいと、その二人！ どこに行くんですの？ 待ちなさい！

「スケアリー、二人を追うがその前に予言者が現れる」

スケアリー…何なんですのあなたは？ その格好はどう考えても予言者ですから、あなたは予言者ですわね？

予言者…なんとということだ。伝説が…。私の予言は完璧だったはずなのに。

スケアリー…あなた、もしかしてニコラス刑事様に何かヘンなことを吹き込んだりしてないでしょうねえ？

予言者…誰だおまえは？…そうか、エフ・ビー・エルだな。おまえも予言を信じない者の一人というわけだな。

スケアリー…どうでも良いですけど、おまえって呼ぶのやめてくれませんか？ ムカつきますわ。あたくしはスケアリー特別捜査官ですわ。

予言者…そうか。予言を信じないスケアリー特別捜査官。私はここにテロリストを集め、エニホエア王国を乗っ取るうと企んでいたのだが。伝説とは馬鹿に出来ないものだ。スケアリー特別捜査官も少しは迷信深くなった方が身のためだぞ。

スケアリー…つまり、あなたがテロを企てていた張本人というワケね。でしたら、あなたを逮捕いたしますわ。



予言者…そうではない！ 私はただエニホエア王国の王になりたくて…。

スケアリー…ごまかしてもダメですわ！ 今時、テロはかなりの重罪ですよ。あなたはどこの国の法律で裁かれるかわかりませんが、エニホエア王国の法律で裁かれた方が良くも知れませんか。首を一日に1ミリずつ切り落とされたいんですわ！

予言者…ああ、なんということだ！

「スケアリーの携帯電話が鳴る。着信音はまたなぜかスキヤナーの歌のメロディーになっている」

モオルダア「声だけ」…ああ、スケアリー？ ボクだけど。なんだかヒドイ話だよ。大手町にいたのは「角が迷路になっている羊団」だったんだけど、それが実は大道芸人のグループだったんだよね。ボクはてっきりあの予言者が連れてきたテロリストだと思ってたけど。大道芸人ファンの間では人気らしくてね。ボクも見てたけどけっこう面白かったよ。スケアリー…何を言っているんですの？ こちらでは今大変なことになっているんですのよ！

「予言者、こっそり逃げ出す（退場）」

モオルダア「声だけ」…大変なことって？ まさかテロがあったんじゃない？

スケアリー…あぶないところでしたけど、あたくしの活躍で何とかくい止めることができましたのよ。たった今、あたくしがテロの首謀者を捕まえて…

「スケアリー…予言者が逃げたことに気付く」

スケアリー…コラ！ 待ちなさい！…モオルダア！ あなたのせいですからね！

モオルダア「声だけ」…えっ?! 何が？

「スケアリー、予言者を追いかけて退場」

ドチラーノン…これで全てがまるく収まったと思いますか？　あなた。  
ドコデーモス…これで全てがまるく収まったと思いたいね。  
ドチラーノン…災い転じて福となし、幸せの先にあるものは、地獄の業火やもしれぬ。  
ドコデーモス…どうしてそんなことを言うのだね？  
ドチラーノン…私のネガティブな本質は変えられないのですよ、あなた。

[Exeunt]

## 16 さびれたデパートの中

アティラーノン…ああ、とうとう出会えたんだわ！　あたしが夢に見た未来の王様が今、目の前に。あなたはあたしの夢みた人でもよろしかったでしょうか？

ニコラス刑事…アティラーノン姫。落ち着いてください。なんのことだか解りませんよ。

アティラーノン…そうでしたわね。あなたのお名前はなんというの？

ニコラス刑事…ニコラス刑事です。

アティラーノン…ニコラス刑事様。きっとあなたも気付いているはずですよ。島の伝説が巡り合わせた二人ですもの。そうよ、きっと気付いているの！

アティラーノン「歌」

愛に偽りは無いの

排ガスの国の伝説の人よ

あなたの眼差し

受け止める姫はここにいます

ニコラス刑事「歌」

愛の衝撃が走る

伝説の島の麗しの姫よ

あなたにこの気持ち

今ここで全てを伝える

アティラーノン、ニコラス刑事「歌」

二人はいつも

心の奥の

底のその先で

迷える羊の角には

迷路があるの

心の中の

奥のその先で

二人は巡り会う

ニコラス刑事「歌」…アティラーノン！

アティラーノン「歌」…ニコラス！

ニコラス刑事「歌」…アティラーノン！

アティラーノン「歌」…ニコラス！

アティラーノン、ニコラス刑事「歌」…アニコーラーン！！

「ドコデーモス、ドチラーノン、エキストラ達入場・歌」

排ガスの中、二人は出会う

恵みの島の新たな王子

ドコデーモス「歌」… 予言はいつわり  
ドチラーノン「歌」… 伝説はまこと

ドコデーモス、エキストラ達（半分）「合唱」  
アティラーノン！

ドチラーノン、エキストラ達（残りの半分）「合唱」  
ニコラス！

ドコデーモス、エキストラ達（半分）「合唱」  
アティラーノン！

ドチラーノン、エキストラ達（残りの半分）「合唱」  
ニコラス！

全員「合唱」

アニコーラソン！！！！

アティラーノン…ニコラス様。あたしと一緒に島へ来てくれますか？

ニコラス刑事…もちろんですとも。あなたの望むことなら、どこへでも行きましょう。

アティラーノン…ああ、ニコラス様！

ニコラス刑事…アティラーノン姫！

[Exeunt]

「ばあや、エキストラ1（清掃員）、エキストラ2（清掃員） 入場」

エキストラ1…ダメですよ。館内は禁煙なんだから！ タバコは外階段の踊場で吸ってください。

ばあや…そんなことを言われてもな。おまえにはさっきまでネコにされていた人間の気持ち解るのか？

エキストラ1…解りませんよ。というか、そんなことはあり得ませんからね。

ばあや…見てもいないのにあり得ないなどというな。

エキストラ1…あり得ないから見ること出来ませんよ。

エキストラ2…そんなことよりさあ。さっきのアニコーラーン！ っていうのは何だったんだ？

エキストラ1…そんなのオレに聞いても解るわけないだろ。

ばあや…おまえ達は何にも解らないのだな。

[Exeunt]

## 17 数日後、FBLペケファイルの部屋

「モオルダア、座って何かを読んでいる」

「スケアリー入場」

モオルダア…ああキミか。

スケアリー…ああ、じゃないですわよ。何なんですか？ その態度は。

モオルダア…別に、いつもどおりだと思うけど。それよりも、この記事読んだ？ エニホエア王国でクーデターだった。クーデターといっても王様が日本に来ている間に国民が宮殿を占拠したということ、血なまぐさい話はなかったんだけどね。それで、日本から帰った王様御一行は島に着いたとたんに新しい政府によって逮捕されてしまったんだと

か。おかしいことに、なぜかその中に日本の警察関係者がいたということだけど、特に問題ナシということで釈放されたみたいだよ。でもその警察関係者というのは王様御一行と一緒に投獄されることを望んでいたらしいけどね。何でだろうね？

スケアリー…あらまあ！ それはつまり、その警察関係者の人というのは日本に帰ってくるということですか？

モオルダア…そうだと思うけど。なんだかミョーに嬉しそうだね。

スケアリー…そんなことはございせんわ。でも伝説も予言も結局は信用しちゃいけない話なんですわね。何事も、あたくしのように科学的な視点で分析しないといけませんわ。

モオルダア…どんな視点で分析するにしても、科学では解明できないおかしな出来事はまだ沢山あるんだぜ。

スケアリー…なんですか？ 「だぜ」って。ムカつきますわ！ それにその資料の山は何なんですの？

モオルダア…これは、これまで作者がサボっていたおかげでたまりにたまったネタの数々だよ。

スケアリー…まあ！ それだけあったらシーズンがいくつまであっても足りませんわ！

モオルダア…でも作者のことだから、実際に文字になるのはこの中の半分にも満たないと思うけどね。とにかく気を引き締めて行かないとね。もう今回みたいなヒドイ話はまっぴらだよ。

スケアリー…そういえば、あなたそろそろ歌ったらどうなんですの？

モオルダア…まあ、それはまた次の「ヒドイ話」でね。

[Exeunt]

## あとがき

シーズン2縦書きPDF版の3巻目はそれなりにオリジナリテイのある内容になっていくかと思えます。二話で完結する「KINMOE」と「隠れ家」ですが、シーズン1最後からシーズン2最初まで続いた話に出てくるネコ科の動物の特徴を持った何か、というのが再び登場しているような感じに。

ただ、あの当時の私がこの生き物にまつわる話をその後どういうふう展開させようかと思っていたのか、良く覚えていないのですが。或いは何も考えていなかったのかも知れませんが、この話以降、こういつた生き物が出てくる話はないかかります。今回の縦書き化で思い出せたので、今後の話に登場させても良いかもしれませんが、下手にやると話が先に続かなくなったり、過去の話と辻褃が合わなくなったりするので慎重にいききたいところです。

そして、これまでの全シーズンをとおしても一番の問題作かも知れない「歌と劇…プロフェシー」の登場。始めは脚本形式で書く予定だったのですが、登場人物に歌を歌わせてみようということになって、さらにそれだけではもったいないので、実際に作曲までしてみたり。さらに今回の縦書き化に伴い、ゴージャスにアレンジされた曲も発表。これによってさらにくだらなさに拍車がかかっています。

元のピアノ伴奏の時には気付かなかったのですが、今回一緒に発表された曲集を聴いてみると、私の音楽性みたいなものが短い曲の中に凝縮されているとも思えます。そういう意味でもこの曲集は聴いてみて欲しいのですが。でもこれを読んでいる人がいつこれを読んでいるのか、ということは解りませんし、その時に公開しているサイトがなくなったりすると聴くことが出来ませんけど。そういう時には持っている人を探して聴かせてもらうしかありません。持っている人がいるかどうかは知りませんが。

そして、この話の最後のオチはシーズン2の最後に公開された「シーズン2の真実」の中でばあやのインタビューとしてかかれていたりします。さらに後に作られたスズキ・ピヨニカさんのシングルのB面という設定で公開された劇中の曲「珊瑚礁のラビンス」では、劇中では歌われなかった二番の途中からの部分も明らかにあって、その後の彼らの運命が暗示されているとか。

こうしてわざわざ曲まで作って書いた「歌と劇…プロフェシー」ですが、この作品で作者が一番伝えたかった事はなんなのか？ という事を書いておきます。それは「アティラーノン姫があちらの方へ行った」とか、そういう台詞のある部分です。その他はオマケみたいなものです。マジで(?)。

2015年3月 Little Mustapha

## 著者について？

名前 Little Mustapha

経歴 以前に自称ネットアイドルと書いていたのは冗談である。自称家具職人としては折りたたみテーブルをホントに作ったことがある。その他全てに「自称」を付けないといけないのかも知れないが、それを避けるためには「彼の経歴はLittle Mustaphaである」といえば良いのである。

ホームページ Little Mustapha's Black-hole (<http://bit.ly/1NUEZQ5>)

コンタクト [little.mstph@gmail.com](mailto:little.mstph@gmail.com)